
PSPo2i—英雄、その後

Angelica333

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PSP02.i—英雄、その後

【Zコード】

Z2686V

【作者名】

Angelica333

【あらすじ】

PSP02.iの二次創作となります。

グラールを救つた英雄も、大きな事件がなければ一人のヒト。一躍有名になつたキャストの「マリー」も、増えすぎた任務にヘトヘトになりながらではあるけれど比較的平和な日々を過ごしていたはず、だった。

「Wの田舎（前書き）

（一）三十九ページのページを開いてください。左上に「三九」、右上に「一」

キヤストが合理的でなかつたりキャラの口調が安定しなかつたりしますが読んでくれたらそれはとても嬉しいなって。

それでは、どうぞ！

LWの日常

マイルーム前通路

女キヤスト？「もう日付回っちゃったかあ……何か今日は一段と疲れ
たなあ……？」

つてーえー?ああああああああー!」

ショインツ

女ヒローマンへ、「うむ、こなー今何時だ」と囁つて、つてアコーアジん！

一体どうしたのー!?

...תְּרִיבָה וְחַדְשָׁה

マリー「わ、私の部屋の入り口に...」キリが...」

ヒューマンズ

これは、少し気弱な英雄と、彼女を取り巻く「社員達の平凡な日常の物語。

ヒロコア「…まあ、その…といつあえずあたしの部屋、来る?」
マリー「喜んで!」

登場人物紹介（前書き）

出演予定の社員達を紹介します。

物語の設定資料のようなモノなので、必要ないと感じたら飛ばしてください。

新しいヒトが出来たらひとつ追加するかもです。

登場人物紹介

マリー・M・ミスラ『やればできる子』本作の主人公。キャストの女性。ハンター。

気弱な面が目立つ「英雄」。こじぞと言つときにはやれる子（本人談）。

イニシャルが全部Mなのは開発者の意向らしいが真ん中のMはミドルネームではなく製造番号。

エミリア・ミュラー『天才少女』

傭兵にして天才科学者。ブレイバーのヒューマン女性。

明るく活氣がある少女。グラールに類を見ないほどの天才。孤児であつたがLWの実質的な責任者クラウチの養子となつた。彼女曰く孤児時代は黒歴史。

クラウチ・ミュラー『魔弾の狙撃手』

LWの任務幹旋役。ビーストハンター。男性。

通称「おっさん」。家族大好きでエミリアに対して過保護。要するに親バカ。

いろいろあつてウルスラと結婚。欠片騒動以後ナギサのことも気にかけるいいお世話役。

ナギサ・アーデルハイト『世間知らずの剣士』

剣の腕も考えも常識知らずなデューマンの女性ハンター。ハウザー姓は捨てた。

常識知らずが褒めているのか貶しているのかわからないほどズレている剣士。

とはいえ戦力としては確かなもので、特にソードの扱いに長ける。

エイダ『ベストパートナー』

マリーのパートナーマシナリー。普段の仕事はメイド。

マリーとは対照的に強気。そのためメイドのくせに主人を主人と扱わないときも。

でも行動理念は「マリーのために」なのでどうあれどマリーに対する思いは一途。

イーサン・ウェーバー『世界を救つた英雄』

SEEED事変を終結に導いた英雄。今はガーディアンズ総合調査部に所属のヒューマンハンター。

剣の腕は超一流。主にダブルセイバー・エンシェントクオーツを使う。

普通の人と同じく、泣きもすれば笑いもする。英雄扱いを嫌う。

カレン・エラ『星靈の代弁者』

現在はガーディアンズに復職中のイーサンの元教官。ヒューマン。ツインダガーとロッドを使い分けるハンター。

元幻視の巫女というとてつもない経歴を持つがやつぱり普通のヒト。

ヒュー・ガ・ライト『イケメン社長』

イーサンの元パートナー。ガーディアンズ出身の現GRM社代表取締役ブレイバー。

悪く言えば女好き、よく言えばレディファーストの紳士。デューマンに組成変化するがちゃっかり適応して出来るヒト。片手剣の腕は超1流。

ルミア・ウェーバー『新進気鋭』

イーサン・ウェーバーの実妹。意外と兄が大好きなフォース。ロッ

ドを多用する。

プライベートではイーサンをお兄ちゃんと呼ぶ『鬼教官』。胸と男っ気がないのが悩みらしい。

リコ=タイレル『フロウウェンの後継者』
惑星ラグオルの第一次開拓移民、「パイオニアー」のハンター。種族はヒューマン。
赤のセイバーを主に扱い、その腕はドラゴンの首を一撃で落とすほど。

インフレ化してきたが「英雄」と呼ばれる人。だが本人曰く『英雄は一人じゃない』。

ヒースクリフ・フロウウェン『白髪公』

リコと同じくパイオニアーに所属していた軍部の高官。ヒューマンのハンター。

軍の英雄と呼ばれたが、ダークファルスの侵食を受け、一命を取り留めるも重体に。

実はリコの扱う「赤の」系統の武器は彼の製作物。

登場人物紹介（後書き）

12 / 14

リコとヒースのおじさまを追加。
ナギサの項目を一部改定。

HIIリニア「ある上がりこきなよ」（前書き）

物語の始まりとなります。

…が、何分初心者なので文の構成等々アドバイスいただければなー、
と思います。

それではさぞうがー！

H//ニア「ああ上がってこめなよ」

——H//ニアのマイルーム

H//ニア「虫一匹に絶叫とは…あんたつてさ、つづづくキャストっぽくないよねえ？」

マリー「だ、だつて奴だよ！？…ああもう想像しただけで鳥肌がつ

奴、とは言わすもがな。黒くてかわかと高速移動するあの虫の」と
である。

H//ニア「キャストなのに鳥肌立つんかい！？」

…そりや、あたしだつていきなり奴と遭遇したら、思わずラフオイエ撃ちかけるけど…

マリー「…私接近戦だから剣に奴の体液が付くと強いつもり…ね

H//ニア「あ、そりやイヤだわ…ってグラスマサッシンとかを樂々
切り倒しといでそれ気にする！？
てかあの速さのあの小さきを切り殺すつもりだ
たんだね！？」

マリー「…あ、アックスの側面で押しつぶせば

H//ニア「つ…そんな落ち着いた発想ができるなら叫ばないでよ…

あたしが鳥肌立つてきたわー」

マリー「…やあはは…テンパつちやつて…」

…こういつつ、頭を搔く。

…苦手な物は苦手なのだ。

H//コア「全くもつ…」

マニー「やー、お騒がせしおやつビーメンねー。」

H//コア「全くよ…もつ、折角思い立つ…何でもない…」
マニー「…何か、考え事でもしてたの?」

H//コア「いやこや向でもなこですよー?」
マニー「座じて…ナビ、ナム言こたくなこなら寝こか
「あがこに寝て」

H//コア「私は辺りを見渡す。

…」れは、ひどー。

H//コア「そそ、察して察して…」
マニー「むう…あ、そうだH//コア?」

H//コア「ん?改まつちやつてなんでしょー?」

H//コアの方を向き直つ、勇氣を出しつづけ。

マニー「部屋の上づか…手伝おつか?」

H//コア「つ…全く話題変わつたなあーーー。」

H//コアの呟きは、夜の静かな空氣を吹き飛ばすほど大きかつた。

Hイダ「マスターの帰りが遅い」

——H//コアのマイルーム

ピンポン、と。真夜中にいきなりインターフォンが鳴った。
さつきなんだことだ苦情でも来たか、いやいやそんなことは
そんなことを考えていると、ドアが開いた。

？？？「失礼します。夜分遅くにすみませんがH//コア様、
私のマスターがお邪魔してませんか…ってうわ！」
H//コア「わってなによ！そんなにあたしの部屋汚いの…？」

来訪者はびっくりしたとか…パートナーマシナリーだった。
しかも普通に悪態までつくといふ。

マリー「うそ、これは私には擁護できないよH//コア…」
H//コア「思わぬところでの対一だ…？」

マリー「あははは…ね、Hイダもこいつ来れば…まだこの辺は
Hイダくらになら座れるよ…つてあれ？…どしたの？」

Hイダと呼ばれたそのマシナリーはしかし、
玄関口で下を向いて震えている。

Hイダ「…許可をくださいH//コア様」
マリー「…んん？ああ、あっしゃー…」

H//コア「あ、あたし？」

エイダ「この部屋を掃除する許可を」

エミリア「えつ？」

エイダ「こんな部屋見て片付けずにしてどうしますーー？」

メイドの名折れですよー！」

エミリア「ええと、その…メイド…マリー、これって一体ビーカー状況？」

マリー「あー、その…せめて良いんじゃないかな？」

これは、話すと氣味が悪い。

私は説明を放棄して、立ち上がった。部屋を出るためだ。
…私のパートナーマシナリーの『エイダ』は、少々特殊で。
…マスターと呼ばれてはいるものの、私の言うことすら却下すると
いう

本当に一人の「同居人」みたいなものなのだ。

エイダ「エミリア様」

エミリア「は、はいっ」

エイダ「許可を…頂けますか？」

エミリア「（目が怖い目が怖い目が怖い）お、お願ひしますー！」

許可をもらひつなり、詰め寄っていたエミリアからパッと離れるエイダ。

エイダ「ありがとうござります。それでは私は早速この部屋の清掃に取りかからせていただきますので、恐縮ですが

マスターの部屋へとご移動願います。

清掃が完了したらお声を掛けさせて頂きます

マリー「おっけー……」

簡単に言つてから思ひ出す。

私がこの部屋に避難してきた理由を。

マリー「エイダ、えと、その、部屋の前にいたアレは……？」
エイダ「心配なく。完全に駆除しておきましたのド。」

マリー「あつがとうエイダ大好きー！」

エイダ「くつつかないでくださいマスター」
そつ言つて反射的にエイダに抱きつぶ。
… 辛辣な言葉で返された。

エイダ「くつつかないでくださいマスター」

——マリーのマイルーム

H//コア「ほえー……」

マリー「ほえー……つてどうしたのH//コア？ 口開いてるよ~。」

H//コア「ううつー？ …いや、改めて見るとマイルームって、

こんな広かつたんだなあって」

マリー「ああ、これはそう見せる片付け術があつてね……」

H//コア「すいこじゅんマリーー最初の頃の記憶しかなかつたから

『あの殺風景な部屋か』とか思つてたんだけじ正直見直したわ！」

マリー「何かほめられてる気がしないけど…」

まあ私がHミリアのルームに行く方が増えたからねえ」

Hミリア「本当お父さんの粋な計らいにも感謝だよねえ」

『お前ももう一人部屋で大丈夫だらう』とかさあ…」

マリー「あ、おっしゃって言わなくなつたね。偉い偉い！」

Hミリアの言う「お父さん」とは、彼女の本当の父親ではない。つい最近までいがみ合つていた養父だ。

まあ、色々あつて今では一人はとても仲がいい。

Hミリア「ばつ…」

マリー「あら茹でダコみたいに赤くなつたりやつて」

Hミリア「…そ、それは…！」

だつてもつお父さんだし?今までお世話になつてき
たなー、とか

ほんのちょっとぴりだけど思つてきたり?それ…」

マリー「あ…あー、えと、もしもーし?」

…だめだ、完全に自分の世界入つたりやつてる…」

ハイタ「マスターの帰りが遅い」（後書き）

えーと、主人公のキャラが行方不明ですねすいません><；

安定するよう努力しますんで生温く見守つてやつてください><；

H//リア「徹夜は日常茶飯事でね?」

——マリーのマイルーム

マリー「ぐああ…はう。…H//コアつたらまだ自分の世界から戻つてこない…

まあそれだけ家族ができたことが嬉しいのかな?
…私にはエイダくらいしかいないからわからないけれど。

…まだまだ話し終わらないとは…元気だねえ…」

眠気に立ち向かおつとしたのだけれど。
私の意識は夢の世界へ旅立つていった。

H//コア「それでね…」

エイダ「遅くなりまして申し訳ありません。清掃完了いたしました」

H//コア「おー、なんかありがとね?」

エイダ「いえ、私もしたいことをしただけですの構いなく

H//コア「相変わらずお固いねえエイダは…」

エイダ「そうでしょうか?」

H//コア「私のマシナリーなんて勝手に私のお菓子食べ出すんだよ

!?

エイダ「…それは…ちょっとどうつかと…」

エミコア「でしょ～？まあ良い奴なんだけどねえ…」

エイダ「そう言えば先ほどの清掃時にマシナリーを見かけませんでしたが」「

そつ言いつつちやっかりエミリア様の対面に座つてみる。

…イスに座つたら足が地面に着かず、ぶらぶらわせておく。

エミコア「ああ、あいつ今定期メンテなのよ。だからGRM本社にいるの」「

エイダ「成る程、そういうことでしたか。」「

エミリア「うん、まあいらないならいで寂しいもんだねえ…」「…エイダ「でしたら私どもの所へ来ていただければと思いますが。

マスターは基本、任務時以外は暇人に分類されると思われますので。」「

エミリア「そして相変わらず容赦ないねエイダ…」

エイダ「事実ですでの

エミリア「そんなことってマリー怒んないの？」「

エイダ「怒るも何も…マスターですから…」「

はあ、とため息を一つ。私のマスターは気が強い方ではない。
…いや、気が弱い、と言つても過言ではない。

エミリア「なるほど…なぜか納得できる

エイダ「私としてはもう少し自信を持っていただきたいのですが…

メイドに言つ負ける主など聞いたことがありませんか

昔はこいつでせなかつたのだけれど、と。
聞かれないうちに口の中だけで呟く。

H//コア「違いないね…」H//Hの話題にも全く混ざつてこないじへ。

H//イダ「ああ、それなら」

H//コア「？」

H//イダ「マスターはあの状態でもうすぐ戻る中ですか？」

H//コア「…起きると思つてたよ今まで…!？」

H//イダ「もうおひしゃせらねましても…無理はないかと」

そう言い、備え付けられた時計に手をやる。

H//コア「おー、マリー…ん? 無理がなってビリーフ?」

H//イダ「… H//コア様、ただいまの時刻は05：14です」

H//コア「… 24時制で？」

H//イダ「もちろんです」

H//コア「… あたしじんつぜん眠くないんだけど…」

H//イダ「あれだけしゃべり通しておられれば、無理もないかと」

H//コア「… あたしじんつぜん寝くないんだけど…」

H//イダ「… H//コア様、ただいまの時刻は05：14です」

H//コア「このマスターのサポートをしなければなりませんし」

H//コア「うう。あいかわ、あたしそうそろ帰るわあ」

H//イダ「資料は分類」とファイリングしてありますので

Hミコア「やー、何から何までありがとお~。」
エイダ「いえ、お気になさり。」

Hミコア「んじゅめたね~、マリーもみじへまつところ。」
エイダ「承りました。お気をつけ~」

そう言い、Hミコア様を出口まで見送る。
…とはいえ隣の部屋なのだけれど。

エイダ「…全く、世話のかかるマスターですね。」

冷房入れっぱなしで毛布もなしにしかも椅子で寝ると
か。

毛布…みつブランケットの方が良きやうですね

ゴソゴソ、と。
ドレッシングルームの奥からブランケットを持つて来る。

マリー「…うん…」

エイダ「心配する身にもなってくださいよ。本当にもう…」

テーブルクロスをかける姫領でマスター…』マリー『に被せる。

マリー「…す、…」

エイダ「…ふふつ、だひしない顔しきりつて

くすり、と小さく笑つ。

心なしが、マスターも小さくほほえんだよつて見えた。

マリー「…うう…ん…」

エイダ「あ、こんなマスターじゃ私がいなけれどいいな」としゃがみ。「明日も頑張れそつです。ありがとうございます、マスター」

マリー「…ううん、エイダあ…」

エイダ「おやすみなさい、良い夢を」

H//リア 「徹夜は日常茶飯事ですね？」（後書き）

はいダラダラですね（段

進行は遅いかもですが基本日常なので許してください。v.v.v.v.

マー「朝は食欲ない…」(前書き)

汗 8／6追記 矛盾点をなくしたりよひとだけ内容にじつました(

マリー「朝は食欲ない…」

――マリーのマイルーム

「…マ…一…起… も…。マスター？」

心地良こまじりの中から私を引き戻す声がする。

マリー「…んー?エイダ…?…あ、おはよつ…ふああ…」

そう言って大きく伸びをする。

エイダ「おはよつ!やこますマスター。

早速ですが朝食はシリアルヒースト、
どちらになさいますか?」

マリー「ん~、お腹すいてないからパス…つていつのま…」

エイダ「いけません。朝食は一日のエネルギーの源だといいますし、
きちんとお摂りになつてください」

マリー「キャストだし大丈夫だよ~…」

エイダ「いいえいけません。いくつキャストとはいえ、

マスターのエネルギー源はヒートと同じ食事でしょ~っ?」

マリー「…うー…わかつたよ~じやあシリアルで…」

エイダ「かしこまりました。それでは少々お待ちください」

マリー「はーい…んんつ~!とと…危ない危ない転ぶ転ぶ…

朝に弱いとか…自分で言うのもなんだけど、

キャスト『ねえ…』

酔狂な博士に作られたやつもんだ…』

そんなことを一人ごちながら、エイダが朝食を運んできてくれるのを待つ。

…そこでようやく、自分が椅子で寝ていたことに気付く。このプランケットは…エイダがやつてくれたのかな。

エイダ「マスター、準備が整いました。

シリアルはフルーツ含有の物でようしかったでしょうか？」

マリー「ん、それでいいよありがとー」

ありがとー、二つの意味を乗せたのは内緒だ。

エイダ「いえ、それでは私はこれで。お食事がすみましたらお呼びください」

マリー「ん…そうだ、エイダも一緒に食べない？」

エイダ「いえ、私は有り合わせでますますので。

そのお気持ちだけいただいておきます」

マリー「シリアルができる有り合わせって一体…まあいいか。じやあいただきますっ」

エイダ「どうぞ」

エイダはもう三つと、何気なくプランケットを持つて下がつていた。

マリー「毎回一人で朝ご飯は寂しいから一緒に食べたいって思ったのこなあ…

…押しのが弱いのかなあ？でもなあ…」

マリー「押しを強くとか無理無理。それなら性格を変えなきゃね～それこそ無理、か…」

マリー「…くそう美味しいなこれ…明日もこれにしてみる…明日もエイダと食べてやるんだから…」

マリー「命令すればいいんだらうなび…嫌々一緒にってのは嫌なんだよなあ…

けど一緒に食べたいし…ん～…あ、食べ終わっちゃつた

た

その台詞を待つていたかの？」とベビーからかエイダが出てきた。

エイダ「では食器お下げいたしますね」

マリー「ううわあー…エイダ、もしかして聞いてた？」

エイダ「…何を？」

マリー「こやこや聞いてないならいいんだなび…」

聞かれてたらそれはそれで恥ずかしいし、ところのほ言葉にならな
い。

エイダ「…まあ、そうおっしゃるのなら『はしません』が

マリー「せうそつ構わないで大丈夫だよ～」

エイダ「…こつこましても変ですねマスター。熱でも？」

「マリー……それはさすがにないかなあ。仮にもキャストだし」

エイダ「まあそうですね。お出し物はドレッシングルームに入つてすぐにさげてありますので」「ペコリ

まあそうですね……また今日は一段とドライだなあエイダ。

マリー「道のりは長そうだなあ……

今日はアリス・リーパーか……任務入つてたっけ?」

手早くパーツを装着して、予定を確認する。

マリー「ビジフォンビジフォン……ん? 通信ログ? ……あつちゅー……」

……予定表を見るまでもなく、呼び出しの通信だ。

マリー「チヨルシーさんとクラウチさんから2回ずつ……

エイダ、もうヤバめだから行つてきますー! 詳細はメールするね!」

奥からパタパタと足音をさせてエイダが出てくる。

エイダ「行つてらっしゃいませマスター。お氣をつけで」

マリー「うん、ありがと! 行つてきます!」

そう言つて飛び出した私の頭は、最短ルートの検索に忙しくなつていた。

エイダ「本当に、気をつけて… もう、朝ご飯中に考え」としてゐるからですよ…

… 明日から時間の管理も兼ねて一緒に食事をとる」と
を許して

「もうこましうつか。せつと良こつて言つてくれるのでしょ
う」

私は誰ともなく笑き、小さく笑つて食器の上づけに戻った。

マー「朝は食欲ない...」(後輩)

えへへと部屋からでされました... (汗)

次にそれは任務中のやつとつを書きましたこと細かいります。.

クラウチ「じゃ、任務内容を説明する」

——リトルウイニング本部

結局、私がクラウチさんの所についたのは15分遅刻してだつた。

クラウチ「やつと全員揃つたよつだしな？」

マリー「す、すこません…」

そいつ言って肩をすぼめると、クラウチさんは豪快に笑つた。

クラウチ「何、責めてるわけじゃねえから安心しろ。

うちのバカ娘も遅刻組だからな」

エミリア「バカって何よー！遅刻はしたけど…」

そう、このクラウチさんこそがエミリアの『お父さん』。

…ちょっと前まではこんな人になるなんて思えなかつたけど。
家族思いの、いい人だ。

クラウチ「うつせ。遅刻する前に連絡入れたかどうかの違いだ」
マリー「…え？ 私連絡なんて入れる暇なかつたんですけど…？」

クラウチ「ああ、それは…エイダ、だつたか？」

お前さんのマシナリーがな」

マリー「…エイダありがとお…！」

帰つてきたらちゃんとお礼を言おう。

…うん。忘れてなかつたら。

クラウチ「ほれほれ無駄話はここまでだ。
じゃあ任務概要の説明に入るぞ」

空気が変わる。

張りつめる空氣に、自然と背筋が伸びる。

クラウチ「任務地はニュー・デイズ・オウトク山周辺地域だ。
内容は…えー、イベントの警護だな。質問は?」

マリー「は、はい」

おずおず、とだが、手を挙げる。

クラウチ「お、何だマリーからたあ珍しいな。なんだ?
マリー「えと、メンバーって私達一人だけでしょうか…?」

クラウチ「ああ、そこか。いや、現地で地理に詳しい教団警衛士と
別枠でガーディアンズが一人ずつ合流して計4人のは

ずだ」
マリー「そうでしたか…あ、ありがとうございます」

警護に二人は厳しいから、ひとまず安心。

クラウチ「他に質問は?…無いようだな、じゃ今からニュー・デイズ
に向かってくれ。任務開始は現地時間で17:00だ。
それまでに警衛士とガーディアンズと顔合わせとけ」

ヒリシア「おつけ」

マリー「了解、です」

――コントラクト、ロード――

マリー「ふう……」

H//コア「どうしたのマリー？ ため息なんつこいつって」

マリー「こせ、ブリーフィングの雰囲気つけて話すで……」

H//コア「ああ、あの息の詰まる感じね……あたしも話す

と、静かに愚痴会。

マリー「……それにーー…〇〇いつこいつ警護は夜中心なんだよね？」

…イベントって何やるのかな…」

H//コア「え～、この時期だから多分…ああ、あれかな」

マリー「え？ H//コア知ってるの？」

H//コア「ああ、マリーは知んないのか…現地にっこてからのお楽

しみへ

マリー「むっ…H//コアの意地悪…」

H//コア「ほらほら気になるなひあつねー。」

そつまつH//コアは私の後ろに回り込んで私を押し始めた。

マリー「あ、ちよ、押さないで押さないで！」

わかったわかった自分で歩けるかひー。」

クラウチ「じゃ、任務内容を説明する」（後輩も）

任務説明のこと忘れてました…

次こそは任務に入りたいと（殴
すいません調子乗りました次の次ぐらこになると思いますくくく；

マリー「何だか凄い人だかり…」

アーティスト「H.I.C」と「KANAKO」のコラボ曲

「リバ・ジン 地図によるとあの人たかりの場所が警備詔所だね」

マリー「なんで詰所にあんなに人がいるのよ…」

ざつと500人程度はいるだろうか。

…数えるのもおこづかになる人の固执いか

マリー「あそこに突撃とかホントやだなあ……裏口とかない、かな？」
ヒコア「ん~…回つてみる? あたしも突撃はしたくないし…」

「…回ねえ! と…東の方から北は回ねえ!」
ヒコア「はいはい… つて え!? 速つ! ?

脱兎の如く。

マリー「早く行こう。せらせらつちだよ。」
エミリア「全くなんで今日は」んな…そつか。あんた人混み苦手だ
つけ?」

マリー「それもある…けど。このパーティで人混みなんて確實に誰か

刺すし……

エミリア「アリス・リー・パー……刺々しいね……警護が人傷つけちゃ
元も子もないから仕方ないか。行くー！」

――警備詰め所裏

エミリア「な、なんとか抜けられた、ね……」
マリー「少ないっていっても結構人いたね……」

エミリア「だつて今日は……ん、まだ内緒」

マリー「まだ教えてくれないのかあ……本当に何があるの？」

エミリア「詰所で座れたら話す……今元気ない……」
マリー「わかつた……それにしても、もしかして裏口、無い？」

扉はおろか、窓すら見あたらないとほ
……どうしよう？

マリー「あ～っと……表に回る元気、ないよねえ……ある？」

エミリア「あたしバス。ならここで座ってる方がマシ……」

マリー「地べたは遠慮したいかなあ……えーっと、……エミリア？」

エミリア「何、どうしたの？」

マリー「今からある」と、囁つぶつてくれない？

そう言つと、私は愛刀を具現化させて、鞘から抜きさつた。

エミコア「何を……ああ……あたしは何も見てませんよ~? ...え~と...マリー?」

マリー「...何でしょ~?」

エミコア「壁一枚以上に切り過ぎないでね?」

マリー「たぶん大丈夫!...これ、斬れすぎるからわからんいけど...」

ヒュンヒュン、と軽く空を斬る。

…うん。いい感じ。

エミコア「それにしても実刀好きだよねえ...それ名前なんだっけ?」
マリー「これ?これは剣影つていいってね...やつと解放できたばかりの

今一番のお気に入りなんだ~!」

エミコア「田を輝かせんで良いから。...はい、んじゃ頼んだ!」

エミコアが壁際から退いて、私の後ろ2メートル程度に陣取る。

G.Oサインは出た。

マリー「斬りすぎたら『めんなさい』...ハツ!」

剣影一閃。

少しのタイムラグの後に、厚さ3センチほどのコンクリートの壁が
こっちに向かって倒れてくる。

…後に残つたのは1・5m四方程の穴。

マリー「...ふう、終わつたよ!」

エミコア「さつすがマリーーさて入りますか~」

穴をぐぐつて私たちは中に入る。

…これって侵入？

マリー「お邪魔しま～す…」

H//コア「こ～は…裏通路かな？」

マリー「そんな感じするね」

H//コア「さてさて証拠隠滅つと…」

H//コアが一旦外に出で壁を持ち上げようとして…みる。

マリー「…H//コアじゃ持ち上がりたくない？」

H//コア「うん…これ…はぐ、り…だね」

マリー「…はいはいやつますよつ…つづ、手が白くなぬ…
なか、なか、お、も、も、い…よいじょつ…」

一旦壁を中に入れて。

内側から壁をもつて一度ほめ直す。

H//コア「お～…わっすがマリー！」

マリー「…この隙間、どうしよう？」

少しだけ。

剣影一本分だけ、隙間が空いてしまった。

H//コア「ん…放置で…またあとで考えよつー…とつあんず今は座
りたい！」

マリー「了解ですよつー…うつかな？明かり付いてる」

…表と思われる方向に回つ込むと。

…メディアでよく見る写真の人気がそこにいた。

マリー「ええと、質問していい？」

エミコア「なに？」

マリー「あそこに居るの、って…」

エミコア「…イーサン・ウェーバー？」

英雄が、そこにいた。

マリー「だよねえ…ガーディアンズの人つてもしかして…」

エミコア「うん、それ以外はみんな警衛士だね…」

マリー「それでこの人だかり…」

エミコア「あのー、マリーさん？」

いきなり敬語で呼ばれて素つ頓狂な声を上げてしまつ。

マリー「はいつ？」

エミコア「…あんたも一応彼レベルの英雄なんだからね？」

一瞬の間。

マリー「…忘れてましたあつ…！」

イーサン「英雄は辛いぜ」

―― 警備詰所

「おこおこ！」は警備詰所だぜ？ 来ても面白くないだらうつて
「何言ひてこの一英雄を生でみられるなんて中々無いよー。」

「英雄つて……」

「イーサンともう一人！ ほりあの民間軍事会社の……」

「ああインヘルト社の時の……」

そんな会話がちらほら聞こえてくる。

……なにも聞こえないよー。

耳を塞いでいたら、H//コアに肩をつかれた。

H//コア（……マコー？）

マコー（ハハ～……）そのまま裏通路に面るので……）

H//コア（却下。椅子無いじゃん。……ほりあつちみて？）
マリー（あつちみて……給湯室、だね。……あ、椅子があるー。）

入り口を右に見て真っ直ぐ進んだ一番奥。

入り口からは遠い位置にある。……あそこも、ここも。

H//コア（静かにー。立つたら休めなくなるよー。）
マリー（「じめんなさい……でも向ひつ行くのへ向ひの部屋突つ切
るじか……）

H//コア（覚悟決めて！ 潜入任務と同じでしょー。）

マー（…）てこり」とは物陰に隠れながら、だね？（

ヒリコア（やゆじとー）の場合は机とかね？… 行きますか！（）

密かにもう一つ、任務が始まつた。

かやかやと入り口の方が熙やかで
見つかりはないかと冷や汗をかく。

（…ルルヌ端繕一ニメ

その時、入り口に動きがあつた。

イーサン「ふいー、ゴメンみんな、疲れたから休んできて良いか?」

卷之三

（たった！） = イイ

今なら皆注目は彼一人に向ける！

「イーサン、「わかつたわかつた、5分で戻るからさーなー?」
「絶対だよ!」」「待ってるからー!」「

（一九四九年）二二八

イーサン「オッケー オッケー！ じや 5分後にな！」

危ない！

危険を感じて、私は頭からスライディングを決める…決ました。

「マリー「な、何とかたどり着いたあ…飲み物飲み物…あ、アイスコ
ーヒー！」

直後。

エミコアも頭から滑り込んできた。

エミコア「潜入なんて嫌いだー！」

マリー「あ、エミコアお疲れさま。コーヒーいる?..」

「自由にどうぞ、と書いてある紙コップに注いで、エミコアに差し出す。

エミコア「飲む……っはー。ありがと…」

一息ついていると、私たちより結構大きな人影が現れた。

イーサン「ふいー、疲れた疲れた…ああーマリーにエミコアじゅねえか！」

英雄、イーサン・ウェーバーだった。

マリー「ウ、ウェーバーさん…こんばんは…」

エミコア「お邪魔してるよ~」

エミコアは物怖じしないなあ…

イーサン「来るのが遅いと思ってたらもう来てたなんて…

「体傭兵ってどんな訓練してんだ?」

マリー「あはは…」

HIIコア「ヒミツ～」

笑つて…『まかせた、かな?

イーサン「ま、いいや…あと10分で警備開始だけど一人とも準備は良いか?」

…誤魔化せたみたい。

マリー「10分休めれば上等です…」

エミリア「あたしはもうちょっとグダグダしたいけど…任務だしね!」

イーサン「相変わらずだな…まあいいや、警備ルートの確認しようぜ?」

ブリーフィングで聞いてるかい?』

確か現地で、と言つ話だつたはずだ。
頭を仕事モードに切り替える。

マリー「いえ、何も」

イーサン「じゃ、説明するぜ。俺と警衛士一人が南を回つて西に抜けるから、このルートだと…15分後に西端に着くと思つから連絡する。

で、連絡を受けたら一人も南経由で西端に来てくれ。入れ替わりに北経由で俺たちがここに戻る。』

んん?

会場は円形なのかな?

マリー「えっと… それは2班に分かれて、

円を描くよ」ぐるぐる回るとこつ」とですか?」

イーサン「やすがマリー。飲み込みが早くて助かるぜ。まあそういうことだ」

「お簽、りじこ…

まあ警護だし討伐モードを張つめなくて良いが、とまつてある。

H//コア「はいはいしつもーん!」

イーサン「なんだH//コア?」

H//コア「その田の中心部はどうするの?」

イーサン「ああ、そこは別のチームが対応するから安心してくれ。むこうも俺らと対して変わらない技量の奴ばかりだから

そこには心配しなくて良いやつ… やつべー…」

…英雄ランク総動員とは…

ますます今日って何の田なんだろう?

マリー「どうしたんですか?」

イーサン「5分たつちつたーちょっと表でてくれるナビ… くるか?」

遠慮します、とH//リアときれいにハモる。

こづこづの時」で、息ぴつたり。

イーサン「だよなあ… が、お疲れのよひだし俺らから連絡があるまでは、

そこで待機してて構わないぜー」

マリー「あ、ありがとうございます…」

Hミコア「気が利くねえ！」

イーサン「だろ？へへつ、んじゃ いつてきます！

あ、そつだ武器はスタンモードにしておいてな…」

そう言い残して、彼は飛び出していった。

マリー「…忙しそうだつたねえ」

Hミコア「ま、あたしらはゆっくりしてましょー！」

マリー「そうだ、そもそも今日何があるのか教えてよー。」

Hミコア「ん、そろそろ聞こえてくるはず…」

ヒュルルルル…ドーン！

不意をつかれた私は、癖で戦闘態勢をとる。

マリー「つわづ！何！？爆撃！？」

そう言つとHミコアにヒドく笑われた。
…なんか悔しい。

Hミコア「いやいや…今日は年に一度の花火大会だよー。」

――20分後

イーサン『一人とも聞こえてるかあ？』

H//コア「バツチリー！」

イーサン『はは、そりゃ良かった。そろそろ動き出してくれー。じゃー』

H//コア「えつちゅう… 切るのせやつー」

マニー「まあまあ…じゅ、行ひつか」

警護任務が、始まった。

——南端

マニー「…んー、特に異常なさそうだね？」

H//コア「そうだねえ…あ、焼きそば売ってる」

…実は小腹の空き具合が気になつてて。
なんて誘惑…！

マニー「…お腹すいたよね？買ひやがおー」

H//コア「…経費で？」

マニー「落ちなこと思ひなあ…」

——西端

H//コア「んー、やつぱり屋台の焼きそばは美味しい感じるなあー」

マリー「私なんてお祭り自体初めてで…こんなに楽しそうな人々…
」Jひも楽しくなつてくるね！」

H//コア「ふふーん、今度パルムでもお祭りあるから一緒にこころへ.

マリー「もううん！」

H//コア「そこまで嬉しがつてくれるとこいつも嬉しこよ

そう言って、一人で笑った。

お祭りって、楽しいものなんだ！

——北端

ドーン！

マリー「うわ、びっくりしたあ…今の綺麗だったねえ！」

H//コア「一瞬で消えちゃうといひがまたいいよねえ」

ドーン！…えてえ！

マリー「…ん？」

何か別種の…この声は聞き覚えがある。

若い女性「ひつたくり！誰か捕まえてえ！」

救難信号だ！

H//コア「マリー！」

マリー「わかってる！…対象補足、ルート推測…先回りするね！」

H//コアは女性の保護を…

Hミコア「わかつた！」

「どうやらひつたくりらしい。犯人は壮年の男性。
…速さで負けるはずがない！」

壮年男性「邪魔だじけえ！」

マリー（あーあ、せつかく楽しかったのになあ…ナビ…）

マリー「…絶つつつ対に逃がさない…」

セツの言い残して、私は駆けだした。

Hミコア「あ…あーあー、これは…」愁傷様です…」

人の合間をすり抜け、潜り、時に跳ぶ。
最短ルートで対象を捕捉した。

マリー（楽しく笑つてる人の笑顔をそんな風に奪うなんて…）

男性の進行経路上にゅらり、と立つ。

壮年男性「じきやがれえ！」

マリー「…けないで」

壮年男性「テメつじけえ！」

男性が私を突き飛ばそうと、伸ばした手を。

マリー「ヒトの笑顔奪つておいて…ふざけないで！」

壮年男性「はつ…?」「

受け流して、その勢いで。
一本背負いで放り投げた。

マリー「ハアアアアア…!」
壮年男性「がはあつ…!」

地面につちつけられた男性ののどに具現化した剣影を擋てる。
勿論、抜き身で。

マリー「あなた自分が何したかわかつてゐるの…?」
贈年男性「かはつ…ああ?てめえに關係あんのかよ…」

マリー「ないよ!でもそのポーチはあなたの物じゃない!」
壮年男性「細けえ」ことをゴタゴタつむつせえんだよーなんなんだよ
てめえ!」

マリー「(…の警備を任せられた傭兵だよ…!)
…本当は私の出番なんか無かつた方が良かつたのに…!」

壮年男性「やひつけんじやねえよー!」の…くそが…離せやあ…!」

暴れる男性の頭を、鞄でつかつける。
脳震盪さえ起こしあげない。

マリー「あなたじゃ私は引きはがせない…私、今かなり怒つてます
かい。」

下手な抵抗すると…首と体が永遠にバイバイする事になつますよ?」

壮年男性「……つち…わあつたよ…」

スタンモードで殺せるわけないんだけど。
…脅しは利くならしておくに限る。

マリー「じゃ、連行させてもらいます。念のため縛るから」

壮年男性「つせえな！好きにしやがれ傭兵風情が！」

男性をきつく縛り上げていると、HIIコアの声が聞こえた。

HIIコア「焦らなくて大丈夫ですよ！彼女なら必ず捕まえますから
！」

若い女性「はあっ、はあっ、あ、ありがと」「やれこます…」

HIIコア「落ち着けましたか？ではこひりへ。

お手数ですが荷物の確認をしてもらいます
「若い女性「何から何までどうも…あなた、お名前は？」

HIIコア「名乗るほどの者では。それはそこで犯人を締め上げての

彼女に言つてあげてください」

若い女性「ああ、ありがとうございます…」

マリー「本部へ、こちらマリー班。ひったくり犯を連行していくま
す」

教団警衛士『本部、了解』

マリー「…ほら歩いてください行きますよ

壮年男性「けつ」

HIIコア「マリー！」

「マリー」「H//ニアー、その方が？」

H//ニア「ん、やあ。それと、ポーチは？」

マリー「それはほり、ここに…中身、無事だと良いんだけど」

H//ニア「中身はみれないしねえ…あの、いらっしゃっても？」

若い女性「はい。…ああ、あなたが…なんとお礼を申し上げたらいか？」

女性はまだ若いのに良い着物を着ていた。

…祭り、楽しみにしてたんだうつな。と、ふと黙り。

マリー「いえ、私はそんな…」

若い女性「もしよろしければお名前を伺つても？」

…しまつた。断り方がわからない。

観念して、正直に自己紹介をした。

マリー「…えと、傭兵会社リトルワイング所属のマリーと申します
若い女性「…あら?どこかで聞いたような…」

メジ、と呟つたのも束の間。

騒がしくなったのはギャラリーだった。

「おこ、リトルワイングのマリーって…
嘘だろ、あの!？」

マリー「ええと…わ、わたしは犯人を連行するからー。H//ニア後任
せるね!」

壮年男性「バカッ、引っ張ん…イテテテ！」

三十六計逃げるにしかず！

私は男性を引きずるのも構わずに駆けだした。

エミリア「えつ、ちょ！？…あーあー犯人引きずっちゃって…」

若い女性「あの…」

エミリア「はい、ああ、ポーチはここに。中身の確認をしていただ
いても？」

若い女性「ええそれは…あの、彼女は一体…？」

エミリア「…あー、えー、はい。

彼女こそが我が社が誇る『英雄』、マリー・M・ミス
ラです

イーサン「英雄は辛いぜ」（後書き）

長い上にグダグダ、戦闘という戦闘もなしですいませんへへ；

さてもう少しだけ続きます（汗

H//コア「やつと戻つてこれた……」

——警備^{けいび}所

ひつたくつの男性をウエーバーさんに引き渡したといりで少し血圧休憩。

…とこつ言訳で詰め所の中でアイスコーヒーをすすつてこると、H//コアがずいぶん疲れた様子で帰つて来た。

マリー「あ、H//コア。お帰りなセニ」

H//コア「全くもつ…あの一帯スゴい騒ぎになつたんだからね?」

マリー「う、うめんなセニ…」

H//コア「こや、怒つてゐわけじゃないんだだけビレ…で、不屈き者は?」

マリー「ああ、彼なら…ウエーバーさんが怒つて『矯正してやる』って

H//コア「…うわ…えげつなつ…」

そつとつて露骨に引いたH//コアの顔はひきつっていた。

…まあ、彼直々の指導と考えれば…『愁傷様、かな。

マリー「まあまあそつとわざんで、そつちはじだつた?」

H//コア「あー、後日またお礼がしたいつて言つからクラッピング改めて

来るつてさ。義理堅いお姉さまだったよ…意志も堅

いし……」

マリー「あはは、そつか。…ポーチの中身、無事だった？」

Hミコア「ん、それに関しては大丈夫だった。といつても中身メセタカード

くらいだつて言つてたしね」

マリー「そつか。よかつたあ…」

Hミコア「ほらほら座つてないで。まだまだお祭りは1時間くらいあるんだから見回らなきやー。」

…お祭りが楽しいのはわかるんだけど、と前置きして。

Hミコア「…はあ、顔バレした状態で警備があ…」

マリー「堂々としてなつて！逆に気付かれないかもよ？」

Hミコア「…そつかなあ…うん、がんばるー。」

マリー「そうそつー観光客に混じつて警備してけば良いくつてー。」

Hミコア「うん…ありがと、勇氣でてきた」

マリー「大の男を叩きのめした奴が何言つてんだか。さ、行こー。」

そう言つたHミコアに背中を押されて詰め所をでる。

Hミコア「…うんー。」

がやがや

マリー「なんか心なしか見られてる気が…」

エミリア「大丈夫、気のせいじゃないと思つ」

マリー「そこ…ううう…」

エミリア「ほらほら自然に！あ、リンゴ飴食べたい！」

マリー「あ、待ってよエミリアあ…！」

がやがや

マリー「エミリア、私リンゴ飴つて初めて食べたけど美味しいね！」

エミリア「そういうえばリンゴ飴つてなんで屋台にしかないんだろう

…」

マリー「…屋台でしか人気がないから売れないとか？」

エミリア「うーん…あたしならカフェでも普通に買つんだけどなあ

…」

がやがせ

H//コア「食べ終わっちゃったね。次は…」

マリー「H、H//コア良く入るね…私結構キツいよ…？」

H//コア「ほら、甘い者は別腹つて言ひじやん。」

マリー「リング丸々1個を別に入れられるお腹つて一体…」

ヒトの神秘…」

ヒュルルル…ドーン！

H//コア「たーまやー！」

マリー「ん？ H//コア、何そのかけ声？」

H//コア「えへへ、実はよくわかんない…」

マリー「H//ミリアにもわからぬことつて…」

H//コア「まあ、なんか叫びたくなるじやん？」

マリー「それはわかるー。」

H//コア「だからまあ…いいんじゃない？」

ヒュルルル…ドーン！

「「たーまやーー！」」

がやがや

H//コア「あ、チヨコバナナ！」

マリー「チヨコ…ばなな？」

H//コア「あー、見た方がわかるか…おつかやん…これ2本…」
おつかやん「あこよまいどつー！」

H//コア「はこマリー。これもぼぼ屋台限定の食べ物だよー。」
マリー「チヨコに、バナナ…頂きます…お、美味しいよこれーー！」

H//コア「あれ、なんかデジャヴ…」

マリー「Hミリア、花火大会つてスゴいね！

美味しい物がいっぱい！」

H//コア「…あー、初めてプリン食べた時のコート見てる

みたいなんだ…納得」

マコー「えへへ…」

Hコア「こや、なぜ照れる

がやが

マコー「ん~…」

Hコア「ひったのマコー?」

マコー「いや、ね?…何でみんな浴衣なんだろ?って思つて
Hコア「それもそりだね…ほら、なんか風情があるじゃん?」

マコー「やうだね、何かとつても風景に似合つ感じ」

Hコア「まあ伝統が何たらひじこけどそれでこいと細かい」

マコー「お祭りだしね…」

Hコア「やうやう…」

ピーンボーンパーンボーン

Hコア「…放送?」

放送の内容は迷子のお知らせだった。

マリー「迷子かあ…」「コーマンの女の子、赤とピンクの浴衣…？」
エミコア「一人でちつちつ子なうれいチヨコバナナの所にいた
『氣が…』」

そつこえぱそんなん子もいた、よつな、『氣がする。

マリー「…ものは試しで行つてみよつか！」

がやがや

少女「…おかーん、ビ」お…？」

丁度チヨコバナナの屋台のすぐ脇に。

放送の特徴に合つ小ねな女の子が半べそで立つていた。

エミコア「あ、いたー。」

マリー「」コーマン、赤とピンクの浴衣…「うん、この子かな？」

少女「…おねーちゃんたち、だあれ？」

…嘘も方便、怖がらせないよつて、怖がりせなこよつて。

マリー「あなたのお母さんに言われてあなたを探してたんだ！」

や、こっしょにおぬさんとのじゆに行ひつ。

少女「おかーさん…」

マリー「ほり、おねーちゃんが肩車してあげるから、おぬさん見つけたら

教えてね?」

H//コア「ひゅー、マリーってば力持ちー」

こんな小さな子持ち上がりで傭兵なんて…と言いかけたところだ。

…恥ずかしながら、女の子の笑顔に悩殺されちゃった。

少女「うんー、ありがとおねーちゃんー！」

がやがや

マリー「ん~…詰所の所まで来ちゃったけど…」

少女「…！…おかーさんー、いたあー！」

言いつつ女子に頭を叩かれる。

マリー「いたつ、いたつ、頭叩かないで！結構痛いよー？」

少女「あつかーー！」

私の事情なんてお構いなしに女の子が指を指す方に向き直る。
…髪の毛引つ張らないで！？結構痛いよ！？

マリー「はいはい…あ、あの人かな？」
少女「うんー！おかーさん！」

エミコア「マリーの対子供スキルが高すぎて付いていけない…」
マリー「そ、そんなことないよ…」

がやがや

エミコア「いやー、見つかって良かつたねえ！」

マリー「そうだね！…お母さん、かあ…」

エミコア「ん？どうしたのマリー？」

マリー「いやいやなんでも？」

マリー「博士…」

もつ何年も前に私のことを作り出してくれた博士。
…色々あつたけど、あの人が私の親だということになるなら。
…私の口から、自然に大きなため息が漏れていた。

ピーンポーンパーンボーン

マリー「あれ、また放送？」

エリコア「この時間は…ああ、花火大会終わりのお知らせだね」

マリー「終わっちゃうのかあ…楽しかったね！」

エリコア「そうだね！…マリー、これ一応任務だからね？」

マリー「…そうだったね！？」

エリコア「いや忘れてたんかい！？」

そう言われ本気で忘れていたことに焦る。

…ええと、ルートははずれてない、はず。うん。

がやがや

エリコア「急がずゆっくりとお進みください！」

マリー「臨時便がありまーすーお帰りの際は係の者にて確認ください！」

「い！」

警護任務のはずだったのに。

…私たちは何故か交通整理をお願いされ、断りきれなくて。

そんな気持ちをH//リアが代弁してくれた。

H//コア「まさか交通整理とはとんだ落とし穴だよ…」

マリー「一気に任務に引き戻されたね…」

がやがや

マリー「今日中に帰れるかなあ…」

H//コア「まああたしらはマイシップあるしね
最悪どつかに泊まればいいしねー」

マリー「それは経費だねー」

なんて他愛もない話をしていたら。

…ついにさつきまで私の頭の上にいた赤とピンクの浴衣が見えた。

少女「おねーちゃんたちバイバーイ！」

元気に手を振る少女と、彼女の母が会釈をしてくれた。

H//コア「あ、あの子だ！」

マリー「もうお母さんの手離しちゃダメだよーー！」

言いつつ、女の子の姿が人混みで見えなくなるまで私は手を振った。

…それからしばらくもしない内に。

H//コア「お？」

マリー「今のが最後の一便かな？」

H//コア「みたいだね…お疲れマリー！」

マリー「終わつたあ…H//リアお疲れさまー。」

パン！と景気付けにハイタッチ。

H//コア「やー、帰り際のあんたに気付いた人の表情がねえ…あの『！？』って表情はそうそうみれないわあ」

マリー「事前に気付いて握手求めてきた人とかね…」

H//コア『氣づいた』とは、私の所属を含めて、どこかこと。

H//コア「あればスゴいと思つたね…視線が熱っぽかったもんね…マリー「ただただ注目されるのが恥ずかしかったね…」

そんなことを言つながら詰め所に引き上げてみると、一人の警衛士さんが

私たちの方に近づいてきた。

警衛士「お一方、本田はどうもありがとうございました」

マリー「あ、警衛士さん。いえいえそんな…」

警衛士「これは私どもからの心ばかりのお礼でござります」

マリー「そんなそんな！報酬も貰つてますし受け取れませんよー。」

差し出されたものは菓子折り…かな？

うん、銘菓つて書いてあるからたぶんお菓子。

H//コア「マリーは欲がないからなあ…」

警衛士「しかし…」

警衛士さんも引いてくれない。

…上回から言われてるのかなあ、とか考へたりつたりは無粋かな?

マリー「いえ、私も今日は楽しませてもうこまましたし、この経験だけで十分満足しますから。ですからそれはお気持ちだけ

頂いておきます。ありがとうございます!」

警衛士「ああ、やはり評判に違わぬ素晴らしいお方々だ」

いきなり讃め殺しですか!?

マリー「えー? いえいえそんな…」

H//コア「…その評判を聞きたいね…」

マリー「わ~ H//リアー!」

遠くを見てため息をついたH//コアを軽く小突いて、照れ隠し。

…上回この時は眩暈の読めるH//リアだ。

警衛士「しかし本日ももづ遅いですし、誠に勝手ながら宿を取りさせて頂きましたので、お休みになつてからお帰りください」

H//コア「あ、なんかすみません…ではお皿葉に甘えて…」

マリー「え、H//コア即決!?

…じゃあすみませんお世話になります…」

警衛士「こえこえ。でも」「ひひひひ

——ホテルの一室

Hミコア「……やつと着いたあ……ふあ……ふかふかベッドにダーリップー。
マリー「ふふ、Hミリアったら……え、もしかして……」

ダイブしたきり動作がないHミコアの顔をのぞき込んでみる……と。

Hミコア「……ぐー……」

……もう半分夢の中だった。

マリー「……寝付き良いにも程があるでしょ！？」

……といえば、私も今日は疲れちゃったな……ふあ……
お風呂は明日朝入ろう……うんそれが良い

マリー「お休みなさいHミリア……」

Hミコア「むう……お休みなさい……」

HIIリニア「やつと花火大会終わりました…」（後書き）

やつと、やつと花火大会終わりました… ^ ^

今後もこんな展開の遅さですが、生温く見守つてくださいと嬉しい
です（泣

マニーランナーズ(前職)

書き方變えてみました。

何か「指摘等くれたら嬉しいです♪」

マーー「……んう……」

——宿、宿泊室、午前2時

マーー「……すう……」

草木も眠る丑三つ時。

部屋の中に黒い影が入ってきた。

??.??.? 「……」

丁度トイレに立っていたあたしは、物陰でそいつの行動を探る。

??.??.? ……><、あのマーーの寝顔ゲット……（カシャツ

カシャツ、とこりのはシャッター音だろつ。

機を見たあたしは、すぐそこにあつた電気のスイッチを点けた。

Hミコア「へえ……それ、どうするの?..」

??.??.? 「!..?」

「グーン……といつ音とともに、部屋のライトが軽い明滅の後、影を照らす圧じゆ。

マーー「ん~……眩しい……Hミコア、電気消してえ……」

Hミコア「はいはい、ちょっとだけ待つてね?..」

マーー「んう……」

盗撮された当の本人はまだ夢の中。…起こすのも忍びない。
照らされた影は、グラール教団の教団員のものだった。

Hミコア「さてどうしてくれよつかこの変態教団員は…」

教団員「くつ、くそ、何で気づいた！？」

Hミコア「うつさこ叫ぶな」

そう言いつやいつの尻を蹴る。

教団員「いたつ」

Hミコア「声出さないでね？マリーが起きたらビリするの？」

「うつさこうせー応あたしも戦闘職種だ。
ドスの利いた声で黙らせる。

教団員「うつ…」

Hミコア「ん、よひしい。…何、その田？」

寝不足 + 安眠妨害 + 反抗的な田つき + あたしの地雷を踏む = ?

…答えは『最つ悪に不機嫌』。

教団員「お、お前は戦闘が得意じゃないってことくらい判つて
るんだ…れ、連行しようとしても無駄だからなー！」

Hミコア「叫ぶな」

うつさこより強く尻を蹴り上げる。

教団員「いたつ」

H//コア「…あのね、人怒らせるのも大概にしなよ?」

教団員「ひいっ…」

H//コア「警備で疲れた夜に? 眠りを妨げられて?」

拳げ句の果てに盗撮目的? イライラしないこと思つて
るの?」

教団員「うう…うるさいー用があるのはお前じゃなくって…」

H//コア「お前じやなくて?」

あたしの中で何かが切れた、…ような音がした気がした。

教団員「…や、その…」

H//コア「ちょっと外、行こつか?」

教団員の奥襟をつかんで強制連行。
左手にハンドガンを携えて。

教団員「ひいっ…」

H//コア「ああ、そうだ電気消さなきや。」

ちょっと待つてねマリー」

消えるときは音もなく。…とつあえず中庭があつたからそこを田畠

そう。ドアはなるべく音を立てなことにつに閉めさせた。

ちょっと行ってくるねマリー。」

そつ心の中であつて、あたしは教団員を引きずつて歩きだした。

マリー「……ううわっ……えー?……何だ、良かった、夢、か……あれ?エミリア?」

——20分後、宿、中庭

エミリア「あとほこの画像を消去して……ねえ?
教団員「な、なんでしょう?」

鬱憤+マリーを狙つた罰でもう教団員はボロボロ「だ
…やりすぎたかな、とも思つたけど。

エミリア「バックアップも出して。全部ね
教団員「は、はい」

エミリア「…うわ、何これ盗撮ばっかり…動かぬ証拠だわあ…
教団員「そんなん!」

エミリア「何か問題でも?」
教団員「…いえ、なんでも…」

エミリア「だよね…それと、ガーディアンズにはもう連絡
入れたから逃げようとか考えないでね?」
教団員「くそつ…」

エミリア「何か?」

教団員「……」

H//コア「よろしご。… も、 来た来た」

?~?~「 じんばんはH//コア。 盗撮犯を引き取りにきました」

H//コア「おっ、 ルウじやん! 直々におでましとは珍しいね!」

このキャストはルウ。 ガーディアンズの汎用キャスト。
ちなみにボディの設計はあたしがやってたりする。

ルウ「 いえ。 この盗撮犯は以前から我々の追跡対象でしたから
H//コア「へえ… てことはイタズラですまない所までやつてる
つてことだもんねえ… ま、 後は任せたわ!」

ルウ「 協力に感謝しますH//コア。 それではまた」
H//コア「 またねルウ!」

思わぬ所で知つた顔と会えて、 良いこともした。
さあて、 部屋に帰りますか!

――宿、宿泊室

H//コア（そ～と…）

H//コア（あれ？電気がついて…）

マリー「H、…」

H//コア（マリー起きてる…）

しかも何でか超涙目なんですねビー！？

…思春期が固まっている間、マリーが続けた。

マリー「H//リアあ……！」

H//リア「ああ、えっと、その……ああ、泣かなこでマリー…

マリー「良か、H//リア、いなく、なつてなかつ…」

H//リア「だこじょーぶだつて！あたしがそう簡単になくななるわけなこじょん！」

マリー「うふ、でも…」

H//リア「なこ、元のうつたの？そんな夢でも見た？」

マリー「…」

無言でこくべくと頷べマリー。

…たまたま幼児退行するんだからこの子は…

H//リア「あー…めんね？一人にしちやつて
マリー」… H//リアが、懶にわけじょなこ、かひ

H//リア「んー…ほりほり顔上げて…ね？」

マリー「うん…」

マリー「うん…行く

H//リア「朝にはちよつと早いけど、気分転換に散歩でも

行かない？」

やつと泣きやんでくれたあ！
…勢いで散歩って言ひやつたけど書つてよかつたあ！

H//コア「やうどめたひー……あ、ちゅうと待つで
マニー？」

…冷静になつてみたひ。

出かける前にほんぢょつと気になるひとじが。

H//コア「……先に、わ。お風呂、入つても良こかな?
マニー「私も……やうこねば昨日入つてない…」

H//コア「んじゅ、散歩はその後ねー…」
マニー「うそー…」

うはあ、せつと笑つてくれたあ！

…何でかお風呂は一人ではいることになつたけど。
…まあ、楽しいからいっか！

マリー「……んう……」（後書き）

ルウ出番すべくなつ！

閑話休題。

なかなか難しいですゝゝゝ；

それとすいません、作者が根性なしなものでお風呂はスキップさせて貰います（汗）

H//リ亞「朝は空気が澄んでて良いわあ」

——田の畠前、湖畔の散歩道

H//コア「何かこいつ、走り出したくなるねー。」

マリー「H//リ亞、あんまりはしゃぐと危ないよ?..」

H//コアは今縁石の上に立つてヤジロベエのようバランスをとつて立てる。

H//コア「だいじょーぶだつてーほりせり…」わっー?」

大丈夫と言ひはなつたその瞬間に。

体勢を崩して転びかけるH//コア。

マリー「H//リ亞!ー? 大丈夫!ー?」

H//コア「いたた…あはは、大丈夫!ー」

マリー「ドキドキさせないでよもつ…」

H//コア「じめんじめんーいやー、テンション上がつたりやつてー。」

マリー「わかるけど…あ、空が白くできたね」

H//コア「本郷だ…おお、田の畠…」

湖の向こう側に見える山から、太陽が昇ってきた。

湖に光が反射して、言葉にできない景色が生み出される。

マリー「綺麗だねえ…」

H//コア「本当…ん？」

マリー「…ん？どうしたの？」

H//コア「いや、あそこに見覚えのある人影が…」

マリー「ん…あ、あそこ？」

H//コア「そうそうあの桟橋のところ…ん…誰だろ？…」

カメラアイの倍率を上げるなどといった事は出来ないので。
目を細めて誰かを確認しようとある。

…正体は、意外なヒトだった。

マリー「あ、H//コア、あれの人だよーほら、ええと…

元巫女様！」

H//コア「え、あれカレンさん…？」

マリー「そうカレンさん…カレンさん！」

H//コア「カレンさん…」

そういう一つ一人で手を振る。

逆光で見え辛いが、確かにあればカレンさんだ。
おまけにこつちに気付いて手まで振り返してくれた。

H//コア「行こー。」

マリー「うん！」

考えていることは同じだったようで。

私とH//コアは、彼女の元へかけだした。

カレン「何も走ってこなくとも良かつたのに…」

H//コア「いやあ、何か走りたくなっちゃつて…」

マリー「おはようございます、カレンさん」

カレン「ああおはよリマリー。こんな時間に起つた？」

マリー「こりこりあつてお散歩中です！」

H//コア「や、マリーが怖い夢を見たつてつとで気晴らしだ？」

カレン「おやおや

そつまつとくすぐす笑うカレンさんは、何だかやつぱり大人だ。

マリー「もう、言わないでよH//コアつ」

H//コア「あははつ」

カレン「ん？…とこうか、マリーはキャストなのに夢を見るのが。

睡眠をとるとせ…本当にキャストか？」

マリー「あはは…」

H//コア「いやあ、それが本当にキャストなんですよ。

お風呂と一緒に入ったんですけどマリーつたら…む

ぐつ
「マリー」HHHH//リアー…落ちつこー…？」

さすがに恥の概念くらい持ち合わせてくる。

私は続きを言わせないよつエミリアの口を手でふさいだ。

：タップされたので放しておぐ。そこまで強く閉めた気はないんだ
けどなあ…

カレン「あははは。二人は本当に仲がいいんだな」

エミリア「つはあ…そりやあパートナーですから！」

マリー「えへへ…何だかこそばゆいね…」

カレン「パートナーは大事だぞ？後々違う道を歩むことになつたと
しても

連絡を取り合つ「一人組を知つてるからな」

エミリア「へえ…あたしたちの知つてる人ですか？」

マリー「違う道…かあ…誰だろつ？」

カレン「なに、イーサンとヒューがだよ」

「「あの二入つてパートナーだつたんですかー？」」

朝の湖に驚愕の叫びがこだまする。

カレン「何だ、知らなかつたのか？意外だな」

エミリア「いやあ、こいつが『英雄』の話題になると逃げ出すもの
で…」

マリー「…でへつ…」

カレン「恥じることはないのだぞ？」

マリー「いやあ、なんというか…大げさ？に言われるのがどうも…

私はただ、大切な人たちを守ろうと必死だつただけ
で、

それを祭り上げられると申し訳ないと申しますが…

H//コア「嬉しいこといってくれんねえ、このお」

H//リニアに小突かれる。

…ああ、顔が赤くなつていく…

マリー「は、恥ずかし…」

カレン「あははははは。全く、英雄とはかくあるものだなつ」

マリー「ちや、茶化さないでください…もう…」

カレン「いや、茶化してなどないわ。ただ、イーサンも同じことを
言つていたのを思い出してな。すまない…あははは」

H//リア「へえ…通ずるものがあるんでしようかね？」

カレン「かもしだれないな。ああ、笑つた笑つた。こんなに笑つたのは
久しぶりだ。ありがとう、一人とも」

マリー「はい、どういたし…まして？」

H//コア「なにもしてないですけどねつ！」

マリー「いやセコドヤ顔で威張るところじゃないと思つ…」

カレン「ああ、無理を言つて出てきてよかつた…いや、実は今お忍び
で出てきてこる身なんだ」

H//リア「あれ、何か催し事でもあるんですか？」

カレン「ああ、今年は30年に一度の大星靈祭だからな…そうだ、
お前たちに【ヤオローズレースの参加権】を進呈したい。
特別に私の独断で一組入れて良いと言わされてな。本当
はもう

受付の締切がすぎてしまつているんだが、申し込んだ

かい？

マー「いえ、レース 자체を今知りました…」

祭りは昨日のが初めてだから。と口ごもる。

カレン「なら丁度良い。是非参加してくれ。楽しみに待ってるよ。
…あいさない、時間が来てしました。詳しへばまた連絡する」

マー「あつがとうござまく…あの、催し事頑張ってください…」

マー「それじゃあまた今度…やよひなうへー…」

カレンやよひなうへーと手を振り、散歩道を私たちの宿の方に向とは反対に歩つていった。

マー「…行つちやつたね」

マー「なかなか会えない人だしねえ…」

マー「…へー…」

マー「…あせます…マークア今のお音つ…」

マー「…う…うるわしい…じょうがないでしょー…」

今の音は、またふん間違になくお腹の虫が鳴いた音だ。

マー「せーせー…ふくく…本当」くっつて鳴つた…

マー「もう一ぱらあたしらも帰るよー…」

マリー「チヒックアウトはすませひつたし…クラシードアへ？」
ヒニア「そう…ほりこへよー。」

マリー「途中で朝飯買おうね」

そこで私はためらはず吹き出した。

…ヒニアが顔を真っ赤にしてるのがおかしくって。

マリー「だつて朝つてお腹すべじやん…」「…」
マリー「えー？ そう？ 私朝弱くつてあ…」

マリー「お腹すくもんなの…ほりこへよー。」
マリー「わかりましたわかりました…帰るつー。」

HIIリニア「朝は空気が澄んでて良いわぁ」（後書き）

進行が遅いのは仕様で（ボッガ・ズッバ
すいません改善できる気がしませ（ボッガ・ランパ

次からやつとクリアードで帰ってきます！

やつじだぜ…先は長くなると思こますが、いやつへつおつわあこをお
願いします。^ ^ ;

H-イタ「マスター——」（前書き）

久方ぶりの更新となりますが覚えててくださいねでしょうかくく。
ご指摘いただきましたのでよこすよこ書き方変えてこきます
これからもよろしくして下さいねと助かります（^—^;）
それでよどいぞー。

エイダ「マスター――！」

——クラッド6、マリーのマイルーム

マリー「ただいま」「お帰りなさいマスター！」

マイルームの扉を開けるなり、腰ほどの高さに衝撃を感じた。

「…おまえ速しねエイタ…」「…どしたの?抱き合って
くるなんてずいぶん珍しい…」

エイター 怪我はなしてですか！？ 本当に！？

全身をボディチェックされるかの「ごとくペタペタ触られる。しかも微妙に憂しくなのが妙にくすぐつた!」

マー 「……へはつあはつあははあはくすぐつたいつて!!

いいえたまでは、ルーラーをまとめておきながら、
結局連絡なしでしかも朝帰りますよ!!?

これはお位置をもたれてゐるのではありますまい

やばつ、すつかり忘れてた！

エイダ「あ、今すっかり忘れてたって思い出しましたね？」

マリー「え、ちよ、なんでわかつ、やだ――――――」

エイダ「はい、今の言葉で裏がとれました！そんなマスターには

マリー「え、私はめられた? やつ、いやーーのせせせせせーー。」倍速

マリー「…私はめられた? やつ、いやーーのせせせせせーー。」

——30分後

マリー「ぜえ…も…だめ…息…吸えな…」

エイダ「倒れて肩で息とはまさかここまで効くなんて…

これくらいで許してあげましょうか

マリー「…あ、ありがとうござりますエイダさん…」

エイダ「それではマスター。朝食はどうなさこます?」

この状態で朝食なんて余裕ないよー!

…とツツ「//たかつたが盛大に笑つたせいかお腹は空いてい

マリー「あ、…じゃあシリアルでお願いします…」

エイダ「かしこまりました。少々お待ちください」

あ。一緒に食べようつてまた言いそびれちゃった。

…またこじょこじょされてもイヤだから大人しく席へと向かう。

マリー「ふうつ…あれ? いつもなら『準備が整いました』とか
…いつってでもおかしくないくらいの時間なんだけどな

…

…ん? 椅子から見える風景になんだけ違和感。

マリー「…マシナリー? チニア? こんなのは置いたつけ?」

その時、壁の陰からエイダがこちらへていつもの倍はあらうかといつお盆を持ってやってきた。

エイダ「おまたせつしました！」

マリー「ちゅぢょちよエイダ大丈夫！？」

つてかそんな大きなお盆あつたつけー？

エイダ「ふう。慣れないことはするものじゃありませんね」

マリー「あ、質問はスルーなんだね…」

エイダ「よいしょ…では頂くとしますが…何ですか？何か私の顔面にへばりついてでもいますか？」

マリー「何か今日風当たり強くない？私…

や、いや、エイダ一緒に食べてくれるのー？」

エイダ「(迷惑ならば退席しますが

マリー「むしろ一緒に食べてくださいお願ひしますー」

エイダ「主の頼みとあらば仕方ないです。
ご一緒させていただきます」

…今まじまじと見て気づいた。

これは…エイダの照れ隠し…！

マリー「…ふふつ

エイダ「かつ、勘違いしないでくださいね？あくまでマスターのスケジュール

管理の一環として…」

マリー「あれ？私何もいってないよ？」もしゃもしゃ
エイダ「…………！」

おおー、耳の先まで真っ赤になっちゃって。
普段の無感情な言動からは想像できなーいなあ……

マリー「……可愛い奴めつ」もしゃもしゃ
エイダ「…………だ、誰が！」

マリー「エイダが？」じつくん
エイダ「…………！」

今にもボンッ！って言いそうなくらい赤くなっちゃってまあ。
私も大概だけどエイダもなかなかマシナリーっぽくないよなあ……

マリー「はい！」ちうちうまでした……ってあれ？エイダ？

…おーい？

エイダ「はっ、はいつ！何ですかマイマスター！」

マリー「いや、大丈夫かなあと思つて」

エイダ「大丈夫です無問題ですシステムオールグリーンです！」

あちゃや、見事にテンパっちゃつたる……

マリー「ん~、エイダ？」
エイダ「はいっ」

マリー「今日は確か任務なかつたよね？」
エイダ「ええとつぱい！今日はフリーですね」

マリー「後でや、パーシ買いたいに行きたから一緒にきてくれない？」
エイダ「は、は」わかりました

「

マリー「…やつと落ち着いた？」
エイダ「はい、お見苦しことにがめ…」

「

エイダがスプーンを持ったまま深々と頭を下げる。

マリー「ああ、エイダ、髪がミルクに浸つたやつ」
エイダ「ああ、一度々すみません…」

マリー「まさに聞一髪だね…」

エイダ「あつがとうござります、マスター」

マリー「…いつてこいつで。まい、速く食べちゃいな？」
エイダ「じゃあすこませんお薬これまだ…」そもそも

なんだかいつも逆に迷つてゐるな、ところのせ
エイダの名前そのため言わなこでおぐ。

エイダ「…ふう。うれしかった」

マリー「よつこじ。おエイダが準備できたら買ひ物行つつか！」

エイダ「了解しました。少々お待ちください」

エイダ「マスター——」（後書き）

久しぶりでキャラが行方不明…

ヤオロズ様は結構後になるかもですくく；

ナギサ「貴女か、奇遇だな」

——クラシド6、コスチュームショップ

マリー「あ、ナギサ。おはよう」

ナギサ「おはよう。服でも見に来たのか?」

マリー「そう、ちょっと見たい服があつてエイダに
付き合つてもらつてるんだあ」

エイダ「ナギサ様、おはようございます」ペーツ

ナギサ「ああおはよう。…ええと、マリーのパートナー

マシナリーでよかつたかな?」

エイダ「はい。私のことはエイダとお呼びください」

マリー「あり?一人つて初対面だつたつけ?」

エイダ「いえ。ですが覚えて頂いていない可能性がある以上
自己紹介をした方が、物事が円滑に進むかと」

ナギサ「…私が言うのもなんだが、あまり私に対して固く
ならなくともいいのだぞ?」

エイダ「いえ、私一体の時ならまだしもマスターがいる前で醜態を
晒すわけにはいきませんのでお気持ちだけ受け取らせて
いただきます。ありがとうございます」

…嘘付け、エミリアの前ではもう結構はつちやけるくせに。
下手なところで頑ななんだからもう…

マリー（この空気の重さをどうかしてもらいたい……）ふう…
ナギサ「ああそだマリー。少し話があるのだが」

マリー「はっはいつ！？」

ナギサ「？何をそんなに慌てているんだ？」

まあいい。マツリ？…に必要なコカタ…だったかな？
それを探していくんだがどこにあるか知らないだろう
か？」

マリー「あ、ナギサも浴衣見に来たんだ。うーん、ヒトの服の配置は
私にはわかんないかなぁ…」

ナギサ「…そうか、貴女はそうみえてもキャストだったな」

マリー「そう見えてつて一体私がどう見えてるの…？」
ナギサ「まあいいじゃないか。とりあえず私は店員に聞いてくるよ。
それではまた会おう。…エイダ、だつたな。うん、覚
えた」

エイダ「光榮です。それではまた」

マリー「…あれ？最近私スルーモくない？泣くよ？」

エイダ「その程度で泣かないでくださいマスター。…といひで、
先ほどのお話から推測するに、マスターも浴衣をお探し

なつてこらむつですが。お祭りにでも参加するんです
か？」

マリー「ああ、ちょっとね。カレンさんにヤオログレースの特別招
待券

みたいなのもらつちやつて「

エイダ「ヤオロズレース…大星靈祭ですか？」

マリー「そうそう、さすが情報通だねえ！」

エイダ「…となりまると、今日の夜の便で『コートレイズに向かわないと

明日のレース開始には間に合いませんね」

マリー「…うそ、ヤオロズレースって明日…？」

エイダ「はい」

マリー「ちよちよつエイダ急いでさすがにまざりって！」

エイダ「まだ10時になつたばかりですからそんなに焦らなくて
も…」

マリー「久しぶりの休暇なんだしじ飯とかはゆっくり食べたいの！
あ、つてことは明日のレースのメンバー今日中に集め
なきや！」

ええとエリコアと、私と、ナギサ誘つてみて…」あた

ふた

エイダ「…落ちつてくださいマスター」

マリー「え、私は十分落ち着いてマスヨ？ああえつと…」

不意に。

「…すつ、といづ音とともに頭に鈍痛が走る。

マリー「…たあ！何すんのさエイダあ…」

エイダ「だから落ち着いてくださいって言つたでしょ。」

今日の最終便とはいえ後12時間程後の心配を今して
どうします。

とつあえずせりせり浴衣見に行きまわよ?」

マリー「…こや、ジャンピングチョップは結構な威力を誇るね..
あ、はいすいません行きます行きますから武器はしま
つてー?」

——20分後、試着室

エイダ「着替えられましたか?」

マリー「着られたけど…私に縁つて似合わないと思つんだあ…」

エイダ「やつこつと思つて色違に用意しておきましたよ。」

赤・黄・黒・紫、どれにします?」

マリー「エイダのおすすめで!」

「これで選んでくれてる間にこの浴衣脱いじゃおハ。

…と思つたのだが、私はエイダを甘く見てこたようだ。

エイダ「では黒ですね…開けますよ?..」
マリー「あつちよつまつまだ!」

シャツ。

試着室のカーテンが開かれる。

エイダ「…ヒトだったならサービスショットなんでしょうが…

マスターはキャストですしねえ…」

「マリー」「うつさい恥ずかしいのは変わんないんだから……ボケつと見てないで早く閉めてよう！！」

エイダ「ああ、これは失礼しました」シャツ
マリー「……最近エイダが私を主として見てない気がする……」

エイダ「それは気のせいですマスター」
マリー「うう……もうお嫁にいけない……」

エイダ「……行かれちゃつたら寂しいじゃないですか……」ボソッ
エイダ「……何か言つてるんだけどカーテンのせいで聞き取れない。
くそー。……と詰つ間に着替えも終わつたので浴衣を交換してみる。

シャツ。

マリー「……はい、着替え終わつたよ……エイダ？」

エイダ「……」ゴシゴシ

マリー「どしたの？どこか調子でも悪い？」
エイダ「いえ、なんつでもありますんつ……」

マリー「そ、そつ……あ、黒の浴衣貸してくれる？着てみるかい？」
エイダ「はいーどうぞー！」

マリー「？……変なエイダ……ま、いつか。ちよつと待つてねえ

エイダ、泣いてた。
気づかない振りはしてみたけど誤魔化せてるかな？

何でなんかなんて、わからないいけど。

何だうう、エイダに泣かれると、すくへ、辛い。

マリー「…ヒートの着る服つて何でこんな着づらいんだ？」

四苦八苦しながら浴衣を着る。

…さつきよつは上手に着れたかな？

シャツ。

マリー「エイダ、どうかな？似合ひるかな？…あれ？エイダ？」

さつきまで確かにこなしたのに。

エイダが、いない。

そんな。何で？

マリー「エイ、ダ…？エイダつ？」

いつもならすぐ帰つてくる返事が返つてこない。

マリー「…！」

いつもたつてもいられない。浴衣なんか着てる場合じゃない。
着替える時間ももどかしく思いながら、すぐに元のパーツに換装する。

マリー「エイダ！」

思わず叫んでいた。

浴衣を片づけるのもそこまで出でつけ出さつと――

エイダ「はいはい、そんなに呼ばなくても聞こえてますつてマスター！」。

公共の場ではお静かに、ですよ~」

マリー「…え？」

——して、急に後ろから声をかけられて。

無理に方向転換しようとした私は派手に尻餅をついてしまった。

マリー「いいつたあ！」

エイダ「えつ、大丈夫ですかマスターーーー？」

マリー「エ、エイダ！？さつき見たらいなかつ…」

エイダ「マスター、他の浴衣を置きに行つただけです…

売場からここまで結構あるんですから」

え、すると何？早とちり？

エイダ「そもそも私がマスターを置いてビビン行くつて

「言つんですか…」

マリー「や、それもそだなげど返事へういしたつていいじゃん！」

エイダ「店内でこきなり叫べと…構いませんがいかんせん
周囲に他のお客様がたくさんいたもので」

マリー「あ、それは叫べないね」

あはは、いやー、てつきつ置いて行かれたかと」

エイダ「マスター…流石に私も泣いちゃいますよ？」

貴方以外に仕えるなんてこっちから願い下げですし…」

マリー「…嬉しいこと言つてくれるじゃない？」

エイダ「ええ言つてやつますともマイマスター。」

この身果てるまで仕えると決めた唯一の我が主。

貴方が望むのなら例え火の中水の中ですよ。

それなのごどじて貴方の前からいなくなりましょう？」

マリー「おおひ…なかなか恥ずかしいことを恥ずかしげもなく言つ」とはやりますねエイダさん…」

エイダ「本心ですし」

マリー「…じゃあ聞くナビや、わつき泣いてたの。あれは何で？」

エイダ「……あれは…マスターが…」「ここが」

マリー「言つたくないなら無理に追求はしないけど…

悩んでるなら聞いときたいかな…って思つて」

エイダ「う…あれば…ていうかバレてたんですね…」

マリー「気付かない振りしようとしたんだけどね~」

エイダ「……わかりました。いいます。けど……引かないでくださいね？」

マリー「任せときなつてーどんとーこーこー」

とりあえず今は安心させることが先だ。
引くかどうかは…聞いてから考える。

エイダ「…………タ一が、いなくなつ…………悲しくなつて…………」

マリー「？…すいません、もうちょい大きな声でお願いします…」

エイダ「マスターがついいなくなつたら私は……どうしたらいいのかなつて……！マスターがいない日常を考えてたら……悲しくなつて……」

悲しくなつて…

マリー……そんなことで悩んでたのー?」

エイダ「そんなこととは何ですか！私からしたら一大事ですよ！」
マリー「あはは、私がいなくなるなんてことありえないって！
亞空間事件でも欠片騒動でも死ななかつた私が簡単に
いなくなつてたまるもんですか！あははは！」

エイダも可愛いといふあるんだよね！」

ギャップ? というのだろうか、普段はクールビューティーなエイダの弱い部分を見た気がしてそれがなんだかツボにはまつた。

エイダ「わ、笑わないでください！…それに…」
マリー「ひー、お腹いた…はい、それに？」

エイダ「あの、ですね。マスターは身内びいき除いても結構殿方に
好まれそうな性格してますし? 容姿だつてキャストだ
から

とはいえない方だと思いますし……」

マリー「や、褒めごろしはヤメテくださいエイダさん…

エイダの慣れない褒めごろしは必殺級に恥ずかしいです…」

す…」

顔が赤くなつていいくのが体感でわかる。

こんな時に自分が本当にキヤストなのか疑わしくなる。

暑いなあ、冷房もつと効かせてくれないかな。

エイダ「だから…その、ウルスラさんの件もありましたし、突然『私結婚するから!』とか言われたらどうしようつかと…」

マリー「…ああ、お嫁にいけない発言かいつなつたのね…」

いやいやちょっと待つてよ。何で結婚するのにエイダを置いてかなきゃいけないのぞ?エイダを受け入れられない相手ならいつもが願い下げだね!」

これはまじう事なき本心だ。

でなければこんな熱く語れるわけがない。

エイダ「…もう…ありがとうございます!吹つ切れました!…

変なことでうじうじ考えません!…」

マリー「よし、その意気だよエイダ!…

…それで、すじく言ごづりいんだけど…」

そつと口をエイダの耳に寄せる。

エイダ「?.どうなされました?」

マリー「なんかめっちゃ田立つちやつてるよね私たち…」

エイダ「そういえばあちこちから視線が…」

マリー「…黒の浴衣買つて逃げよつか?」

エイダ「はい、それがいいと私は思います」

マリー「エイダは? 浴衣とか」

エイダ「私はもう何着か持つてますので」

マリー「…エイダの他の服とか見たことないんだけどな…」

そっか、じゃ、行こー!」

H//リア 「あつや？奇遇だね」（前書き）

いつも、完徹一田田でテンションがヒヤッハーしてゐる作者です（笑
登場人物の台詞等おかしなところありましたらご指摘願いたく思
います。）
それではどうぞ。

エミリア「ありや？奇遇だね」

――カフェ

エミリア「おーいマリー！エイダー！」

マリー「あ、エミリアだ」

エイダ「エミリア様は周りに人がいても大声を上げるのをためらわないんですね…」

エミリア「二人ともカフェで会つのは珍しいね！

何、買い物でも行つてたの？」

マリー「ああ、うん。ほらカレンさんにもらつたお祭りのチケットあるでしょ？お祭りつて知つてたら浴衣着たいなあつて」

エミリア「へえ…あれ？お祭りはお祭りでもさ、私たちつてあのー…何とか…何とかレースに出るんだよね？」

マリー「?うん、ヤオローズレースでしょ？」

エミリア「あれつていつもの任務みたいに四人パーティーで行くつて

聞いたんだけど…人数集めた？」

マリー「ううん全然集めてないよ？エミリアは？」

正直忘れていた。ちょっとだけ焦る。

…が、エミリアを見てそんな気持ちが吹っ飛んだ。

H//コア「私がそんな気を配ると思つてか!」「えへん
マリー「あはは…そこは威張るところなのかな…」

H//コア「まあそしたら私も適当に人一人連れていくから後一人
よろしく!頼んだ!」

マリー「あ、そういう。現地には今日の最終便までに行かなきゃ
レース開始に間に合わない…んだよね?」

エイダが会話に入つてこない…から話題を振つてやる。

エイダ「はい。本田中に向い、方向かいませんとまず聞て合わないこと
考えてもよろしかと」

H//コア「うひそー?やっぱ、あたし何の準備もしてないやー…
りよつとひやけちやけつと準備していくー!じゃまた

後でね!」

そうこういつとH//コアは…任務中のダッシュьюつ速いんじやないかと
いう

スピードで駆け出していった。

マリー「…風のようになつてこつたね…」

エイダ「まあH//コア様ですし致し方ないかと」

マリー「むう…エイダの口調がものすげく固くなつてゐる感がある…
エイダ「先ほどのように取り乱したりしてしまつたことをせんので」

マリー「もつとゆる〜くいこうよエイダ〜」のしつ
エイダ「つ…もたれ掛からないでくださいマスター!…

意外と…負荷が…!」

マリー「あ、それは私を重いっていったのかそうなのか！？」ぐでん
エイダ「いえ…身長の倍ほどもあるヒトを持ち上げるようこ作られて
この訳ではないです…仕方ないかと…」

マリー「はいはい離れますようつ…と。じゃ、お腹食べよつか！」

エイダ「は、はい…ふう…大丈夫です、行きましょつ」

マリー「やつぱりまだ固いなあ…」

エイダ「…わかりました。多少改善を試みます」

マリー「ん、ならよし！」

エイダ「あの席が空いていますね、行きましょつ」

手頃な席を見つけるエイダ。

そのスキルは私もほしいぞ、と思つ。

マリー「おっけーーーあ、そudsエイダ何食べる？ケバブ？」

エイダ「そこで何でケバブをチョイスしたんですかー？」

マリー「いや、HILYRIAがおすすめしててさ…えと、『片手で本を

読み

ながら食べられてなおかつ美味しい』って

エイダ「それはおにぎりでも変わらないのでは…」

マリー「細かいことは気にしない！んじゃあ、『飯選びに行きま

すか！』

エイダ「ケバブ…その辺に売っているものなの…？」ぶつぶつ

マリー「お、この…エイダ、なんて読むのこれ?『ジ』の料理?」

エイダ「ええと…カオオブサパロッヌアブーですね」

カオオブ…?

マリー「なにそれ新しいテクニック?」

エイダ「料理です。モトウブに『ユーティーズの文化が何やかんやして
できた甲殻類のピラフをパイ・ナッポオの器に盛つ
たものです」

マリー「へー…エイダだけに詳しいね?」

エイダ「一応料理人も兼任しますし、これはこの間レシピを見つ
けた

ばかりだったもので記憶に新しく」

マリー「甲殻類ってどんなの?」

エイダ「タラ・バガニですか…あとクル・マエビですか…
この料理だとタラ・バガニの仲間を使用するそうで
す」

マリー「はえ~…これにしようかなあ

エイダ「器が器ですので甘めの味付けになつてますが大丈夫ですか
?」

マリー「うん、辛くなきや大丈夫大丈夫!」

エイダ「…辛いのだつて美味しいのに…」

ちょっとしょんぼりするエイダ。

…と、その目が不意に輝いた。

マリー「エイダは何にするの？」

エイダ「では私は…ガイ・パツ・バイカパオとライスで」

ガイ・パツ…？

マリー「なにそれ新しいナックルのフォトンアーツ?」

エイダ「ボッガ・ランパージやありませんし、れっきとした料理です」

マリー「はえ…見るからに辛そうだけど…」

エイダ「辛いはずです。簡単に言つてしまえば鳥肉のバ・ジル風味
炒め

ですが、香辛料をふんだんに使用しますのでとても
辛いです」

オブラーートに包んではいるが要するにトウ・ガラシ満載だ。

マリー「…ひ、一口だけ食べてみてもいい?」

エイダ「ええ。マスターに食べさせるために辛いのを頼みましたか
ら」

私が辛いのを食べられないと知つての狼藉だ！確信犯だ…！
いや…でも…ううん、克服してみせる…

マリー「う、うん…私、頑張る…！」

エイダ「そんな決意を持つて食事するヒトもなかなかいませんよ…」

いや、だつてエイダは結構辛いものが好きなわけで。
…となると手加減なしに辛そうなわけで。

「マリー」「じゃ、じゃあ注文しちゃおつか。…噛みそりだから頼んでいい?」

エイダ「勿論です。とにかく、私が注文するつもりでしたし」

マリー「せつすがエイダ!…お、順番来たね」

店員「みづ!」そこからしゃこました。」注文をビーフ

エイダ「カオオブ!」

エイダのいう言葉が呪文に聞こえて仕方ないので隣で何をするかと
もなく。カウンターに届かないから背伸びして注文するエイダ可憐にな
なんて思っていた。

エイダ「マスター、ドリンクはいかがしますか?」

マリー「え? あ、はい。…じゃあオレンジジュースをお願いしま
す」

エイダ「はい。…はい、オレンジジュースを一つ。以上でお願いし
ます」

店員「毎度ありがとうございます、お会計せん!」

マリー「ふう。ヒトがいっぱいで疲れるねえ」

エイダ「やつですね。お腹時ですしお手がないですが」

マリー「ええと、席は…ありや、とらねりやつて」

荷物とか置いとけばよかつたかなあ、とひみつぴり後悔。

…わざわざ荷物をデバイスから出すのが面倒だつたんだけど。

エイダ「…あ、マスターあそこがあいてます」

マリー「よく見つけるねえエイダーよ」、どちらかがう前に突撃だ

「ハイダ、トレーニー持つてますから走れませんか？ね…ええ、いやもしそう

マリー「意外とすぐつになっちゃつた」
エイダ「カフェ 자체もそこまで広くないですね。こんなものでしょ?」

マリー「それでは…」

「「いただきます!」」

マリー「あ、これおーしゃー!ほんのり甘ーのこぐどくなーしー。」
エイダ「やっぱり辛いのはいいです…この内側から暖まる感じが特

マニーラ、それが一回も未だ二度もへてゐるが、かじり付いた。

エイダ「ええ。交換と行きましょう」

エイダ「…ああ、甘いのもこれはこれでなかなか…」

八二二一

なにこれ辛あつ……！」

慌ててオレンジジュースを飲む。といつか飲み干す。

エイダ「ふふ、大丈夫ですか？マスター」

マリー「…ふはあ！暖まるどころじゃないよバーニングだよ！」

舌が燃え盛っちゃうよ…」

エイダ「オレンジジュース頼んでよかったですマスター…ふふつ
マリー「…この数時間でエイダがドSになってきたる気がする…」

エイダ「いえいえそんな。褒めても何も出ませんよ？」

マリー「それを褒めてると受け取れるのがすごいよ…？」

そんなこんなで楽しく昼食の時間は過ぎていった。

以前はやれＳＥＥＤ事変だ、やれ亜空間事件だ、極めつけには欠片騒動。

事件が解決してからも傭兵には後始末の依頼が次々と舞い込んで。
ゆっくり食事をとる暇もなく任務先で最低限、があたりまえ。

だから。

こんな他愛もないやりとりがすっごく楽しくて。

マリー「…ねえエイダ」

エイダ「何ですかいきなり改まって」

マリー「私が家にいるときはできるだけ一緒に飯食べよつね？」

「こんなことを聞くのが少し怖くて。

エイダ「マスターがそういうしゃべりだれるなら私としても是非そういうてくれるのがどつても嬉しくて。

マリー「ふふ」

エイダ「何ですかマシナリーの顔を見て笑うなんて。変なものでも食べたんですか？」

マリー「こまゝ飯食べてる真っ最中だよーー？」

自然と笑みがこぼれてくる。

マリー「…あ、わうだエイダ」

エイダ「はい？」

マリー「ヤオロズレース、参加しない？」

エイダ「…貴様が良いと仰つてくださいぬなり」

マリー「よし決まりーんじや、残りの用事全部すませぢやおつかー」

エイダ「まあまあ腹が減つては何とやら。…お残しはいけませんよ？」

う、と止まつた私の器にはまだピラフが残つていた。

マリー「だつてこれ絶対一人前くらいある…」

エイダ「しょうがないですね…」

と、エイダが皿を自分の方に引き寄せる。

私の分も食べててくれるのか、…と思こきや。

エイダ「はい、あーん」

マリー「あーん?」

エイダ「いや流石に私でもこの量は無理です。だから自分から食べないなら

食べさせよつと思つただけなのですが…」

マリー「…オッケー。エイダ落ち着いつ。とりあえずそれはとても恥ずかしい。

自分で食べますからお目をくだせー」

エイダ「?…ええ、やりますか。ではどうぞ」

…不意打ちにも程があるつてもんですよエイダさん…！
そのあと食べたピラフの味は行方不明になつていた。

HIIリア 「ありや？奇遇だね」（後書き）

「テレテレですねエイダさんとマリーさん…

いえ、百合を狙つて書いているわけではなくて（汗

なんかもうキャラが自分で動いてくれてるのを書き移す作業みたいな

感じなんで誰かこいつら止めてください（黙

：ちなみにカオオブ（＝もガイ・パツ）＝も実在するタイ料理
です（。ー。）
パイナボー美味しいよパイナボー（笑

マリー「と、ついで帰ってきたわけですがエイダさん」

エイダ「何でしうマスター？」

マリー「…なんだか私のベッドに誰か寝ている気がするのでは？」

私のカメラアイが狂つてこるのでしうか？」

エイダ「いいえマスター。私にも誰かに見えたます」

マリー「…それにあの後ろ姿はとても見覚えがあるのですがエイダ「奇遇ですねマスター。私も、この人をとてもよく

知つていて思ひます」

マリー「…思つ出せば懐かしいほどの昔ではないけれど。

…彼女にとつての休憩場所になつていてるのかな。

なんて考えていたら。

エイダ「一応お客様なのでしうか…おもてなしの準備は…マリー「いじえりません。…とつあえず起しあります」

エイダ「そうですね。…マスター、こつまで敬語なんですか？」
マリー「いや、止めるタイミング逃しちゃつて…」

エイダ「まあだらつと思つましたが。…では失礼して

と言つとエイダは、彼女を刺激しないように慎重に近付いて、
…何やら武器を取り出し始めた。

——マリーのマイルーム

マリー「エ、エイダさん？流石にそれは許可できないかなあ……なんて思つたり」

エイダ「安心してくださいマスター。」これは護身用です

いやいや護身で本気装備！？

…と思つたが、寝ている人が人だから仕方ないか。

エイダ「…行きます」

マリー「ファイトっ！」

小声でそういうて壁の陰に隠れる。

…だつて何が起ころむか解りきつてるし。

エイダ「ふう……よし。…後ろがガラ空きですよナギサ様！…」

ナギサ「…！」

ギインツ！

と言つ音がしたかと思つと部屋に閃光が走つていた。
その閃光がナギサの愛剣だといつ事を認識するのに
時間はいらなかつた。

エイダ「…！」

一方エイダはガードでその場をしのいでいた。
ロッドの細い柄で辛うじて受けきつたよつだ。

ナギサ「…なかなかやるなつーだがこれなら…」

エイダ「…ガードが追いつかな…」

ナギサの剣が金色の光をまといだす。

あの構えは…スピニングブレイク！？

エイダ「えっ？ ちょっと！ ナギサ様落ち着いてください…！ 室内でアーツ発動しようとしてください…！ というか寝ぼけて斬りかかる癒治してください…！」

防戦一方のエイダが置みかけるように叫ぶ。

…飛び上がろうとしたナギサは不意に我に返ったかのような顔をして言った。

ナギサ「……あれ？ なんだ、エイダじゃないか」

エイダ「なんだ、じゃありません…と、とりあえず剣を収めてくださると助かるのですが…！」

ナギサは一瞬しまった、という顔をして。

ナギサ「ああ、すまない。…といひで何故エイダがここに…」

安全を確認して少しずつ陰から出ていく。

マリー「エイダが、じゃなくて何でナギサがここに…って聞きたいんだけどな…」

ナギサ「ああ貴女まで。どうした？ 私に何か用か？」

マリー「ええと、ナギサ…もしかして部屋間違えた？」

む、と顔をしかめて一瞬。すぐに顔を明るくした。

ナギサ「ああ、道理で内装が違つてゐるはずだ！」

はは、と持ち前の明るさ（能天氣や～）で笑い飛ばされた…けど。

エイダ「失礼ですがナギサ様。なぜ鍵を開けられたのですか？」

マリー「そうだよ、ちゃんと口締まりしていつたのに」

それだけは聞いておかねばなるまい。うん。

ナギサ「いやいや簡単なことだ。私が貴女の部屋の合戻り鍵を持つてゐるからだよ」

なんだそうか…ってええ…？

マリー「いやいや重要なことわざと書いたよね今！？」

ナギサ「?何かおかしいのか？」

マリー「全部おかしいって！てかカードキーの合戻り鍵とか

作れちゃダメでしょ！？」

ナギサ「?Hミリアだつて持つてこらんが？」

エイダ「…マスター、Hミリア様のところに行つてきます」

マリー「行つてらつしゃい！」

多分合い鍵を貰いに行くんだろう。…穩便に済めばいいけど。

マリー「とりあえずナギサそれ没収！」

ナギサ「え、それはイヤだ困る」

マリー「イヤだ…？ああそり、じゃ、今後エイダの作るおやつ

全部禁止かそれを渡すか。どうぞ元気な？

ナギサ「どうぞこれを納めください」

即答…エイダのおやつ恐るべし…

マリー「ありがとうございます、もう一つ聞いて良い？」

ナギサ「どうぞ何なりと聞いてくれ！」

おやつ効果なのか、ナギサが妙に協力的だ。

…あとでエイダ特製プリンでも差し入れようかな。

マリー「これ、どこで手に入れたの？」

ナギサ「ああ、それか。それにはシリアルナンバーがないだろ？」

言われてみれば、でしか気づけないけど。

部屋番号とリンクして表記されているはずのナンバーがない。

ナギサ「その原料をとつてきて加工屋にこの形にしてもらって、それにミニシアの解析したデータを打ち込んだだけだから、

それにナンバーはないんだ」

マリー「…こことは世間に流通している可能性はないって事？」

ナギサ「そうだ。だつて私たちのせいで貴女に危害が及んだら私はワイナーに会わせる顔がないからな」えへん

マリー「いやそこ威張れないことしてるとかね？」

変なところ律儀で助かる…ところは言わずにおいて。

「マリー「それならひとまず安心かな……」

その時。

…エイダがエミリアを引きずりつて帰ってきた。

エイダ「ただいま戻りました」

エミリア「…マリー、エイダって足速いね…」

マリー「お帰りエイダ。…エミリア、私だつて勝てるか解らない

エイダに徒競走挑むのは無謀だよ…」

エミリア「それを言っておいて欲しかったよ…」「

とほほ、といった様子で更にうなだれるエミリア。

マリー「ところでエイダ、合い鍵は？」

エイダ「…に。…平和的に話し合いですみましたからそんなに心配な顔なさらないでください」

…失敬な。元からこういつ顔だつていつのに。

エミリアも悪いこととこう認識は持つてたみたい。

…まあ懲りてるようだしもういいにかな。

マリー「二人とも、もうやつちやだめだよ？部屋に入りたいなら

私がいるときににして欲しいな」

エミリア「わかつたよつ…」「めんね…」

ナギサ「すまなかつた…」

いやいやそこまでへこまれてもつ

…仕方ない、予定を繰り上げて…！」

マリー「エイダ、もう懲りてるみたいだしさ。ここはエイダ特製の
スイーツでも食べて水に流したいなあって」

エイダ「了解ですマスター。少々お待ちを」

マリー「…あ、ちゃんとエイダの分も持ってきてね？」

エイダ「…了解です」

とエイダに頼んだところで一人の方を向く。
少しは元気出すかなあ…と思ったら。

エミリア「ねえねえマリー！スイーツって何かな！？ケーキ！？」
ナギサ「プリンだつたらいいのだが！むしろプリンを所望したい！」

…心配はなかつたかな。

二人とも星が飛び出んばかりに目を輝かせている。大丈夫だね。

マリー「はいはい落ち着いて落ち着いて。席行こうか」

我先に、と席にすつ飛んでいつて無駄にいい姿勢で待つ二人。
現金だなあ、と軽くぼやいて私も席に向かつた。

H-イタ「お待たせしました」（前書き）

「いつも」と「いちばん」なんか最近超がつくほど忙しく現実から逃避するためにキー・ボードを叩いている作者です。

キャラが安定してきたと思つたら崩壊するつづつよくわからない事態に…！

「意見」「感想おまかじでます（ノーブル）

それではまぢvrn-！

エイダ「お待たせしました」

エイダ「今日はフルーツタルトを『』用意しました」「
マリー「やった！エイダのタルト好きなんだよね！」

エイコア「フルーツタルト！？そんなのまで作れるのーー？」
ナギサ「プリンではないのか…タルトとは何だ？」

面白くほどに反応が分かれれる。

ナギサに至っては頭の上に『?』が3つくらい浮かんでいる。

マリー「まあまあ食べてみればわかるつて！」

エイコア「このレベルのスイーツを家に帰れば毎日食べられる
だなんて羨ましいなマリー…」

ナギサ「さうか、まあエイダ特製ならば美味しいに違いないーー」「
エイダ「お褒めに『』り光栄ですが皆様のお口に合つか…

何分マスター好みの味付けなもので…」

マリー「エイダそれ私の味覚がおかしそうに言つてるのーー
おこしこじゃん甘いのーー」

あはは、と歯から同時に笑われる。
いやいや甘いは正義ですよ！

ナギサ「…あの、早く食べてみたいのだが…」

エイダ「そうですね、それではご賞味ください」

「…いただきますーー」

「…」この時は3人の声にブレがない。

…いや、エイダの作るお菓子にハズレはないから仕方ない。
…本当にハズレた試しがないから恐ろしいのだが。

ナギサ「…」

マリー「ナギサ、どう？初めてのタルトは

ナギサ「マリー…」れは…こんなものが…」

マリー「…え、もしかして美味しくなかつた？」オロオロ

ナギサが猛烈な勢いで首を振る。…横に。

ナギサ「こんな美味しいものがあつたなんて知らなかつたぞ！

あの時カフェで食べたプリンとは何だつたのか…！」

エイダ「ふふ、お口に合つましたようで光榮です」

エミコア「……ねえエイダ、カフェで働きなよ。いや本当に。このタルトを越える商品あそこには無いって…」

讃められて嬉しいのか、満更でもなさそつた表情をしながら。それでもエイダは首を横に振つた。

エイダ「お褒めのお言葉ありがとうございます。ですが私は、マスターのためだけに作りたいんです」

マリー「エイダ…」

エミコア「おーおー隅に置けないねえマリー？」

ナギサ「本当にだ。羨ましいぞマリー」

「マリー「いやいやタルトも美味しいけど一番驚いた製作物は他に

あるんですよこれが」

エイダ「…何か特別なもの作りましたっけ?」

「…製作した本人が忘れているとは。

まあ毎日の仕事に追われていれば仕方もないかな。

マリー「ほら、クラウチさんとウルスラさんの結婚式を、わざやかながらやりたじゃないですか?」

H//コア「あー、」W社員だけで開いたあれね?

わざやかといつても社員全員集合だつたけどね…」

マリー「ウルスラさんの結婚式なんだから報道陣が来なかつただけさやかでしょ…でね、そのときのあのケーキあるじやん?」

ナギサ「ああ、3段くらいだつたかのウェディングケーキか」

マリー「そうそれ。エイダつたらそれを次の日作っちゃつてね?」

あれは驚いた。朝日が覚めたら部屋にウェディングケーキが有つた、なんて体験は他に聞いたことがない。

エイダ「ああ、そんなこともしましたねえ…あれはパーティシード

たるもの誰でも一度は作りたくなるじゃないですか?」

H//コア「いやあんたパートナーマシナリーでしょつよー?」

ナギサ「…いや、本当にマシナリーなのだろうか…マリーとい

エイダといい似たもの同士なのだな…」

あはは、と笑つて流す。

ふと、思い出したようにエミコアが言った。

エミコア「あ、そうだナギサ。今日から明日にかけて暇？」
ナギサ「いや、大星靈祭に行こうかと思つていいのだが…」

ふつ、とナギサの顔に影が差す。

そういうば浴衣買つてたし楽しみにしてるのかな、と思つてみる。
マリー「…ていうかまだ誘つてなかつたんだ…」
エミコア「いや、ナギサ探しても部屋にいなかつたんだもん…でも、
大星靈祭にいくならついでに参加してみない？ 祭の
花に」

ナギサの顔が一気に明るくなつた。効果音がつくならパアッ！

ナギサ「まさかヤオログレースか！？」
エミコア「名答！ 一人メンバー集めてるんだけど？ 来ない？」
ナギサ「是非もない！ 抽選に漏れたから普通にお祭りに行こうとしてただけだからな！」

：抽選が行われるほど倍率が高いのか、と今知つた。
カレンさんに会つたらお礼を言おう…。
と、思つていたその時、エイダが申し訳なさそうな顔で「うちを見ているのに気がついた。

マリー「どしたのエイダ？ 何かあつた？」
エイダ「…いえ、本当に私がメンバーでいいんでしょうか、と…」
マリー「何だそんなこと…ねえ一人とも、ヤオログレースに

エイダも参加したつていいよね?」

エイダは驚いたのか、私の口を塞ぎにかかってくる。
だけどもう言いたい」とは言つてしまつたので意味がない。
テンパるエイダが1日に2回も見られるなんて…明日何がありそつ。
なんて思つていたら。

ナギサ「なぜ悩む?私は一向にかまわないが」

エミコア「そうだよ。種族の制限がされてないんだからいいに
決まつてるじゃん?」

…うん。IJの2人でよかつたと心から思つ。

マリー「…だそうですガエイダさん、どうします?」

エイダ「そ、その…不束ものですが宜しくお願ひします!」

マリー「エイダそれ意味違つ…」

ナギサ「…エイダでも緊張するのだな」

エミコア「まあなんていうかこの一人はある意味で他のキャストと
一線を画すからねえ…」

マリー「誉められてない氣がする…」

氣のせい氣のせい、と軽く流される。

…IJの頃にはもつみんなの皿の上にタルトは残つていなかつた。

ナギサ「ああ美味しかつた、」うつせまエイダ。さて、私はレー
スの

用意をして」よつと思つ。ではまた「

エミコア「私も行かなきやなあ…んじやまたあとで…ナギサはあた

しが

連れていくから先にターミナル行つとこでー！」

マリー「うん、じゃまたあとでね～」

エイダ「後ほどお会いしまじょう

ハイタ「お待たせしました」（後書き）

…タルト食べて終わっちゃった！！

すいません明日また続き上げますんで許してください^ ^；

ナギサ「すまない、待たせてしまつたか」（前書き）

うあ、自分で決めた締め切り守れなかつた
遅くなりすいませんでした（ - - - - ）

今回でまた二ユーテイズに向かいます！
それではどうぞ！

ナギサ「すまない、待たせてしまつたか

—— PPTシャトル乗り場

マリー「つづん、私たちも今きたとこだから大丈夫」
ナギサ「なら良いのだが…」

実は30分前からいるなんて言えない。
…まあ久しぶりのシャトルだから緊張して早く来すぎ
ちゃつたんだけどね。

H//コア「恥ずかしながら途中の道で迷ひちゃつて…」
マリー「… H//コアでも道に迷つんだ…？」

H//コア「私を何だと思つてるのぞ…？」

マリー「いやあ、道をえらべることを知らない天才少女かと」

H//コア「… 即答で警められても困るなあ…」

おお、H//コアの顔が見る見る赤くなつて…
…耳の先まで真つ赤になつちゃつた。

ナギサ「… H//コア、顔が赤いぞ？熱もあるのか？」
マリー「あはは、そこ突つ込んじやうか…」

H//コア「ね、熱なんかないない…あ、ほりシャトルの
搭乗手続き始まつちやうからもう行こ…」
マリー「はいはい、じゃあ、出発しよー！」

エイダ「了解です、マスター」

ナギサ「ああ、行こう。ニュー・テイズへ」

――惑星ニュー・テイズ・大星靈祭会場付近

ナギサ「なあマリー。一つ聞きたいことがあるのだが」「マリー「ん? なあに?」

ナギサ「今は真夜中なんだろう? なぜこんなに人がいるのだ」「マリー「ああ、お祭りだからねえ……」

エミコア「といつても前夜なのにこの混みよははちょっと異常だと思つねえ……」

エイダ「30年に一度のお祭りですし、この太陽系中から観光に来ている人々かと思います」

ナギサ「そういうものなのか……」

エミコア「そうそつお祭りなんて結構そういうもんよっ。」

ナギサが合点した、といつ眞剣に頷いている横で、なにやらエイダがキヨロキヨロしている。

マリー「どしたのエイダ?」

エイダ「…」れが… そうなのですね…」

エイダの顔にニタア、という効果音がふさわしい笑みが浮かぶ。

マリー「H、エイダさん…？」

エイダ「マスター、私ちょっと味の探求の旅に出でます…」

…こきなりそう呟んだエイダの目には星が輝いていた気がする。Hミコアとナギサがびっくりしたようにこいつらを向いた。

エイダ「朝食までには宿舎に向かいますので…それでは…」

マリー「あ、はい行つてらっしゃ…」

ビシッ！と何故か敬礼を決めたエイダは、尋常じゃないスピードで祭りのために開かれている屋台に向かつて走つていった。

Hミコア「…あたしは突つ込まないよ？」

ナギサ「では私が突つ込もう。マリー、エイダはびつしたのだ？」

マリー「…エイダの調理上手は元はといえば食いしん坊の進化でさ、食べたこと無いものとか見たこと無いものとかがあると、

たまーに、たまーにだけね？ああして暴走するんだ…」

ナギサ「成る程…味への飽くなき探求心といつわけか…」

マリー「良く言つとそななるね…本当に朝までに帰つてくるかなあ」
Hミコア「や、あたしもう屋台回る気力無いから宿に向かいたい
なあ…なんて思つたり」

ナギサ「はは、Hミリアは眠そつだしな。じゃあ私も宿屋へと向かおうと思うのだが貴女はどうする?」

マリー「私も行くよ…正直すゞこ睡ぐてね…」

ナギサ「何だ何だ二人とも夜更かしには弱いのだな」

Hミリア「いや、あたしは单なる寝不足…」

マリー「私は夜更かし苦手なんだけどね…任務上早起きが多いから…」
ナギサ「まだまだだな二人とも、それでは宿舎に向かおうじゃないか」

マリー「ふあい…」

Hミリア「ちよつマリーあくび移さないで…ふああ…」

―― 民宿『雅』

Hミリア「…歩いてたら眠気さめちゃった…」

ナギサ「ではお風呂にでも入つてきたらどうだ?私はまだ起きているから大丈夫だ」

Hミリア「じゃあお言葉に甘えて…あ、マリー先に入る?…ってあ

れ？

マリー、「…行っちゃったの？」

ナギサ「ん？ わたしも布団をだすと言つて押し入れを開けていたのまでは

見たがそれからは知らないぞ？」

H//コア「…まさか？」

中途半端に閉じられていた押し入れの戸を開けるとマリーは

マリー「……」

H//コア「押し入れで布団にぐるまつて寝るとは… 猫か！」

ナギサ「…近くで叫んでも起きなことはよっぽど深く眠りなのだな

H//コア「…とつあえず布団出して敷いてそこに寝かせつけへ。」

ナギサ「せうしょ♪。せえの、で布団」と持ち上げられるだらつか

？」

H//コア「こいつキャストのくせに軽いから大丈夫だと思つ…

せえ、のつ…」

ナギサ「…想像よりは軽いな」

H//コア「でしょ？ 羨ましいつたりありやしない… じゃあそつと降ろして

…よしー」

マリー「…わう…」

ナギサ「これでも起きなことは…」

H//コア「たまに本当のマリーが世界を救った英雄だつてのを感じるよ……」

ナギサ「同感だ。……が、いやとこいつときは修羅かと思つて戦つてぶりだからな」

H//コア「本当に驚くよね、顔と戦闘スタイルのギャップに……」

ナギサ「泣きながら的確に急所をつけてくるとは想像してこなかつたよ……」

あれは後ろめたさもあって心が折れそうだった……」

H//コア「そか、ナギサは実際に戦つたんだつけ……」愁傷様です

マリー「…………んう？…………すう…………」

ナギサ「……起きても起きそうがないが一応退散するといつ

H//コア「賛成。あ、なら一緒にお風呂入っちゃうっ！」

ナギサ「背中の流しあいといふ奴だな、せってみよう

H//コア「……後ろからだからって殴りからないでねっ！」

ナギサ「大丈夫だ、……多分。うん」

H//コア「そこは『冗談でも絶対つて言つてしましかつたなあ……』

ナギサ「細かいことはいいんだ。では行くとしよう」

H//コア「うん、行つつか。……行つてくるわ、マリー

マリー「…………んう…………むぎむぎむぎ

――その頃、屋台

エイダ「ジャ・ガイモにコルトバターとは新しい…
これは食べるしかありませんね！！」

ナギサ「すまない、待たせてしまったか」（後書き）

そういえばエミコアとマコーってニュー・デイズから朝帰り
た二コ一デイズなんですよねえ…
夜にま

はい、ヤオロズ様が終わったらちゃんと他の星のも書きます（汗

マニ「…あた寝たへん」（前書）

更新が不定期ですみません<>；

ちょっと忙しくなつてきただんで更に不定期になるかもですがお許しください

マリー「よく寝たわ……」

——民宿『雅』AM05:00

マリー「でもまだ眠い……」

そう言つて軽く皿をこする。

カメラアイが傷つくだけなのだが、なぜかこすりたくなる。多分これも『ヒート』らしさなのだろう、と起動したてでまだハツキリしない頭で考えていると声をかけられた。

H//コア「あ、マリー起きた? おはよーーー!」

マリー「あ、おはよーH//コア……朝から元気だね……」

ナギサ「何だ、貴女は朝に弱いのか?」

マリー「あ、ナギサもおはよー……いや、朝つて頭がハツキリしないんだよねえ……」

ナギサ「本当にキャストなのか本氣で疑わしくなつてくるな……」

マリー「いやー、私からしたら他のキャストが何であんなに機械的に動けるのかわからないよ……」

H//コア「……チュルシーといいあんたといいトルウィングって変わり者のキャストぞろいなのかな?」

マリー「いやいやバスクさんがいるでしょ!」

ナギサ「……バスクもなかなか変わり者だと想つのだが……」

マリー「さうかな? んー、よくわかんないわ」

「」ちや「」ちや考えると頭痛が起きそうなので放置。

… そう、私には頭痛まであるのだけどこれがまたキツい。

特にキツい日差しを直接見たりすると起きるのだが正直設計した博士を恨みたくなるレベルだ。

H//コア「そういうえばエイダ帰つてきでないね…どつしたのかな？」
マリー「うん、多分公園かどこかで寝てると思つよ」

ナギサ「随分と即答なのだな…もしやこれが初めてではないのか？」
マリー「あはは…」の会社に入る前に何回かね…」

H//コア「そうだ、あんたがウチに来る前にことつて知らないかも。
今度聞かせてくんない？」

ナギサ「ああ、それは私も興味があるな。私からもお願ひしたい」

マリー「いいけど…面白くないと思つよ？」

大丈夫大丈夫、と二人で頷いてくるので仕方なく。

マリー「そつか、じやあこの祭が終わつて暇ができたらでいい？」
H//コア「うんうん！約束だからね～！」

ナギサ「ああ。楽しみにしているよ」

マリー「う……そんなに意氣込まれても…」

そうやつて3人で笑い合つていたら突然。
ペペペペ、と聞き慣れた音が鳴つた。

エミリア「通信？……あたしじゃないな」

ナギサ「私でもないから貴女だろう。私達には構わざ出るといい

マリー「じゃあ失礼して……はい、マリーです」

? ? ?『すみません気がついたら朝で日が昇つて……』

通信回線をオンにした瞬間だつた。

…「これ以上ないんじやないかと言ひほどの爆音でいきなり謝られた。

エミリア「……エイダか」

ナギサ「……エイダだな」

エイダ『マスター！？大丈夫ですか聞こえますか届いてますか！？』

マリー「あー……はい。大丈夫ですか聞こえます届いてます。エイダ、
とりあえず落ち着こつか

エミリア「……慣れてるね」

ナギサ「……しかも相当だな」

エイダ『はつ、はい……』

マリー「おつけー？よし、エイダは今ビーハーの？」

エイダ『えつと…………あれ？……えつと……あ、はい。オウトク山の

麓の公園です！』

エミリア「公園だつてさ……」

ナギサ「マリーの推測は悔れないな……」

マリー「わかつたよ、じゃあ迎えに行くからその公園の特徴教えて

？」

エイダ『えつと……中央に等身大のルツ星靈首長の像があります』

Hミコア「カレンさんじゃないんだ…」
ナギサ「ルツとはこつたい誰なんだ？」

マリー「わかりやすいね…じゃあ今から出て向かうから…そうだけ、
2、30分くらい待っててくれる？」

エイダ『わ、わかりました…』

Hミコア「エイダがマリーに言いくるめられてる…」
ナギサ「…その言い方は語弊が生じないか？」

マリー「んじゃ、切るからまた後でね～」
エイダ『は、はい…』

ブン、と音を立てて回線を閉じて一人の方を振り返る。

マリー「聞いてたよね？朝ご飯は屋台で何か、でいいかな？」

Hミコア「うん、あたしは構わないよ」

ナギサ「ところどころの時間では店も開いていないだらうからな
マリー「それもやうなんだけど…煮泊まりにしておいてよかつたあ

Hミコア「あはは、ほんとに…まあ、行きませか？」
マリー「あーちょっと待つて！」

ナギサ「ん？どうかしたのか？」

Hミコア「何がエイダに伝え忘れでもした？」

マリー「いや、その……お風呂入つてくるなーーー！」

返事を聞く前に私は準備をすませて部屋に備え付けてあるお風呂に向かつっていた。

後ろからため息が聞こえたけど気にしないことにしておけ。

結局予定の倍ほどエイダを待たせてしまつことになつたのだった。

――1時間後、オウトク山麓の公園

マリー「エイダお待たせーー！」

エイダ「マスター！」

エミリア「……は、はやいって……あたし、もう、ダメ……」

ナギサ「まだまだな、エミリア。もつと体力をつけなければな」

エミリア「傭兵やつながら博士つて多分グラール中探しでもあたしきらこのもんだよ……」

マリー「あ、ごめんねエミリア走らせちゃつて……」

走るのはいいけど一人とも速すぎると言われるが仕方ない。
・ナギサのランニングペースに合わせたらエミリアのダッシュになつてしまつたのだ。

エイダ「お一人もすみません私が帰らなかつたばかりに……」
ナギサ「なに、いい準備運動になつたから気にしないでくれ」

エミリア「そーそー。気にしない気にしない…………」ふらつ

マリー「エミリア大丈夫！？」

エミリアが大きさに倒れかかってきた。

演技とはわかつていても反射的に受け止める。

これ見よがしに胸を押されて死んだふりをされたら……

ヒーリア「...えへへ」

マリー「いや、兼ねしかなにかと思つて…」

「ハリコア」「ホークー」「ベニラバニラ」
「ハイダ」「...」「グリーングリーン」

丁巳

可愛らしく小首を傾げたエイダがミリアの方を向く。

「アーティストの仕事は、必ずしもアーティストの仕事ではない」

ナギサ「そうか、なら屋台に行こうじゃないか」

メモリーデバイスの構造と機能

エイダ「あ、それなり匂いの焼きたまごとあいのフライドポテト屋さんにおすすめですよ。」

エミリア「え？…朝からそれは重くない？」

エイターいえ、焼きそばは塙で味付けしてあるたのであります

ポテトは良い油を使っていたので胃にもたれません

でした」

ナギサ「…なるほど、ただ食べ歩いていたわけではないのか

マリー「このリサーチ力がエイダの力だからねえ…」

エミコア「すごいねエイダ…んじゃ、いつてみよーー！」

「　　おーーーーー

マリー「あ、ヤオロズレー斯何時からだつけ？」

エイダ「大丈夫ですマスター。あと1時間ありますから

マニ「ナヘ寝たまへ」「…後書き」(新書)

…進み方が致命的に遅いですねvvv
細かく描[跡]よつと思つてほになこのですがなぜかこなことな
つてしまつとですvvv

生温ご皿で覗かれていたからだべつに嬉しけりや(ーーーーー)

H///コア「屋台で食べる物って美味しいよねー」（前書き）

3話連続で投稿してヤオローズレース終わらせたことと思います（汗

）意見・感想等ありましたらお願いします（――）

それでまたねー。

H//リア 「屋台で食べる物って美味しいよねー！」

——大星靈祭会場・道の外れ

H//コア 「味的にはレストランとかの方が良いんだろうけど
なんとか屋台の物って美味しいよねえ…」 もぐもぐ

ナギサ 「同感だ。味覚というのは不思議なものだな」 むぐむぐ
私達は今、道の外れの石段に腰掛けエイダおすすめの屋台の
焼きそばとポテトに舌鼓を打っているところだ。
…エイダの言ひように、朝には重そうに見えるメニューながら
その実全然重くないといつ不思議な朝食。

マリー 「さすが、エイダの調査に外れないねえ…って、あれ？」

エイダは食べないの？ 「もしゃもしゃ

エイダ 「いえ、流れで買つてしまつたのはいいのですが…」

H//リア 「…もしかして私達の前だからって遠慮してる?」 じっくん
ナギサ 「む。それはよくないな。私達は気にしないから充分に
食べる」と良い「もぐもぐ

エイダ 「いえ、お言葉は嬉しいのですが…」 そわそわ

マリー 「…わかつた。エイダつてば夜中に食べ過ぎてお腹空いて
ないんでしょう」 じっくん

気まずそうな顔をしてエイダが顔を伏せる。

…これは図星だね。

エミリア「へー、エイダも可愛いところあるんだねえ」もぐもぐ
エイダ「かわつ…ー? ビ、ビコにそんな要素があるですか私に! ?」

ナギサ「私にもわかるだ。」いつやつて取り乱したりするといろだな
マリー「あはは…エイダ、顔真っ赤だけど大丈夫?」

エイダ「…………マスターのバカツ!」

ドスツ、という鈍い音とともに。

エイダの渾身のタックルが私の左わき腹にクリティカルヒットした。

マリー「『ふう! ?…………エイダ、それは、キツい…………』がくつ

焼きそばをかばつて受け身がとれなかつた私は、そのまま右方向へと倒れることとなつてしまつた。

エミリア「『ふうつて叫ぶヒト初めて見たよ…マリー? 生きてるー?』

ナギサ「それにしてもタックルとは…その選択に感動すら覚えるよ

…

マリー「いや、感心してないでお願いですから起こしてください…」

このやりとりの間もエイダが私の体の上に乗つてゐる状態で。
…横に器用に起きあがる、なんてこともできないので。
二人の助けを待つしかないのだった。

エミリア「えー?まあまあ、これ食べ終わつたらで良い?」ずるずる
ナギサ「なんだエミリア、まだ食べ終わつてなかつたのか?」

H//コア「つてナギサもつ食べ終わってんじゃん!速くない?」
ナギサ「なこ、ちゃんと味わっているから問題ないさ」「

マリー「あのー…こちゅつこで起じてもうりふませんか…?」

「「こちゅついてなんかなー?」」「

いやいや反応するヒルソノジヤなー?」
結果、私が起こしてもらえたのはそれから10分ほどたった後だ
つた…

――20分後

エイダ「…取り乱してすみませんでした…」

H//コア「いやいや。あたしは全く気にしないよ~?」

ナギサ「わうだ。少なくとも私達の前では堅くならずともここのだ
から」

マリー「わうわう…いや、でもさすがに攻撃は抑えよつか…」

エイダ「あれはマスターがいけないんですね!」

マリー「あ、それはごめん……つてまたかの逆ギレだー?」

H//コア「あーあーはーはー。夫婦漫才中断してー。それわうへー
スの

出発点に向かった方が良いかもよ~・時間的ヒ

「元の

夫婦漫才じや……！

と、言いかけたところでエイダがまたもや真っ赤になつてゐるのを見てしまい。

否定するに否定できない私は大人しくエミリアの言葉に頷くしかできなかつた。

——大星靈祭会場・ヤオロズレース出発点

がやがや

マリー「うわっ！ テレビの取材班がいる！」

エミリア「そりやここまで大きなお祭りだからねえ……お、何だかあのチームについて行くみたいだよ？」

ナギサ「……あのチームはそうそつたる面子だな……」

エイダ「はい……ウェーバー兄妹様方とカレン様とヒューガ様が確認できます」

マリー「優勝候補筆頭かあ……何か負けたくないね」

エミリア「お？ 珍しくマリーが燃えてるね！ これは優勝は頂いたかな！」

ナギサ「いや、勝負は気が抜けないものだ…焦らず堅実に行こう」

エイダ「ナギサ様に賛成です。…あ、始まるみたいですね！」

『30年に一度しか行われない一大イベントーーJの記念すべきレース
ðこのチームが優勝するのでしょうか!-』

スクリーンに大々的に映し出された紫が田に留まる若い女性が大きく声を上げると、会場が更に沸き上がった。

マリー「……ねえねえエイダ、あの紫の人って有名なの?」
エイダ「グラールチャンネル5のキャスターですよ、マスターも見
たこと

「へりいはあるんじゃないですか?」
「うそー

「直接会つた」とのないヒートの名前は覚えられないんだけどなあ。
まあ話すこともないだろ?、と高をくくつていふと。

? ? ? 「ハーアー! グラールチャンネル5、ニコースキキャスターの
ハルでーす! お名前と、このレースにかけている氣
持ちを

伺つてもよろしいですか?」

「はい?

マリー「ええと、それは私に…?」

ハル「はい! …つて、貴女はもしかして! ?あのリトルウイニング社
のマリーさんでしょつか! ?」

マイクから拡大された声に一気に会場が静まり返る。

「今日は仕事で來た訳じや無いのにー

「うそだろ、マリーって、あの?」

「え、ほんとー…マリマリ、マリマリこのーの

！？」

「ハルを探せばそこにあるはず！」

マリー「ええ、つと…すいません今日はオフなんで勘弁してください
いい！」

と、言い残して。

エイダとヒミコアとナギサの手をまとめて引いてその場から脱兎の
「」とく
逃げ去…………つた、はずだつた。

イーサン「おー、マリーじゃねえか！また会つたな！」
ヒコーガ「おや、こんなところで奇遇ですね…これもまた、
星靈のお導きでしょうか」

突然現れた二人に進路を塞がれてしまい。

カレン「ああ、来てくれたのか。嬉しいよ」

ルミア「お久しぶりです。また会えて嬉しいです」

遅れてきた二人に左右を塞がれてしまつて。

ハル「に、逃げないでくださいマリーさん…せめて一言お詫葉を…」

更に後ろも塞がれてしまつてからはもう。

マリー「や、やめてください押さないで…待つてやめて落ち着いて

え！！」

人の波に流されるしか私の行き先は残っていなかつた。

マリー「わ、散々な田にあつた…」

——ヤオロズレース・スタート地点

マリー「人里離れた小さな村で暮らしたい… そつだ、カーシュ族になろう」

エミコア「ちよいちよい落ち着いてマリー！？」

エイダ「そつですよ。私なんてルミア様に抱き抱えられて放置という…

何ですかこのちよつとした辱めは

ナギサ「まあまあ落ち着け。そもそもレースも始まるし、解放してくれたぶん良心的なファンだったじやないか」

…まあ今回は比較的良心的だつたけど。
…でも比較的なんです。

マリー「まあねえ…連れ去られそつになつたときまちよつと剣影
だしけたけど…」

エミコア「ほらほらスクリーン見て。カウントダウン始まるよ？」

スクリーンに田を向けると、今までにハルが声を張り上げているところ
だった。

『ハーヴィー！さてさて面白くなつて参りましたヤオロズレース！
新旧英雄対決がこの田で見られるかも！？一瞬たりとも田が離せ

ません！

前情報は全くなしのプライベート参加、チームリトルウイニングスと！

宇宙警察の意地にかけて負けられない！チームガーディアンズ！両者が列の最前線で優勝を取りに走り！飛び！時に戦う！運命のカウントダウン、今スタートです！！』

マリー「…私達ってチームリトルウイニングスなんだ…」

エミリア「突つ込みどこのそこの…？」

『5！』

イーサン「へつ、負けないぜ！」

カレン「気を抜くなよイーサン！相手が相手だ！」

『4！』

ナギサ「……ふう。よし。行ける！」

エイダ「補助・サポートは任せてくれさい！」

『3！』

ヒュー・ガ「ルミアちゃん、頑張りましょうね?」

ルミア「もう、ちゃんと付けはやめてくださいばー。」

『2-1.』

イーサン「マリー、優勝は頂くぜ?」

マリー「いえ、いくつもプライベートと言えど負けられませんー。」

『1-1.』

ルミア「…ナギサさん、負けませんよー。」

ナギサ「奇遇だな、私も負けるつもりはないんだ!」

『レース、スタート…。』

瞬間、会場が歓声とも怒号とも付かない爆音に包まれる。
スタートは同時、だがしかしすぐに城郭内に突入したために、お互
いの
チームの進行状況はわからない。

マリー「エイダ、敵が出たら補助お願い!」
エイダ「了解です!」

そう告げ、全力で走り出す。

…間もなく、敵の1陣が現れた。

エミコア「こいつ、頑丈な奴だ！ 気をつけて！」
ナギサ「ならばそれでも斬るまでだ！」

バイシヤ甲2-1型。オレンジの多脚マシンナー。
打撃が効きづらいな…」

マリー「エイダ！ チュイン溜めるからティーガ撃つて！」
エイダ「言われずとも…」

ギャリイン！と音をたてて実刀の剣影が弾かれる。
同じくナギサも弾かれるが、お互いにこれで体勢を崩すような
レベルではない。

弾かれながらも刀を振り抜き、返す鞘で間接を狙い隙を生み出す。

エイダ「マスター！ 行きます！」
マリー「おつけー！ せえ… のつ…」

かけ声とともにナギサと同時に後ろに回避する。
逃げるためではなく、巻き込まれないために。
回避したその瞬間、視界に爆弾岩が飛び込んできた。
バイシヤ甲2-1型が動けるようになつた瞬間。
動き出したエネミーとテクニックがぶつかり合つて爆発した。

エミコア「やつすがー！ ほりほり、どんどん行くよ。」
「…了解！（です…）」「…」

チームワークならば向こうには負けない自信がある。
ならば1体1体を確実にしとめても余裕はあるはずだ。

エイダ「敵反応感知しました！奥の左の小部屋です！」

ナギサ「手前は！？」

エイダ「恐らくブラフです！敵が少なすぎます！」

ナギサ「わかつた！奥だな！」

そう言つたナギサは奥の部屋に駆けていった。

遅れまいと私達も続く。

乱暴に襖を開け放ち、駆け込んだ先には先ほどとは違うマシナリーが。

エミリア「強い敵だよ…気をつけて！」

マリー「敵数3！小さいのを先に！5チエイン！」

ナギサ「了解！」

ギヤランゾとシノワビート。どうやらレリクスの奥から出てきた奴らだ。

1体しかいないギヤランゾの横をくぐり抜け、奥のシノワに向かう。自然と二手に分かれ、前衛と後衛でタッグを組む。

ナギサ「エミリア！行くぞ！」

エミリア「おつけ～！」

マリー「エイダ、援護お願い！」

エイダ「了解です！」

ほぼ同時に私とナギサの剣が金色に光る。
ナギサは空中から相手を何度も切りつける『スピニングブレイク』。

私は低い姿勢から相手を何度も突きつける『クロスハリケーン』。発動したアーツの動きに身を委ね、武器に仕込まれたリアクターが唸るのを感じる。

マリー「これでっ！」

ナギサ「終りだっ！」

ギャランゾが二ちらを振り返る前に。

人型の2体のマシナリーは爆散していた。

ウイィイイン。

脚部のキタピラで器用に二ちらを向いたギャランゾのカメラアイに剣影の刃を突き立てる。

マリー「…ふつ…」

突き立てた刃をそのまま押し込み、ボディを制御している基盤を破壊する。

ギャランゾの姿勢が崩れたのを確認して即、回避行動に移る。ギャランゾの自爆行動から逃げるためだ。

ナギサ「…私のソードではできないやり方だな」

マリー「まあ簡単に真似されても困るしね？ 行こー！」

部屋の出口ではドロップされた鍵をHミリアが回収するところだった。

Hミリア「ビンゴーさすがエイダー！」

エイダ「お褒めいただき光栄です」

部屋のすぐ外にあったフローツを解除し、次のブロックへと向かつ。…と、城郭の外側を登る階段に出た。

エミリア「見てーあつちにカレンさんたちがー！」

ナギサ「本當だ…向こうもやるな、こっちも負けていられないぞー。」

イーサン『はあ！？信頼しあつてるとか別にそんなんじゃねーし』
ヒューガ『そ、そうですよ。僕はただ正直に話しただけで……』

ハル『フフフ。ではそつこにじつあるわがまま』

マリー「ふふ、何か楽しそうだね？」

エイダ「ええ。なんだか皆さん伸び伸びとしていますね」

エミリア「あー、立場とかいつぱいある人たちだからなあ…」

ナギサ「?私は今も充分楽しいぞ?」

マリー「やうやう、やつぱり楽しまなきやー！」

エイダ「では楽しみながら向こうに勝つて2度おいしくレースに
しましょー！」

エミリア「それ賛成ーーっし、ちやぢりやつと行きますかー！」

ナギサ「ああ、先に進もうー。」

階段を登つるとそこにはあつたのは大きめの広場だった。

マリー「あれ、下り階段が閉ざされてる…敵を倒さなきゃって奴か
エイダ「…とりあえず中央に進みましょ。前包囲に注意してください
れー」

ナギサ「了解だ」

H//コア「おつけー…ほらお出ましだー」

マリー「……!？」

エイダ「どうしましたマスターーー?」

出てきたモンスターはゼルーモンが2匹。
…ラッピー・ポレックが2匹。

マリー「無理無理可愛いもん!!斬れないよーー!」

エイダがこけた。

…エイダがこけた!?

ナギサ「では私がラッピーを相手しよう。行くだH//コアー…
H//コア「はいはいっと…狙い定めて…ショートツー…」

エイダ「で、ではゼルーモンは私達ですね!行きましょーー」
マリー「う、うん…よしーー!こつらならーー!」

…ラッピーが可愛くて斬れないとかこのノ女だ私はつ…
少し恥ずかしくてやりきれない感情を田の前の相手に向ける…

マリー「エイダは右の1匹をお願い!」

エイダ「了解です!」

ゼルーモンのターゲットは運良く私だ。思考を切り替える。

攻撃の予備動作を見切る。挙げられたのは右腕、死角は右脇腹！

「マリー「はつ！」

かけ声とともにゼルーモンの横を駆け抜ける。剣影は鞘の中。腕の下をぐぐり抜ける。軌道修正された腕が髪をかすめていく。ゼルーモンから見て右斜め後ろ、振り返る動作までに2秒。充分だ、行ける。剣影が鞘の中で加速する。迸る閃光はその敵の右腕を切り落としていた。

オオオオオオッ！！

ゼルーモンが声にならない叫びを上げる。右腕が地に落ち、切断面から緑の血液が噴出する。振り向こうとしたその胴体に剣影を突き刺し、動きを止める。意識が加速するのがわかる。逆手に刺した剣をそのまま上に跳ね上げて主要な血管を寸断させる。叫びすら上げさせない。返す刀で頭頂部から体を2分割する。崩れ落ちる前に後方へ回避。先ほどまで自分のいた場所が緑の血液にまみれる。即座に分解され跡形もなくなるゼルーモン。剣影に付いた血を払い、立ち上がりつて周りを見ると皆もそれぞれ戦闘を終えるところだった。

マリー「皆、終わった？」

エイダ「戦闘終了、敵影、ゼロ。ミッション完了です

ナギサ「いやいやまだこれからだろ？、エイダ？」

エイダ「すいません、癖で……」

ヒコア「どんな癖よ……って……ええ……？」

びよーん、と。

間の抜けた音と共にHミコアが壇に向こうに跳んでいった。

エイダ「カタパルト……！」
マリー「行こうつー。」

びよーん、びよーん、と。間の抜けた音と共に私達も跳んでいく。
着いた先ではHミコアがコナンを砲台で撃ちまくつて居るところだ
った。

Hミコア「…よっし！これで終わりっとー。」

最後に奥の壁に備えてあつたセンサーに弾を当てるとい
次のカタパルトが現れた。

ナギサ「Hミリア、随分と仕事が速いな」

Hミリア「やるときややりますよー！さて次々い！」

カタパルトを飛んだ先には。

また砲台。…と。フェンスで進めない奥のHリアにセンサーが2つ。
先ほどと違うのは、

…フェンスのこから側にエネミーが出現したことだ。

マリー「砲台は任せて！援護お願い！」

「「「了解！」」」

備え付けの砲台に向かい、狙いを定める。

バリアフェンスが邪魔をしてくるが大した障害ではない。

…呼吸を鎮め、トリガーを絞る。

弾は直線で飛んでいき…見事、的に命中した。

マリー「終わったよ！」

ナギサ「ひらりも片が付いた。先に進むぞ。」

びょ～ん。

真剣な顔で間の抜けた音を出して跳んでいくナギサに笑いをこらえながら、次のエリアへと向かう。

ナギサ「マリーか！？援護してくれ！」

到着早々ナギサが戦闘を始めていた。

群がるゼルーモンを斬り裂き、斬り伏せ。突進してくるゴナンの頭を切り落とし。

…最後にエミリアが到着する前に敵は片づいてしまった。

エミリア「お待たせえ……つてはっしゃつ……ですがだわあ…」

マリー「ふふ、ちょっとやる気だからね。進もう？」

ギィイ、と音を立てた扉の向こうでは道が合流していく。

…あらうじとかチームガーディアンズと鉢合わせしてしまった。

イーサン「よし、マリーじゃねーか。奇遇だな、ここで会うなんてマリー「あら、ウエーバーさんじゃないですか。奇遇ですねえ」

エミリア（怖いよ！何かあの二人ドス黒いオーラ纏つてるよー）
ナギサ（ああ、私にはわかるぞ…あれは本気の殺氣だー）

ルミア「……行くよ、お兄ちゃん！今はレースに集中！」
エイダ「マスター、行きますよ。優勝するんでしちゃう！」

カレン（…あちもひちも火花だらけだぞ…？）
ヒューガ（まあまあ。…血は争えないんですよ…）

マリー「では」機嫌よ。優勝できると良いですね
イーサン「サンキュー。じゃあ表彰台で会おうぜ」

あちらは左に、こちらは右。

通路の奥の曲がり角を曲がった途端…恥ずかしことに腰が抜けた。

マリー「しゅ、修羅場なんて随分経験してないから…」
エイダ「…綿まらないマスターですねえ…」

HIIKKA「いや、本気でひひひひやつたよあたし…」
ナギサ「…貴女でもあそこまでの殺氣を出せるのだな…」

などと軽口をたたいていたり立たりつつになつ。

マリー「お待たせー行こー！」

次のエリアへと歩を進めていた。

Hイダ「走りましょうー！」

このHリアの最初の敵はいろいろと厄介だった。

フィンジH.R。サーフボードで空中を滑空するテクニック耐性をもつマシナリー。それが2体。

動きが止まればこちらの物、とばかりに破壊しながら進んでいくと。

…奇妙なカーボが田に入った。

『へいへい、今なら大星靈祭特価でアイテム販売中だよ！』

『安いよ安いよ買つていきな！』

『か、買つていってほしいんだな…』

Hミコア「あ、ボル3兄弟だ」

マリー「…誰？Hミリア、知り合いで？」

Hミコア「ううん…てか、マリーもあつたこと会つたよね…？」

マリー「…えへへ…」

Hミコア「…まああの3兄弟だし…その笑顔に免じて許すナギサ」「…すまない、ちょっと品を見てくる」

Hミコア「絶対ぼったくりだからやめときなよ…うん、聞いてないね」

『へいへい眼帯の嬢ちゃん！』

『買いたくなくても買つてつてくれよなー』

『か、買わないとひどいんだな！』

次の瞬間。

ナギサがいきなり剣を持ち出したかと思つと、瞬く間にカーゴを破壊し尽くしてしまつた。

マリー「ちよちよちよ、ナギサ！？」

ナギサ「…なぜだか無性に腹が立つたんだ…」

エミリア「許す！」

マリー「うわあ速断だあ…まあ、いかにも悪徳っぽいし、いつか」

『俺たちのサクセスがあああ…』

エミリア「無視無視。いーじつ。」

マリー「うん！」

そして敵に遭遇しないまましばらく進むと。

…どこか見覚えのあるヒトが2つの転送装置の前に立ちはだかっていた。

マリー「イズマ・ルツ星靈首長？」「何してるんですか…？」
ルツ「見てわからぬかね。クイズの出題だ。」

ナギサ「どこもかしこも人員不足、か…」

エミリア「世知辛いねえ…」

エイダ「マスター、これが窓際族つてやつですか？」

マリー「しつ、あんまり大きな声で言つちゃいけないよ？」

ルツ「……「ホン。それでは第1回大星靈祭クイ一一ズ！」

マリー「全力でスルーされた！？」

ルツ『今、人氣急上昇中のルミア。その幼い頃の髪型は！？』

マリー「知らないよ！…」

エミリア「ていうかルミアの人氣急上昇中ってどこで！？』

ナギサ「…それを知つているこの人は何者なんだ…？」

エイダ「まあまあ三者三様のツツ『ミミですね…』

ルツ「1、三つ編み。2、ツインテール。さあどうだ！」

エイダ「ツインテール」キリッ

マリー「早いねエイダ！？その心は？」

エイダ「いえ、ツインテにしておけば存外何とかなるかなあ、と」

エミリア「適当だ！？」

ナギサ「しかし他に案もないのだからそれで行こう！」

マリー「じゃあ…2で」

ルツ「では正解を送装置の奥で確かめると良いー！」

シユインツ

『おめでとうござりますー見事正解です！…』

ナギサ「…グラール教団とは恐ろしいな…」

エイダ「今度ルミア様に頼んでツインテールにしてみてもうこまし
ょう」「う」

マリー「エイダす」「ーい！やつたね！」

エミリア「あ、向こうにまた下り階段があるよ！行ってみよ！」

ナギサ「…嫌な予感しかしないのだが…」

エイダ「奇遇ですね、私もです…」

ナギサとエイダの予想は当たっていたのだろう。
…階段の下に見覚えのある鳥帽子頭が見えてきた。

マリー「……あれ、イズマ・ルツ星靈首長…？」

ルツ「第二回大星靈祭クイーーーーーーーーズー！」

エミリア「清々しいまでのシカトだ！？」

ナギサ「彼の精神力は驚嘆に値するな…」

マリー「一瞬でここまでくるとは…」

エイダ「マスター、シシコ Kunden では負けです」

ルツ『コートが好きなものと言えば？』

マリー「プリンかな」

エイダ「プリンですね」

ナギサ「プリンだらう」

エミリア「むしろプリン以外にあるの？」

ルツ「…1、ウパクラダ。2、プリン。まあどっちだ！」

「マリー「よく心折れませんね！？」

エイダ「マスター、相手にしていると先を越されてしましますよ？」
エミリア「2で。ほらほら転送装置行くよ」

マリー「ふ、二人とも非情だね…」
ナギサ「まあ勝負の最中なのだから仕方もないだろう。私たちも向かおう」

シユインツ

マリー「…あれ？ここは…？」

ナギサ「円形の舞台…なるほど、ここが最終エリアか」

その時。

一陣の風と共に何かが姿を現した。

？？？『妻は荒ぶる命と静寂なる魂を司る者なり』

エミリア「これが…ヤオロズ！」

ヤオロズ「妻は試練を『える。そなたの心の奥に眠る絆の力を示せ』

エイダ「絆の力、とは…？」

マリー「エイダ、始まるよ！」

面を被つた白い大狐…という表現が一番しつくりくるだろうか。
背中に矢倉を背負い、足甲とでも言うのだろうか、四本の足全てにも

面が備え付けられている。

ヤオロズ「光っている面のみを壊せ。それ以外に触れたら罰が待つておるぞ」

ナギサ「面白い。制限付きとは楽しませてくれるー！」

ヤオロズ「威勢のいいことだ。せいぜい妾を楽しませておくれ」

言い切ると同時に、ヤオロズが空に一声吠えた。

戦闘開始の合図らしい。

マリー「皆、全力で行つて良いからねー『フリー オーダー』！」

ナギサ「了解した！」

エミリア「援護は任せて！」

エイダ「私は属性の解析に入ります！」

各自が各自の動きを読んで連携する、それがフリー オーダー。慣れない内は隙が生まれたりしたが、今はそんなミスはしない。まずは近距離戦者が距離を詰める。

光ってる足…これが！

マリー「ナギサ！右前足！」

ナギサ「ああ！」

これだけ動いて外れない面だ。強度も高いに決まってる。面の目の部分、僅かな隙間に剣影を差し込み、捻る。ピシッ、と音を立てて面にひびが入る。

ナギサ「…マリー！回避だ！」

マリー「…? わかった!」

ナギサの警告を受け、すぐさま回避行動をとる。

標的の面に触られて黙つているような相手ではなかつたらしい。ヤオローズは一瞬姿勢を低くしたかと思つと、前方に向かつて突進した。

マリー「…………！」

軽く掠つただけで吹き飛ばされそうになる。
直撃していたら軽傷ではすまなかつただらつ。

ナギサ「はああああっ！…！」

突進の後の硬直を狙つたのだろう、ナギサが一気に距離を詰める。
と、その時。後ろから神獣を観察していたエイダから報告が入る。

エイダ「マスター！ 解析完了しました！ 神獣ヤオローズの属性は『炎』
です！」

マリー「ありがとう！ 作戦はそのままで！」

エイダの報告を受け、武器を無属性の剣影から持ち変える。
私の氷属性の武器は双魔剣と呼ばれる『デモンズディザスター』。
これならいける…

マリー「せー………… やあっ！」

低い姿勢から駆け出し、距離を詰める。

ナギサ「マリー行くぞ！」

マリー「その気で来たよ！」

軽口を叩きながら各自フォトンアーツを発動させる。ナギサは変わらずスピニングブレイク。

私は武器に合わせてアーツを切り替えていた。

『ブレードデストラクション』。刃を自身の周囲に回転させ、敵を連続で切り刻む大技だ。

怒濤の勢いで発動される技の前に、お面は砕け散つていった。

ヤオロズ「…お見事…」

と叫んだ神獣は、横向きに体を倒してきた。

エミリア「マリーそこ危ない！避けて！」

その声に反射して、背中の矢倉に潰されないように緊急回避をする。

マリー「セーフ！…あ！矢倉のお面が光ってる…」

ナギサ「好機だ！」

エイダ「私もいきます！」

エミリア「総攻撃い…！」

ナギサのスピニングブレイクにエミリアのライジングストライク。

私のブレードデストラクションとエイダの3連ディーガ。

決して仲間には攻撃を当てず、それでいて相手に蓄積されるダメージ。

各自の本気の総攻撃の前に、とつとつ面にヒビが入った。

ヤオロズ「やるの？…だがまだこれからじゃー！」

そういうて起き上がり空高く吠えたヤオロズの背中の矢倉に…人影。ナギサが、乗っていた。

ナギサ「わざわざ手の届かない矢倉に配置するなんて、この大事そ
うな

お面を破壊すると、どうなるのだろうな…？」

ヤオロズ「…お主いつの間に…！」

吹き荒れる青の光。ナギサのインフィニティブラストだ。

その直後、パリイン、と。

綺麗な音を立てて矢倉の面が散つていった。

その後。

神獣の体が青白い光に包まれて霧散した。

ヤオロズ「まさか矢倉の面が壊されるとはのう…天晴れじゃ！

妾の試練に打ち勝ちし者たちよ。そなたらに妾の力

『神威』を授けよう

ナギサ「これは…ハンドガンか？」

ヤオロズ「妾の魂は常にそなたらと共にある。この後も迷わず進め

」その言葉を最後に、会場を一陣の突風が包んだ。

立っているのも精一杯の風に、思わず目を瞑る。

…しばらくして風が収まつた後、会場に残された青白い光も消えていた。

練に
ハル「この歓声が聞こえるでしょうかーかくも鮮やかな手つきで試

打ち勝つたのは、チームリトルウイングスでした！！

エミリオ・ハラダ著

「あつちやー。先越されちまつたかあ。すつげーなあんた
ら」
ヒュー・ガ「ん?なんですかそのハンドガンは…『神砲ミコト』!?
神獣ヤオロズの力の宿つた伝説の武器じやないです
か!?!」

さすがはGRM社の代表取締役。

IJの武器に隠しては思へどIJNがあるみたい

「なんと、ここでビッグスクープです！優勝チームにはヤオロ
ズのハル

エミリア「あ、あたしなんもしてないけどね…」力の宿った武器が贈られていきました！

マリー「それをこうなら私もだよ……」

ナギサ「なんだ、もう少し間を持たせた方が良かつたか？」
カレン「な、なんなんだこの余裕さは…」

カレンさんが呆然とした目でナギサを見つめる。

エイダ「… そういうえば絆の力ってなんだつたんでしょう?」

マリー「あれじゃない? 総攻撃! とかフリー オーダーとか?」

ヒミコア「な、なんだかヤオログが哀れになつてきたね…」

ハル「こほん、… さて! 大注目のヤオログレースもこれで閉幕です!
大星靈祭会場からお送りしてきた特番もこれで終わりとなります!」

「(J)までリポートしてきたのはグラールチャンネル5、
ニュースキャスターの、ハルでした! またお会いしましょ

う!」

マリー「完全に締めにかかるよ!…?」

ナギサ「いいんじやないか? 別に」

エミリア「淡泊だねえナギサ…」

エイダ「まあ… お祭りですし最後はあつけないものですよ?」

ルミニア「… これが勝者の余裕つて奴ですか…」

イーサン「まあ、負けは負けだしな。仕方ねえか」

マリー「あ、そうだエイダ、この後… あれ?」

急に、エイダの姿が見えなくなつた。

小さいからとはいえ私がエイダを見つけられないわけがない。

… 目を凝らして探すと、ヒュー ガさんの後ろにその姿を確認できた。

ヒュー ガ「さてさて… そのハンドガンを詳しく調べたい」ところですが…

罰が当たつても嫌なのでやめておきましょうか

カレン「やつしておけ。なんなら30年後にまた参加すればいいじやないか」

ヒューガ「さすがの僕でも戦闘の最前線は隠居しますよ…」

カレン「はは、[冗談を言え。お前なら30年後でも…ん? 何だイーサン?]

カレンさんの注意がヒューガさんから離れた時を見計らつたかのようだ。

エイダがヒューガさんに接近した。

エイダ「G R M社代表取締役のヒューガ・ライト様でよろしいでしょうか?」

ヒューガ「はい、ヒューガは僕ですが…って何だ、エイダじゃないですか。」

「一体どうしたんですか、思まっちゃって」

エイダ「…記憶しておいて頂けたとは光榮です。内密なお話があるのですが」

ヒューガ「…表情から察するに、あまり良いお話ではなさそうですね?」

「…ではなんですし、場所を移しましょうか」

エイダ「お心遣いに感謝します。ではこちらへ」

そういった二人は、談笑しているふりをしながら森の中へと入つていった。

…エイダのあんなに真剣で、困惑した田は初めて見た。

マリー「エイダ…?」

誰ともしれず呴いた言葉は畠に消え。
気づいたら私は木陰に隠れながら一人の後を付けていた。

エイダ「走りましょー!」（後書き）

長い上にヤオロズ戦が想像以上に短くて笑えない…

ハルの突撃リポートをプレイしながら書いていたんですけどなんせヤ
オロズさんを瞬殺してしまいました…（。 。 ）

卷之三

何かありましたらご意見等くださいると泣いて喜びます^ ^ ;

9／14あまりに短いかな、と思つたので加筆修正しました(汗
よければ読んでいただけると嬉しいです^ ^

マー、「...ハイタ...?」(前略)

おまけに、こまつ戦闘が上手に描くできなっこ作者です

何故かシリアルになつやつな空氣。

それでまあべりべー。

マーー「…エイダ…？」

――大星靈祭会場の外れ・深い森の中

もつすでに森の中を結構分け行つてきた。

祭りの音楽は遠く、ささやき声でも会話でもきききしきな静寂。その中で、10メートルほど前を歩く2人は歩みを止めた。

ヒューガ「…さて、この辺で良いでしょうか?」

エイダ「はい…」足労いただきありがとうございました」

ヒューガ「いえいえお礼には及びませんよ…さて、そろそろ本題に入りましょうか。一体、話とは何ですか?」

エイダ「もうお氣づきかとは思いますが」

エイダの表情は暗く、とても入つていける空氣ではなかつた。

ヒューガ「ですがそれも推測に過ぎませんからね。やはり直に本当のことと聞くに限ります」

エイダ「お優しいように見えて厳しいのですね…ええ、話とは私たち…私とマスターの。生産プロジェクトについてです。掘り下げて言えば、なぜ私はマシナリーとして生産されたのか?どうして、私はキャストであつてはいけなかつたのですか?それを伺いたく思いまして」

マーー(エイダ…)

エイダが自分の立場をそんな風に思つていたなんて知らなかつた。

…いや、気づかない振りをしてきた。

エイダに甘えて。エイダがいることを当たり前だと思つて。この話を聞くことが、何かの罰のようと思えて仕方なかつた。

エイダ「お答えいただけないのですか？全てのキャストは貴方の社を通してのみ生産されるのに。そして私も貴方の社で

生産されたところに。なぜ？」

何故、の後はさつきの会話と合わせると容易に想像がつく。何故、私はキャストではないのか、だ。

ヒューガ「…いえ。聞かれようによつてはばぐらかして帰ろうと思つていたのですが。そこまで直球に聞かれてはもう

答えるしかないじゃないですか。いいでしょう、

私の

知る限り全てをお答えしましょう」

エイダ「お願いします」

エイダの目に希望と、失望が混ざる。

ヒューガ「少し長くなりますが…いえ、貴女は気にしませんね。

……貴女がキャストでない理由ですが。これに明確な

目的はありません。強いて言つならば、ですが…

これ

は残酷な結果となるでしょう。それでも聞きます

か？」

エイダ「ええ。続けてください」

ヒューガ「…いえ、まずは貴女の知識を伺いましょう。貴女は、貴女方についてどこまで知っていますか？」

ヒューガさんの目に明らかに暗い色が宿る。

エイダ「私とマスターの対生産まで。私がマスターの足りていない部分を埋め、私にできないことをマスターがすると、いう所

ト』を作ることで、私達の生産目的が、『完全に人のようなキャストを作ること』とまで。

そうだ。そこまでは思考の根幹にインプットされている。エイダが知りたいのは、多分、その先。

ヒューガ「ええ、そこまでは基礎知識として入っていたはずです。それではそこから先をお教えしましょう。…貴女方は、

されどは、本当はキャストとしてを作られることが目的とい

いないんです。本質はその先、『ヒートの手で完全に新た

なヒートを生み出す』ということ。ですから貴女

補助の関係は最初から一人の『ヒート』を作り出すための

ものなのです。そして各自に自我を持たれてしまつて、

別行動をされては困るということから片方がキ

ヤスト、

もつ上方をパートナーマシナリーとして生み出すことに

されました。：理解できますか？貴女がマシナリーワーク分

なのは、片割れたるマリーさんにキャストの椅子が回つていったからなんです。特別な意味はありません。

味はない貴女がエイダで、彼女がマリーであることに意

味はないヤスト』のです。ただし事実としては、彼女が『キ

だから貴女が『マシナリー』なんです。もし仮に貴女がキャストであつたなら、今はマリーさんがその体で貴女 のパートナーマシナリーをしているはずなのです。残酷なようですが、全ては運がなかつたと。それだけです「

…全身から血の気が引くのがわかる。

つまりは、私がキャストだからエイダがキャストになれなかつた？ 足に力が入らなくなる。

へなへな、と。音を立てる激しさすらなく。

私はその場に座り込んでしまつた。

立とうとしても立てない。視界がぼんやり滲んでくる。気がつくと私は、嗚咽すらあげずにただただ涙を流していた。

エイダ「…その計画は誰の推進で行われたのですか？」

ヒューガ「…恨んでも仕方がありませんよ。この計画を進めた博士は

SEED事変での世を去っていますから」

エイダ「…そうですか。最後に一つ、聞かせてください」「ヒューガ」「どうぞ」

考えるような間を置いて、エイダは静かに言った。

エイダ「その計画は続いていますか？」

返答は早かった。

ヒューガ「まさか。貴女方のように苦悶に思つペアがとても多くいましたから。博士の死後計画は凍結され、資料も全て

廃棄されました」

エイダ「ありがとうございます。それだけで充分です。…わざわざ私に

お時間を割いてくださったのに申し訳ありませんでした

した」

ヒューガ「いえ、私に謝られる資格はありませんよ。…では、そろ

そう

皆の所に戻ります」

エイダ「ありがとうございました」

ヒューガ「いいえ。…それでは」

ヒューガさんは私の側を通りすがら帰つていった。

エイダは、お辞儀をした姿勢のまま。

顔が見えないから、何を考えているのかわからないけれど。
…多分、私を恨むだろうな、ということだけは理解できた。
私がキャストでなければエイダはキャストになれたのに。
普通に喋り、笑い、私の世話なんてする事もなかつたのに。
…目からこぼれる涙を止める方法はわからない。
辛うじて顔を上げると。エイダはいつの間にかいなくなっていた。

マリー「…帰、りたく、ない、なあ…」

一言呟いただけで嗚咽が止まらなくなる。
隠れていた木に背を預け。
足を抱いて座り。

ただただ地面にこぼれる涙を眺めていたり。
…不意に、目の前にハンカチが差し出された。

マリー「…ひっく…だ、だれ…ですか…？」

まともに機能しない喉を、必死で震わせる。
顔を上げて差出人を見ようとすると、顔が上がらない。
だから仕方なく。
差し出されたハンカチを受け取ることもできないま
下を向いていた。

? ? ? 「…泣き顔は似合いませんよ、私は貴女の笑ってる顔が

一番好きですから…」マスター

マリー「…」

不意にかけられたいつも聞いている声、呼ばれた名前。
体中に電撃が走った。

マリー「エ、イダ……なん、で……」

エイダ「何で、とは……ほら、とりあえず涙拭いてください」

エイダがすとん、と田の前にしゃがみ。

私の顔をごしごしと拭き始めた。

マリー「…………ふはあっ！」

エイダ「さてマスター。何で、はこっちの台詞なんですが……

マスターの言つ句で、とは何ですか？」

不思議なことに、エイダの笑い顔を見ると。

感情が落ち着いて。

マリー「……なん、で……あの話、聞いたのに……まだ、私に。
……そんなに、優しくして、くれるの、かな、って

「……

言つてる途中から涙が溢れてきて。

最後の方は消え入るような声になつていた。

エイダ「はあ……マスター？ 私はキャストになりたかった訳じゃ
ないですからほら涙拭いてくださいって」「ごじごじ

え？

いやいやおかしい。

エイダはキャストになりたかったんじゃないの？

その私の心の声を見透かしたかのよう、彼女は続けた。

エイダ「いいえ、私は一度もマスターを差し置いてまでキャストに

よつて

なりたいなんて言つてませんよ。私はただ、今回の

特別な理由は無くとも、ずっとマスターと一緒にいたいと

思つただけですか？…マスターが私の立場になつては意味

かつた
かつた
がないんです。私は、ただマスターと対等にありた

だけ…本当に、ただそれだけなんです」

エイダの言葉はとても優しくて。

だからこそ嘘ではないと確信できて。

…勘違いでここまで泣いた自分が可笑しくて。

自然と、泣き笑いのような表情になつてしまつた。

マリー「ぐすり…エイダあー…」

エイダ「よしよし…」

この会社に入る前はよくこうして抱きついてたのに。
久しぶりに借りたエイダの胸は暖かくて。

エイダ「…それで、その…ものは相談なんですが…」
マリー「ん？…いよいよ、何でも言つてみて？」

もう涙は止まっていた。

エイダ「えと、その…今まで通り家事とかしますので、できるだけたくさん帰つてきてくれると嬉しいなあ…とか思つたり、

なんかしてみたり、ですね…」

珍しく私より高いところにあるエイダの顔を見て。
自然に口角の上がった顔で。

マリー「うん。」

考える前に返事は決まっていた。

エイダ「あ、ありがとうございます… も、もう… そろそろ私たちも
誰わんの方に帰らないと心配されますよきっとー。」

マリー「… もうちょっとこうしてたい…」

久しぶりにくつこいたからか離れたくなくて。
気づけば駄々をこねていた。

エイダ「… あ、後で家でまたこつしてあげますからー。」

マリー「… 絶対だからねー。」

たまには「れくらに許されるだろ?」と。

エイダ「ほらほら立つてくださいに行きますよー。」

マリー「うん。」

私達は来た方に向かつて歩きだした。

マニー「...ハイタ...?」(後藤) (脚本)

「...こやはー、設定作っておいたは良こんですが。
見事にだしきやこましたねえ...」

キャラの走るの止まつていつなつてしまつて...せこ、反省してます(泣)

「意見・」質問等あつましたりよしへおねがいします(ーー)

m

Hミリア「一人ともども行つたんだろう?」（前書き）

「んにちは、この十日に就職試験があつて燃え尽きてる作者です…
相変わらずの乱文長文ですみませんがお付き合いいただけると嬉しいですくゝ：」

それではどうぞ…

エミリア「一人ともども行つたんだろう?」

――大星靈祭会場

エミリア「ナギサ、一人がどこ行つたのか聞いてない?」

ナギサ「いや、私も聞いてないぞ? エミリアこそ、本当に表彰される段階になるまで彼女らがいなかつたことに気が付かなかつたのか?」

エミリア「それは面白い…けどさ、一人でどこかにいなくなるってどうしちゃつたんだろうね?」

ナギサ「さあ…まあ、ここで待つていれば帰つてくるか、

最悪連絡くらいはあるだろ? からここで待とう」

エミリア「そうだねえ…」

二人が地面に座ろうとしたその時。

すぐ近くの茂みの中から長身細身の男性が出てきた。

ナギサ「何奴! ……は?」

敵襲と思つたのか、ナギサが腰を落としてソードを構える。

ヒュー・ガ「いたた…さすがに木の枝が引っかかるのは痛いな…おや、エミリアさんにナギサさんではないですか。どうしたんです?」こんな時間まで会場に残つて

エミリア「…ヒュー・ガさん! ?」

茂みの中から木の葉まみれで出てきたのは、何とグラール太陽系屈指の大企業の社長だった。

ナギサ「…貴方こそそんなところで何をしていたんだ？」

ヒューガ「やだなあナギサさん。そんなに睨まないでください…いや、ちょっと人生…いやマシナリー生相談に

乗って

あげていたんですよ」

Hミコア「マシナリー…つてことはエイダ、ですか？」

ヒューガ「」名答…このことは内緒にしておいてあげてくださいね？」

ナギサ「わざわざ口止めとは…何か重要なことか？」

ヒューガ「ちょ、ちょっとナギサさん…とりあえず武器をしまってもらえますか…どうでしょうね、重要かどうか、

とは僕の

物差しで測ることではありませんから」

渋々、といった表情でナギサが構えを解き、武器を格納する。

Hミコア「…その口振りじゃ重要って言つてるようなもんじゃ…」

ヒューガ「いえ、僕からしたらそつとは限りませんが。…ですが、価値観といつものばヒトそれぞれといつことですよ」

ナギサ「Hミコア、つまづいていたことだ？」

Hミコア「ええっと…首突っ込むな、つてことよ」

ナギサ「向こうから言つてくるまで待て、か…必ずしも言つてくる
とは限らないんだがな…」

ヒューガ「それも含めて彼女達に委ねてほしいんですよ? 何せ彼女達
のこれからに関わる可能性すらある問題でした
からね…」

ナギサ「その問題の解決方法は?」

ヒューガ「ありません。…とても歯がゆいのですが

ナギサ「わかった。では待とう。貴方はついさっきまで一人とともに
いたんだろう? どこにいるか教えてもらえないだろ
うか?」

ヒューガ「いえ、僕はエイダさんとしか話しませんよ? …マリー
さん

があそこまで隠れるのが下手だとは思いません
でしたから、

そういうことでおいてください。位置は…
いえ、必要は

なさそうですね

ヒューガがそう言つた時、またも近くの茂みがガサガサと鳴つた。

ヒューガ「では脇役は消えるとしまじょ。 それでは、またどこか
で」

エリコア「え、ちょっと待つ…」

エリコアがそう言い終わるより前に。

茂みから見覚えのあるコンビが出てきて、

…そのままその場に倒れ込んだ。

マリー「や、やあつと出れたあ…」「ぜえぜえ

エイダ「ま、まさかマップが表示されないなんて…」はあはあ

H//コア「…まあ、いつか。…一人とも！心配したんだからね！？」
エイダ「す、すみません…」はあはあ

ナギサ「さつだ。席を外す時は一言云ふえろと教えてくれたのは他ならぬ

貴女じゃないか

マリー「」、「めんなさい…」「せえぜえ

H//コア「何してたのかは、聞かないであげる…から、
後で一食奢ること…」

マリー「は、はいっ！」

ナギサ「あ、私はデザートにエイダの作ったものが食べたいのだが」「
エイダ「わかりました、ご要望がありましたらそれを作ります！」

H//コア「じゃ、帰るうか…」つていっても今日は宿に、だけどね

？」

ハイタ「もういりきな時間ですか…」（前書き）

更新がこんなにも遅くなってしまいすいませんへへへ。
週末、ことに就職試験があつたりだと忙しくて（泣

久々の更新だとこの間に今回は物語をつなげる接続詞的な回です
で短めです（汗
いやでも続けて投稿するので堪忍してくださー（。 。 ）

それではじりぞー！

エイダ「もう」的な時間ですか……」

——午前2時、民宿『雅』

エイダ「お湯頂きました……って、マスターはもう夢の中ですか」「ミリア「あ、お帰りエイダ……うん、布団も敷かないで寝るもんだからあたしとナギサで布団出して運んじゃった」

エイダ「すいません、ありがとうございました」「ナギサ「何、礼を言われるほどのことでもないぞ」

エミリア「ナギサかっこいい、その台詞言つてみたいなあ」「ナギサ「…誉めても何も出ないぞ?」

わーわーきやいきやい、年相応にはしゃぐ二人。今笑っているこの二人には共通する点が一つある。それは年齢にそぐわない、悲しい過去を持つているところだ。二人とも、大人たちに道具のように扱われていたといふ。この二人なら……あるいは。

マスターの、『マリー』の過去も受け入れてくれるかも知れない。

エイダ「……お話中すいません、お一人に話しておきたいことが

言ってしまった、もづきしかな」。

もしかしたら予想は外れるかもしね。けれど。

エミリア「モーナギサつたら…つて、ん？」

ナギサ「エイダが話に割り込んで来てまで伝えたいことか。

…わかった、聞く」

エミリア「…まじめな話っぽいね、うん、あたしも聞くよ」

エイダ「お二人ともありがとう」やります。お二人は、先程の
レース中にマスターの過去をマスター自身に聞きた
い、と

おっしゃってましたね？」

エミリア「ああ、言つたねえそんなこと…もしかして、結構
マズかった？」

エイダ「いえ…いや、或いはそうかもしません。私はマスターと
ずっと一緒に過ごしてきました。ですから申し上げ
ます。

…彼女もまた、貴女方と同じく辛い過去を持つてい
ますから
その時は急かさず、彼女が話し出すのを待つていて
欲しい
のです。この通り、お願いたします

そう言って私は頭を下げる。

…彼女の辛い思い出は同時にまた、私の辛い思い出でもあるから。

HIIコア「ちよちよちよ、顔上げてよHIIダ!」

ナギサ「やうだ、私達はそこまでマリーのことを解つていな
わけではないぞ?」

HIIダ「… ありがとひ、『やれこめす』

ナギサ「約束は守る。だから今日はもう休むといい。HIIダ、たつて
疲れているだらう?」

HIIコア「わ、もつこんな時間…あたしも寝るからさ、HIIダ?
安心してよ。あたしだつて約束守るから」

二人は私を気遣ってくれているのだろうか?

… 気遣われるほど酷い表情をしていたのだろうか。

ともあれ、この言葉には甘えておこう。

HIIダ「… すいません、お先に休ませていただきます。

お休みなさいませ」

そう言い、手近にあつた布団にもそもそと潜り込む。

… 私の意識はそこでフェードアウトした。

H//コア「あたしも、寝るかな～…ナギサは起きてるの？」

ナギサ「ああ、ちょっと月を見ようかと。今日は外が明るいから

満月かと思ってな

H//コア「そつか。んじやま、お休み～」

ナギサ「ああ、お休みH//リア。いい夢を」

――民宿『雅』、前庭

ナギサ「なんだ、まだ満月じゃなかつたか…でも9分月位か？」

それにしてもエイダは気付いているだろうか。いや、
気付いてないだろうな…エイダ自身がマリーのことを
マスターではなく『彼女』と呼んでいたことなんて。
何の氣無しに言つたのだろうな…それにしてもまさか
エイダが私たち相手にここまで緊張して話すとは。
これは生半可な気持ちで聞いたら痛い目を見そうだ…
…これは独り言なのだろうな、端から見たら怪しい…
ワイナールさえいれば独り言ではなかつたのに奴め…
…うう、さすがに冷えるな。部屋に戻つて布団にでも
くねまつて暖まるとしてみる

マリー「ふああ…おはよっ…」

エイダ「おはよひざひこますマスター。朝食の準備ができるよう

うです

ので、お召し上がりになつてください

ナギサ「一番の寝坊助はマリーだつたか。私はでつきH//ニアかと思つていたのだが」

H//ニア「いやいやナギサあんたあたしより後に起きたでしょっ！」

ナギサ「細かいことはいいんだ。それよりほら、最後の一人が起きたの

だから朝ご飯を頂こうぢゃないか

マリー「あれ、もしかして待たせてた？…ごめんね？」

エイダ「いえ、朝食を準備したのは私ではなく宿の方ですし問題ありません。

それよりほら、ご飯が冷めぢゃいますよ？」

マリー「あはい今行きます…お待たせつと」

H//ニア「じゃ、いい？いつただつきまーす！」

ナギサ「頂きます。…うん、美味しいな」

エイダ「ええ、栄養もとれて塩分控えめ。和食ですか…私もまだまだですね、

練習し直します」

マリー「…朝からお米は重いのって私だけ…？」

ナギサ「？…ああ、貴女は朝に弱いのか」

H//コア「いや」と食べなよマニー？」これ食べたら出発だからね？」

マリー「あ、そつか今田帰るんだつけ…うん、食べる食べますから
エイダさん

そんなことちを凝視しないでください…」

エイダ「…」の量がこなるなら二つもの朝食をもう少し増やしても
…」

マリー「ちよ、それは勘弁してください…」

ナギサ「…」いやまでした。ほり、早く食べないと

シヤトルが出てしまつぞ…」

マリー「が、がんばります…」

マー、「……覽みて画面に映るのもなにか？」（前書き）

「……が、さーの過去話つが入ります、正直どうじていつた…」
さてさて作者も制御できていないこのキャラたち、終着点はあるんで
すかねえ…？

それでほんびん…。

マリー「……質こんでいるのもやもなに…」

――クラッシュ、マリーのマイルーム

マリー「帰ってきたねえ……懐かしの我が家に…」

エイダ「そんなこと言つて正味3日も離れてないじゃないですか…」

H//コア「あー、疲れたー！」

ナギサ「全くだ。だが、楽しかったな」

マリー「ん？……あれ？……お一方、どうして私の部屋にいるんでしょう…？」

エイダ「私はもう慣れました」

H//コア「だつてあれじやん、あれあれ」

ナギサ「そづ、あれだ。……H//コア、あれって可だ？」

マリー「漫才かつ！」

H//コア「おお、素早いシシコ//あつがとうマリー…

……いやほり、忘れないにうちにはうて聞いていたいと思つて？」

エイダ「……ああ、わしごう」とですか。私はお茶の準備をしてきました

ナギサ「ありがとうエイダ。……貴女のこころを知るまでの経緯を知ります」

ナギサ「ありがとうエイダ。……貴女のこころを知るまでの経緯を知りたい

と思つてな。正直なぜ貴女ほどの腕の者がガーディ

アンズでも

なく同盟軍でもなくこの小さな民間軍事会社にいる

んだ?」

マリー「それは、海底レリクスでクラウチさんに誘われて…」

エミリア「ううん、そこよりもっと前。あの調査にガーディアンズは不参加だったし何よりあなたはフリーだった。

…あたし達の

過去をあんたが知ってるようにな、私達にもあん

たの過去を

教えて欲しいの。勿論、言いたくなかったら言わなくていい

んだけどさ

ナギサ「そうこう」となんだ。…まあ、正直興味本位だから受け流して

くれて全くかまわないのだが

…私が返答に困っていると、ハイダがお茶を持ってきた。

それもきちんと4人分。

これは…うん。

マリー「…一人なら、話す、よ。けど…他の人には…言わないで?」

勿論だ、と異口同音に一人が応える。
うん、彼女たちなら。

マリー「私ね?」――

マニー「…聞いて面白いものやもないよ?」(後書き)

はい、次から回想になるんで文体が少し変わりますがご容赦ください。

今回の方が前回より短いという大誤算。連投しますすいません。(殴

ヒトか、キカイか（前書き）

先述の通り、文体が変わりますくく：
じつしたほうがいい、じつしたら読みやすいんじゃないか、等あり
ましたら教えてくださいととても嬉しいです小躍りして喜びます（笑
それではどうぞ！

ヒトか、キカイか

「 私ね、よく皆から『キャストらしくない』って言われるじゃない？ それもそのはず、私は…『キャスト』として作られてないんだもん。 そんな顔しないで？ そうそう、いつも通りでいて。お願ひだから。

「 あ、驚いた？ そうでもない、か。うん、大丈夫だよエイダ、だから あ、驚いた？ そうでもない、か。うん、大丈夫だよエイダ、だから そんな顔しないで？ そうそう、いつも通りでいて。お願ひだから。 ああ、ごめん。それで、ええとうん。私が作られた理由だったつけ。 私ね、『ヒト』に限りなく近い『キャスト』を作る計画の産物なの。

「 私のイニシャル、全部『M』なの覚えてる？ うん、そう。 『マリー、M、ミスラ』… 真ん中のMはね、製造番号なの。 13番 田のM。

でもね、私は運が良い方なの。どうしてかつて？ 他の姉たちは、皆が どこかに欠陥を持つてて。起動して1週間で廃棄されたんだって。

「 1週間だよ？ 私は、奇跡の1号目。研究所では『プロトタイプの M』

つて呼ばれてたの。おかしいよね、13番目なのに1番目みたいに。

とにかく、わたしは欠陥がなかつたんだって。この『欠陥』つて一体 何だと思つ？ おかしいよね、『欠陥がないこと』なんだってさ。

人間と機械の境目つて物事を間違えるがどうかなんだって。…私は、 1週間のうちに間違いを起こしたから廃棄されないで済んだの。

間違いつて何かって？ 簡単、世話をしろつて言わわれた猫のおトイレ

を掃除するの忘れてただけなの。それだけなのに、私は生かされた。

…ちゃんと生きてたのかって聞かれると、よくわかんない。研究所は私にとつて檻だつたから。行動は制限されて。言動は全て録音。

…でも私が頑張れたのは、エイダが居たからなの。エイダは私と同時に起動されて、私とエイダのプログラムは基本的に同じなの。全部性格、思考傾向、好み、適正。全部一緒だつたんだ。…あ、今性格がエイダみたいだつたつて嘘だ、つて思つたでしょ？でも本当なの。

エイダみたいに喋つて、エイダみたいに悩んでたの。…本当だつて。最初はぎこちなく言葉を交わすくらいだつたけど、…何だろうね。

いつの間にか、私はずっとエイダと一緒に居るようになつてたの。ずっと、つてどれくらい？かあ…まあ、今の生活ならこの部屋にいる時くらいじゃないかな？まあとにかくずっと一緒に…検査以外は。

検査つて？かあ…うーん、脳波？を測つたり？よくわかんないんだ、何をしているのかは教えてくれなかつたから。でもとりあえず、私の体中に電極が付いてたね。うん。

そんな検査が週に一回あつて。それ以外は外出も許可されないで。飼つてた猫は取り上げられちゃつた。…その晩は食べたことないお肉が食事として出されたけど。

食事？食事は基本粗食だつたね。えーと、あれ、うーん…そう麦！-麦と、あとはお茶と最低限の栄養をとるためにおかずかな。

だから食事を沢山食べられるのが今考えるとすりぐ齧沢なの。

…エイダの料理、もつと味わって食べるね？いつもありがと。

痛い痛い！照れ隠しだからって叩くのは痛いですエイダさん！

…と、とにかく粗食が基本だったの。贅沢は検査の後の飴かなあ…

…とまあ、この部屋くらいの大きさの部屋で、壁が一面鏡張りでね。

…ああ、そうかあれはマジックミラーだったのかな。観察用の、ね。

まあ、服も布切れ一枚を一応ワンピース型に縫いました、くらいで。

…いやあ、そんな生活を一月くらいしたある日ね？いきなりだよ？

いきなり部屋から出るって言われて、部屋から出たら何か質素だけどちゃんとした服に着替えさせられて、言われるままに車に乗り込んだわけですよ。かなり頑丈な…うん、同盟軍の輸送車みたいな？

…あの、先に言つとくけど売春とかそういうのじゃないからね？

…エミリア、もう少し心を綺麗に持とうよ…顔真っ赤だよ？あはは

まあ、そのまま輸送されまして。そこでエイダと一緒に引き離されて。後で聞いたらエイダはグラール教団総本山に連れてかれたんだって。

ここに戦闘スタイルが分かれたの。前衛と、後衛。予想は付いてるだろうけど、私は同盟軍に連れてかれたの。バルムの中にあるしね。

それでそこで…うーん…半年くらい？1年？あ、3年…私軍にそんなにいたんだ…うん、3年間みっちり戦闘をたたき込まれてね。んー、

でも主に射撃だったなあ。同盟軍だし。ちなみに私今でもツインハンド

は得意なんだよ？…あ、知つてましたかそうですか…

その間に色々あつてね。…んー、一つ例を挙げるなら浄化かなあ…

あ、私ＳＥＥＤ事変の初期は同盟軍にいたんだ。言つてなかつたつけ？

あ、はい言つてませんでしたすみません…で、でね、ラフオン草原
つて
解る？セツセツアーフ草原の支配者で行くところ。あれこの浄化を担
当して

隊の先行部隊に配属されてね。…うん、原生生物を殺し回ったの。

視界に入る全てを。ＳＥＥＤ汚染？確認してたら原生生物と一緒に

後続部隊

に燃やされちゃつて。…むしろ溶けるかな、うん。

あとは暴徒鎮圧かな。結局、鎮圧には成功。最悪の結果で、だけど
ね。

…解つてるくせに。暴徒を射殺したの。この手で。うん、長距離狙
撃？

スコープ越しに見た光景、今でも思い出すよ。真っ直ぐな火線、気
配でも
察したのかこっちを向く標的。右目に弾が到達して、後頭部から飛
び出る
血と、脳漿。

その時かな、自分に疑問を持ったの。私、何でヒトを殺してるんだ
ろ？…
つて。何で殺さなきゃいけなかつたのか？つて。

そこからかな、本当の意味での自我が生まれたのは。遅いよね、でもさう

なの。それしか知らないの。初めて自分で考えたことの記憶は。

それからはもう毎日がイヤだったの。殺しはする、でも自分は生きる。

…それがイヤで。でもSED事変の真っ最中だったから辞められなくて。

…だから私はガーディアンズからオファーが来たことは暁光だと思つた。

うん、暁光だ、乗るしかない、って思った。まあ、乗ったんだけどね？

…「」でちょっとお茶でも飲んで落ち着こつか。
ほらH.I.D謹製、お茶菓子もあるよ。てなわけで。

ちよつと一休み、一休み。

ヒトか、キカイか（後書き）

おもつ！

くらつ！

ぐるつ！

はい、3拍子揃つちゃいましたあ…
グダグダだけど許してくださいvv；

ヒトか、キカイか（2）（前書き）

はい、どうも今晚は毎度毎度夜遅くにしか更新しない作者です
んー、内情書くのって難しいですねえ…

手探りしながら頑張りますんで生ぬる見守つてやってください〜
^;

それでは、どうぞ〜

ヒトか、キカイか（2）

…ふう。あ、やつぱり続きが聞きたい感じですか…はい。
解りましたよひかりさんと話しますよひ…

えーと、じこまで話したんだっけ？あ、ガーディアンズから
オファーが来たところまでか。じゃあ、その続きをからね。

当時、『今日の時』の作戦がまだ計画段階だった頃かな。オファーが
来たのは。

正直その頃にはもう同盟軍にいたくなくてねえ…

だつてや、軍つて何のためにあるんだと思つ？…はい、ナギサさん。
うん、そうだね。敵の攻撃から自分と自分の仲間達を守るためにだね。
でもその頃の同盟軍はまだキャスト至上主義が根強くて…酷かつ
たんだ。

私が居た部隊の隊長の思想が特に顕著だったの。どれくらいかつて？
んー…火事になつた建物があつたとして。中のキャストを全員救出
したら、
延焼を防ぐために建物は破壊しきって、ヒトは必ずしも良かつて。
実際の命令ね。

勿論表口にキャストを全員避難させて、私は中を確認するつて名田
で残つて
裏口からヒトを避難させたりして。

…いやあ、助けたヒトの田つきが忘れられないなあ…

あ、ううん。良い意味じゃなくてね。

何で優劣を付けるんだ、それで人助けのつもりか、キャストのくせに。

そんな目で見られて。…や、あれは堪えたなあ…

ああ、話がそれちゃったね。ごめんごめん。

ええと、そうだオファーが来て、からだつたね。

オファーが来て、私はそれを喜んで受け入れたの。…私は、ね。
勿論そんなの研究員達が黙つてなくて。交渉は難航。

その間私は隊の中で孤立しながら訓練や任務をこなしててね。
…汚れ仕事は当てつけみたいに回されたなあ…ん、大丈夫だよエイダ。ありがと。

交渉が終わるまで3週間。その間に殺したヒトの数は両手の指じや
数え切れない。

…忘れられる訳ないじゃん、全部覚えてる。

暴徒鎮圧任務3回、立てこもり犯射殺任務4回、強奪犯射殺任務2
回。

極めつけは…死刑執行12回。全射殺。

私がヒトともキャストともつかない思考回路をしてるっていうのを
隊長が知ったからなのかは私は知らないけど。

3週間でパルムを4周くらいしたかな…移動中は貴重な睡眠時間
だった。

でまあ、3週間したらいきなり知らない研究者が来てね。こう言っ

たの。

『計画は廃止、無期限の凍結となつた。君は今から私の権限で自由にする。』

ここに残るも他へ行くのも自由だ。縛り付けてすまなかつた。』

急に無責任だよね。仕方ないんだけど。：私達の研究の責任者がね？
S E E D 事変で死んじゃつたんだつて。これは最近知つたんだけど
ね。

今思えばあれは当時のG R M社の武器開発担当顧問みたいなヒトだ
つたのかな。

：引率者が死亡したプロジェクトの中身を整理しようとしたんだろう
うね。

それであま、荒んだ心でガーディアンズ入りするわけですよ。うん。
ここからが長くてね？色々あつたなあ…

まず、私の教官になつたヒトが誰か解る？…絶対知つてる。ナギサ
は…多分？

正解は、現ガーディアンズ総裁のライアさんでしたー。驚い…てる
ね。

そう、彼女がまたスバルタでね？よくひっぱたかれたよ。スピアで。
：でもその当時の私はエイダみたいな意地つ張りだったからさあ…
地味に痛いんでヒールで足踏むの止めてくださいエイダさん…

いたた…まあ、殆ど喋らなかつたね。任務中も。

ただ、マイルームではぎこちなく喋つてたよ？エイダと。

…ああ、エイダがそこにいる理由、かあ…

うーん、まあ簡単にいえば教団からひっこぬいた、みたいな？

マイルーム支給時にマシナリーを選べるのだけど、私はカタログか
いらじゅ

なくてエイダが欲しこりで言つたの。うん。無意識に。

そしたらルウが私の身辺調査してくれて、『エイダ』に該当する子を探して
きてくれてね。いやあ、エイダと再会したとき思わずボロボロ泣い
ちゃつてさ。

エイダはエイダでおろおろしだすし。で、落ち着いたら私が、私が
がだよ？

お見苦しことこひを…とか言つちやつて。わ、笑わないでよエイダ
あ…

こほん。とまあそれで無事ガーディアンズに入隊して訓練受けてで
すね。

私にもパートナーが付いたの。ウサギさんみたいな。

誰かつて？…ウサギじゃ解らぬいかなあ…ヴィヴィアンだよ。由い
旅人さん。

えーって…そんなに驚かなくとも…いや、なぜ妙に納得してるんで
すか

ナギサさん？…え？類は友を呼ぶ？…ああ、なるほど。

でまあ何だかトラブル体质なよつた私のことだからトラブルに巻き
込まれるよね…

ほら、何年か前にヒューマン原理主義者の起こした騒動あつたじや
ん？うん。

そりそりとミナスの。あれに見事巻き込まれてね…

ダークファルス倒したり…ダルク・ファキス倒したり…うん、倒してばかり。

ライアさんが近距離専門だったから、私もハンターに変えて。

くやしながらも同盟軍で体の動かし方は覚えてたから。まあ楽だつたかな。

：それに、剣の方が奪つた命の重さを噛みしめられるからね。手応えあるし。

大変だったのはヴィヴィアンと戦つたときだったかなあ…
初めて殺さないように戦つたから、ね。

：ヴィヴィアンと戦つたりナギサと戦つたり何？私は身内と戦う運命なの？

ああ、そんな自分を責めるような顔しないでナギサ…

んで、まあ色々あつてヴィヴィアンが独り立ちして。私も…と思つた矢先に
連れ戻されて。その辺りは勘弁してください…

：ん、何エミリアどうしたの？

お手洗い…はいはい待つてたげるから行つてらっしゃい。

大丈夫、その間はお話進めないから。
だから安心して、行つてらっしゃい。

ヒトか、キカイか（2）（後書き）

書いてる途中に寝落ちとほこれ如何に…

できれば連日投稿したいと思つてるんですけどいややたいへんですね

（^__^;）

それではまた次回！

ヒトか、キカイか（3）（前書き）

書き上げようとするといつも邪魔に入るAngelicaです^^(

- 1 -

いやはー、いきなりフリーズしたりしまして…

それでなぜハルノ！

...アニマス...

卷之三

す（泣

ヒトか、キカイか（3）

あ、お帰りなさいエミリア。：大丈夫だよ、話は続けてないから。
ええと、ヴィヴィアンと別れたところからだけ…

ヴィヴィアンと別れた私は、ライアさんと一緒に任務に当たる事が多くなつたの。彼女は教官兼パートナーでね、うーん…

最初の頃の私とエミリアの関係って言えば分かりやすいかな？
まあ、前衛一人で突撃部隊みたいな感じだつたんだけど。

その頃は私、今みたいな性格じゃなくてね？いや本当に！
私はひねくれてて、それです』へ…愚か、だつた。

『私は被献体として生み出されてきたにすぎない』
『私には物事を選ぶ自由が与えられていない』
『私にはただモノを壊す力しか与えられていない』
『私は周りに流されて生きているにすぎない』
『私には…私が生きている意味が分からぬ』

…うん、本当に。世界で私を理解してくれるヒトはいなくて、
だから私は世界で独りぼっちなんだ、って馬鹿みたいな事。
本気で考えてたんだよ？…あはは、笑っちゃつよね。

…うん。笑わないで聞いてくれてありがと。…本当に。

そんな私の考えを変えたのが、ある一つの事件だったの。

『ガーディアンズコロニー落下事件』。

コロニー中枢に、同盟軍の戦艦が突っ込んできたの。

…正確には、突っ込まれたの。コントロールを乗っ取られて。

私たちはその時パルムにいたんだけど、コロニーに対する制御権を持つてるルウのホスト機をコロニーの中に連れていったの。

状況は限りなく厳しくなつてきていた。

動力のAフォトンリアクターの損失。…失われたコントロール。

生き延びる方法は居住区画での脱出とコロニーの放棄。
居住区画に全員を避難させて、避難の準備は進んでた。

私たちの家だつたガーディアンズコロニーは、そのままだとパルムに落下するコースに入つてたの。…住民全員と一緒に。

…その状況の意味を本当に理解して、区画の切り離し作業を行つた、その一人の犠牲者が私を変えたの。

…名前を、オーベル・ダルガン。

ガーディアンズの前総裁で、ライアさんの養父だつたヒト。

コロニーは、電気回路に仕掛けをされてて。制御が居住区画から遠隔操作出来なかつたの。…彼は、独りで。コロニー側から。

制御権の解放は、早すぎても遅すぎてもいけなかつた。

…解放したら、脱出に間に合わないことを彼は承知していた。

：彼が、『ローラー』と心中するつもりだったことは、一目瞭然だった。
もちろん義娘のライアさんはパニックを起こして。…私は。

私は。…何も出来なかつた。声をかけることさえ。

区画を切り離す時に点いたブースターの重低音が、空しく響いた。
私は落ちゆく『ローラー』の中にいるダルガン総裁と田の前にいる
ライアさんの通信を。…ただただ、聞いていることしかできなくなつ
て。

…落ち着く間もなく後処理が舞い込んできて、感傷に浸る間も無か
つた。

そりやそうだよね、『ローラー』一つ落とされて。

…落下点でも死傷者がでたつて、聞いた。

私は、仕事を続けることで無力感から逃げてたの。

でも。仮にもキャストが本気で時間を忘れるほど働いたから。
仕事は、すぐになくなってしまったの。

襲いかかつてくる無力感。

同時に、組織の拠り所を亡くした喪失感。

…彼は、とても立派な。総裁、だつた。

…それから、色々あつて、ライアさんが。総裁になつて。

私は、戦闘任務ばかり回してもうつて。…傷つけて、傷つけられ
て。

とにかく胸にあいた穴を埋めたくて。朝から晩まで1日中任務受け

てた。

：エイダ、覚えてるかなあ。そんな生活を1週間くらい続けてたら、
たまたま帰つてベッドに座つてるときにエイダに叱られたの。
『無理な戦闘ばかりして死んじやつたらどうするんですか！』って。

：バカで頑固だった私はそれに対し、下を向いてこう叫んだ。
『壊すしかできないこの私なんて死んだ方がいいんだよ！…』

：あの時のエイダの本気のビンタ、痛かったなあ
それで、本気で泣きそうな顔してこう言われたの。

『何かを壊してまでしてヒトを守つてる貴方がいなくなつたら、
貴方に今まで守られてきたヒトはどうなるの…！…

貴方が今まで壊してきたそれらはどうなるの…！…って。

：私、その時に本当に『生まれた』んだと思う。
いや、何を言いたいのかって私も解らないんだけど。

私を否定しないで見ていてくれるヒトがこんな所にいたんだ、
つて。…そしたら私、これまでにないくつてくらい涙が出てきて。

嬉しくて。自分がしてきたことに意味はあつたんだつて。
救われたような氣さえして。

氣付いたら、エイダにすがるようにしがみついて泣いてた。
いつの間にか、泣きつかれて寝ちゃつてたけど。

：次の日、頭を撫でられる感覚で起きたらね？
エイダに、膝枕されてた。

それから、こう言われたの。

『おはよ／＼ざいますマスター。よく眠れましたか？』

あの日が初めてマスターって呼ばれた日。…覚えてるよ？
そして支えてくれるヒトの存在に気付いた私は、今みたいに。
笑って、はしゃいで、たまに泣いて。…結構泣く比率高めかな？

『私はきっと誰かのためにになるために作られた』

『私にはこんなにも選択肢が開かれていて』

『私には壊すしかできなくても、それで何かを守ることが出来て』

『流されそうな私には、流されないための仲間がいて』

『私は、仲間達と彼らの生きるこの世界を守るために作られた！』

偶然会つたライアさんに驚かれちゃつて。

『あんた…変わったねえ…』なんて言われちゃつて。

それからはもうあんまり語ることは…ない、かな？

あの戦いはガーディアンズに行けば記録があるしなあ…

あ、ガーディアンズを抜けたときのことがあつたか…

…聞きたい？

…えへへ、そんな大したことでもないんだけど。

…ちょっと話すきついってのど乾いたかな。

エイダ、紅茶おかりお願いして良い？…ありがとっ。

ふう。美味しいねえ…ちょっと休憩して良い?

あはは、焦らしちゃってごめんね?

大丈夫、ちゃんと話すから。

…そうだねこの1杯を飲みきるまで休憩で。

じゃ、一回のんびりしよ?

ヒトか、キカイか（3）（後書き）

…や、どうでしたでしょうか？（汗
出来れば連続投稿したいなあ、って思つてますが…
出来るか解りません（・_・）

感想・ご指摘等ありましたらよろしくお願いします！
それではまた♪（――）♪

ヒトか、キカイか（4）（前書き）

一日マニーさんの過去語りで終わる… と想こまく ^ ^ ;

ぐだつてなこますがぢいつかおつかあい願います！

それでまじりべー。

ヒトか、キカイか（4）

ふう、やつぱり美味しいなあ…

何かコツとかあるの？…ジャンピング？へえ…

…あ、飲み終わっちゃった。さて、休憩終わり…と。
ここからはもうあんまり話すことが…あ、空白期間か。

まあそれまでの事件は開示されてるからそっちでお願い。
…色々ありすぎて語つてたら明日になっちゃう。

ええと、それじゃ私がガーディアンズを辞めたきっかけね。
…つい、すついじへ下らないよ？それでも…良い？

…はい。わかりました白状します。まあ色々あつたんだけど、
直接辞めるきっかけになったのはね？

…制服の着用義務が、できちゃったことなの。
もーー笑わないでーー！だって仕方ないじやん！

ルウみたいなパーツなら見た目好きだったのに普通の制服
渡されちゃつたんだもん！おしゃれしたいじやん！

…いえすいません制服をけなしたいんじゃないです…本当に。
でもね？でもだよ？キャストでもルウだけ特別つて…？

制服試用期間に着けてみたらエイダに爆笑されるし…
お腹抱えて笑われたのは後にも先にもあれだけだよ…

マイルームも引き上げなきやだつたし、キャストだつたから
パルムが条件的には一番良かつたし？

5年契約だったかで部屋を借りて… 3年くらい住んだかな?

ん? なんで3年だつたのかつて?

それまでようす屋みたいなことしてて、そこそこ儲かってた。家計のやりくりがエイダ担当だったって言うのもあってね。

やー、何でか依頼のほとんどが恨み事の調停だつたり？

あ、勿論公共図書館じやなくて個人図書館のね？
や、今思えば紙媒体つてまだあつたんだねえ

忙しいなりに楽しかつたなあ

小さな部屋だし、壁は薄かつたけど帰ると安心したの。

エイダ、何でだと思つ? ん? 耳打ち? はいはい。

すみません照れ隠しでも頬をツネるのはいたたたた！？

はあ……いひやい　はい、すいません

ええと、そんな生活したら。割のいい仕事が入ってきて。

ええ、そうです海底リクスの調査です。それで調査に

挑もつとしたんだけど、さすがに武器は売り払つちゃつて。

… G R M 本社にセイバーと、当時新製品つて売つ出されてた割に安価だつたシールドだけ買いに行つてね。

やー、購入するときに武器所持用のライセンス見せるじゃん？

受付のヒトに「」のランクで「」の武器…って顔で見られて…いや、恥ずかしかつたなあ…

貯金も豊かだつて言える程じゃなかつたし。仕方なかつたのでまあ、レリクスに行つて。それからは知つてるとおり。

まあ、5年契約の部屋を3年で解約だから違約金で貯金が…ね。お金はすっからかんだし、武器は初期武器だし。

やー、苦労したなあ…あはは、今となつちや良い思い出よ。いや、入社断らうとしたら100万メセタ請求されそつになつた時はさすがに焦りましたけどね…

んー、こんなものかなあ…聞きたいことは何かある？
はい、エミリアさん…恋人、ねえ…

変人なら身の回りに「」ぱいいたけど恋人はいなかつたなあ…他には？…はい、ナギサさん…ソードは買わなかつたのか？

うん、貯金あんまり崩したくなくてね…報酬に対して出費が大きくなっちゃ意味ないしれ。…他には？

ないみたいかな？…うん、これで私の話は終わり。

「静聴ありがとうございましたー…ふああ、喋りすぎちゃつと

疲れちゃったかな。

…仮眠とっても良いでしょうか？…ほんと？ありがとうございます！
じゃあ、私たちと寝るからさ、まあ3人で喋ってくださいな。
…ヤバい、本格的に眠くなってきた…
うん、じゃ、おやすみなさい…

ヒトか、キカイか（4）（後書き）

…これでマコーさんの過去編終わりになりますくわ
や、最終回は明るく終われ…ましたかね？

この小説自体はまだまだ続きますので「安心（？）ください」！

ご意見、ご感想等お待ちしています
それではまたm（— —）m

Hイダ「...私は、」（前書き）

わでこねからじいじょり、やつぱりプロットとかつて大事なんだな
あ、と

作家の方々の偉大さをひしひしと感じているAngelicaです
(- - - -)

まあ私は彼女たちの走り出すままにキーボードを叩くだけなんです
が(≪
さてさて多くを語るのは好まないのでどうぞおつき合ごトセヨ(≫
- -) m
それではどうぞ！

エイダ「…私は、」

――マリーのマイルーム

彼女は、隣の部屋のベッドで（隣と言つても特別敷居があるわけでもないのだけれど）、安らかに寝息をたてている。

この眠りの深さなら明日まで寝通しか、夕飯もとつてないのに。
…なら朝にしつかり食べてもらおう、と踏ん切りをつけ。

…私は見知った一人の方に向き直る。

一つの質問と、多少の覚悟とともに。

エイダ「…お一人に、少しだけ相談したいことがあるのですが」

言つてしまつた。もう、後には戻れない…いや、戻らない。

エミリア「ほえ？何を、今更改まつちやつて」

ナギサ「…今晚の献立、などという話題ではなさそうだ。

エイダ、私たちで力になれるなら何でも言つてみて
欲しい」

エイダ「ありがとうございます。…唐突で申し訳ないのですけれど」

一瞬、心が逃げに走る。

エミリア「気にしないってば、ほらほら言つていらん？」

ナギサ「そうだ。私は口が軽くはないと自負しているぞ？」

ああ、きっと彼女は。

こんな何気ないサポートに助けられてきたのだろう、と感慨深くな
る。

エイダ「…はい。逃げません。相談…とは言いますが、意見をお伺い
したくて」

彼女たちは言葉を発しない。

私が続けるのを待ってくれているのだろう。…言外の言葉に甘える。
エイダ「先ほどのマスターの話にもありましたように、私とマスター
の一

ですから、
中身…根幹に根ざすプログラムは同等の物です。…

私はキャストの身体に入つていればキャストであつ
たと、そう

先日知りました。…『心』はヒトのそれであるのこ
私のこの

『身体』は機械の区分にされるものです。

そこでお一人にお伺いしたいのです。…私は、「

ヒトですか、キカイですか。

最後の言葉は声になつていなかつたかも知れない。
緊張で喉が焼けるようで、胸が張り裂けそうで、他に感じる余裕が
ない。

言い捨てて……そう、言い捨てて。

やつとの思いで言葉を発して心が折れてしまつたのか？わからない。

ともかく、私は顔を上げる」とさえ出来なくなつてしまつていた。
…不意に、頭を小突かれる。小突く、ところには些か強すざるタツ
チで。

エイダ「いたつ…」

反射で頭を押さえて顔を上げると、エミリアが握り拳を作っていた。
エミリア「…よーし解つた。エイダが何とはなしにあたしたちを避
けてた

理由、それだね？」

エイダ「え、と…はい。」

図星を突かれて言葉に詰まる。

と、今度は別方向から同じような衝撃。

ナギサ「はあ…エイダ、貴方は何を言つているんだ?…もう一度言つ。

エイダ、『貴方は何を言つてこらんんだ?』」

やはり右手には握り拳。

彼女は説明を求めている?ならば、答えなければ。

エイダ「え、その…私はマシナリーなのに、皆もんこじんなにも…
まるで

『ヒト』であるかのような扱いを受けていて良いの

かな、って…

所詮は機械でしかないのに…替えの利いてしまう私

なんか…が、

つて…」

エミコア「エイダに替えなんか利かないよつーー！」

エミコアが椅子を蹴り倒すようにして立ち、言い放つ。

ナギサ「…エイダ、貴方も私からすれば大切な『仲間』だ。意味は、貴方ならば解るだろ？？」

エミコアは俯いてしまって、ナギサさんは真っ直ぐにじつちを見つめて。

エイダ「私、…私。本当はずっと彼女にあこがれてて。

本心からサポートはしていました。手を抜いたこともありません。

けじふと、彼女が任務に行つて、危ない思いをしているかと

あげられたらな

つて何回も思つて。でも、私は任務には着いていくことが

出来なくて。…私、私つ…！」

言葉にすることが出来ない。

私は何が言いたかったんだつけ？思いだそつとするも、思考が纏まらない。

でも思考の中心に光る顔がある。

彼女の、笑顔、泣き顔、ふくれ顔。滅多に見せない、決意に満

ちた顔。

そうか、私は。

エミリア「……でこいつか」今まで『氣』が回るマシナリー、あたしは知らない

ナギサ「とこいつか、最初から何度も言つていいんじゃないか。エイダは本当に

マシナリーなのか、と」

言葉にしないその気遣いが、『心』に染みる。

そうか、この心を持つものなら誰でも……ヒートだ、って、名乗つていいんだ。

エイダ「……おかげさまで必要のなことでも『氣』付いてしまいました」
悪態をつゝマシナリーなんて初めて見た、とはエミリアからの初評だ。

エミリア「……あー、『氣』付いたかあ……頑張つて……応援するよ。」
エイダ「や、あの……応援は、いい、です……」

ナギサ「……何だ? 応援が必要なほど困難な道か?」
エミリア「ああ? そうでもないんじゃない?」

私は。

彼女のためになりたくて。

彼女の無事を、気付けば祈つてい。

連絡がなければ帰つてきたときに飛びつゝくらい心配して。

エイダ「… ハミコア様、やつぱりこの感情つていけないものでしょ
うか？」

ハミコア「ん~… いけなくはないんじやない? むしろ頑張れ! 応援
する!」

でも、と繋げられた。

ハミコア「様つていい加減どいつにかならない?… 堅すぎると、エイ
ダ」

ナギサ「ああ、それなら私も様付けはやめて欲しいな。出来るのな
ら敬称略

でお願いしたいくらいだ」

エイダ「敬称略はすがに… はい、それでは『なん』で呼ばせて
頂きます」

よろしい、と満更でもないようハミコアが無い胸を張る。
… 思考の中ではさんずらつけないのは内緒にしておいた。

エイダ「… お一人ともありがとうござります。やつと整理がつきま
した」

ハミコア「礼には及ばないよ? ほら、エイダが自分で気付いたんだ
じゃ」

ナギサ「… ああ、その問題だったのか… 時間がかかったな? いやで
もしかし、

なぜこの会社はここまで出会いがないのか…」

ハミコア「えつ…? …あのナギサが出会いを気にするなんて…?
?」

ナギサ「ん？…あ、いや、ちがつ…わわわ私にはワイナールが…！」
エミリア「でもさ、今はもういな『じやん？』」

小鳥のように自由にさえずる…にしては音量の大きい一人を見て。
私は。

エイダ「…私は、」

見ない振りをしていた。

蓋をして無かつたことにしていた気持ち。

エイダ「…大好きだよ、マリー」

私は、誰にも聞こえないように、そう呟いた。

この気持ちは、決して彼女には明かすまいと自分の『心』に誓つて。

Hイダ「……私は、」（後書き）

…じつじつになつた…

かわい度重ね、じつじつになつた…

（略）

あれです、多分授業中ですら有川浩さんの本を読んでるからです
うだからに違いない！

…この回がお気に入りなかつた方はこの回のことを忘れてくれて構
いません（汗）
おかしいなあ、Hイダの過去も書いつと黙つて立ち上げたのになあ…

「、」意見、感想等お待ちしております！

それでは、

マー 「…無空闇飛行の試験?」（前書き）

恋愛回の後つて書きついこなあ、A no one pieceです（――）

m

…こやあ、前回の展開がまさかの恋愛で…

いよいよキャラが私の言つことを聞かなくなつて参りました…！

が、頑張つて制御してこきますんでおつき合こ願います（汗

それではじづぞー！

マリー「…亜空間飛行の試験？」

――翌日、マリーのマイルーム

彼女の襲来は、突然だった。

午前6時50分、私とエイダで朝食をとつてた時のこと。

エミリアがいきなり満面の笑みで入ってきた。彼女曰く亜空間がどうとか。

…懐かしい上にあまりに早口で喋られすぎてよく解んない…

マリー「…落ち着いてエミリア、唐突に亜空間飛行がなんたらとは一体

何でしょう？」

エミリア「ああ、えっとね、さつき亜空間飛行の試験の日取りが決まつたって連絡があつたんだよ。そのテストパイロットにあたしが選出されたんだ！」

ああ、そうか亜空間つて現在進行形の技術だつたつけ…

…ん？私バカなのかな、まだ状況が飲み込めないや…

マリー「ええと、はい。で、それで何を私に言いに？」

エミリア「ああ、そつか。それでね、あと二人だけテスト

パイロットの同行が認められたんだけど……

マリー、一緒に来てくれない？」

「ごくん、シリアルを飲み下し、スプーンを止めて一言。

マリー「…どうして私が？」

H/Mコア「ん~、なんていつの。マリーが一緒にいてくれると安心するっていうか…」

ぞくつ、と背筋に冷たいものが走る。

いや、H/Mコアにいわれたことが原因ではなく。

おやおやおや、対面に座っているエイダの顔を伺う…ヒ。
…かつてないほど静かに冷たい田舎してゐる…!!

その気配をさすがのH/Mコアも感じたのか、一気に顔に焦りが入る。

H/Mコア「ととと…とにかく…テストパイロットに選ばれること
自体がけつこう榮誉なことなんだし、一緒に行こ

つよー」

マリー「え、ああ、うん…え？」

H/Mコア「よしつ…これで一人は確保できた、と。あと一人は…」
マリー「え、確定?…すいません、H/Mリアさん?ちょっと…?」

H/Mコア「…ナ、ナギサ誘つてみるね?…じゃ、マリーまた後で!

詳しく述べまた連絡するね…！」

脱兎の如く、という表現が的確か、嵐のよひに来て嵐のよひに去るといった表現が的確か。多分あれは嵐。…向かいの低気圧刺激して帰つていつちやつたところとか。

エイダ「…マスター?」

マリー「はいっ！」

思わず背筋が伸びる。…声が何だか怖いよエイダさん！？

エイダ「亜空間飛行試験が危険かもしない事、解つてますよね？」
マリー「そ、そりゃあの亜空間だしね…」

亜空間には結構痛い目を見させられている。

…『アライブ砲』で突っ込んだときは正直生きた心地がしなかつた。
感慨に耽るといつよりはあんな思いはもうしたくないといつ気持ちを
思い出していると、不意に通信モジュールが鳴った。

マリー「あ、ちょっと待つて…ヒミコアからだ」

エイダ「…」

エイダの後ろにダークネススティングが生えた。気がする。

…正直怖い。何でこんなに怒ってるのかとかが解らないのが怖い。

マリー「え、ええと。今回の試験は実際に宇宙に出るわけじゃなくて
研究施設に設置される試験機に搭乗して亜空間軸との接続

が成功するかを有人状態でテストするつていうだけなんだ、

つてエイダに説明と弁解をしておいてくれつて…」
エイダ「… そうですか」

説明と弁解つて…あれ、ちょっと空気緩んだ?
台風が大型低気圧に変わったくらい、だけど。

なんて思つてると、当のエイダが口を開いた。

エイダ「…マスター、何だか嫌な予感がします。危険がないとはい

万全の装備と補給をしてから臨んで下さいね？」

マリー「心配性だなあ、エイダは…わかった。そうするよ」

ならいいんです、と今度は低気圧が高気圧に変わるくらいの変化。

…これは心配してくれるあまり、つて奴なのかな？

マリー「エイダ、心配してくれてありがとうね？」

エイダ「いえ、マスターが安全なら私はそれでいいんです」

そう言つたエイダは澄ました顔をしていたけれど、耳まで真っ赤になつたのは見逃さない。

エイダ「食器、お下げします」

マリー「あ、ありがと…やっぱ、これから適性検査だつて…」

エミリアからのメールの最後に、出来るだけ早く研究施設まで来てくれ、との事。

エイダ「そんせつから…マスター、出かける前に着替えちゃつてくださると嬉しいのですが」

マリー「あ、はい…」

気付けば部屋着のまんまで出かけようとしてて。

…大人しく、エイダの出してくれたパーシに換装する。

なんだかんだエイダに甘えりやつてゐなあ、なんてため息。

エイダ「…マスター？ため息なんてついて大丈夫ですか？」

「マリー、あ、ううん大丈夫！行つてきますー！」

現在時刻を確認して、マイルーム前の通路を走り出す。
…と、後ろからエイダの声が。

エイダ「マスター！研究施設は逆方向ですよー？」

マリー「うえー!?あ、いけない！ありがとうございますー！」

エイダ「全くもつ…気をつけ下さーいねー」

マリー「えへへ、申し訳ない…行つてくれるねー！」

エイダ「お気をつけで」

エイダに見送られて研究施設へ走る。

遅刻じゃなかつたらいいな、と幾ばくかの希望を抱いて。

マニー「…無空闇飛行の試験?」（後書き）

…はい、次章はエミリッシュawn『時空を越えて』になります。

いや、とりあえずはエアのサバイドストーリーをすませておひつか
と。（。 。 ；）

…元のミッションが長いのでこの章も長くなるかもしだせんが何
卒ご容赦

願いますm(—_—)m

ご意見、ご感想等ありましたら是非お願いします！

ではまた^_^(—_—)^

ナギサ「…嫌な予感がする」（前書き）

「んばんは、どうしても会話文があくなりがちな *Angeleska* です（・・・）

途中の文で繋げようとすると説明口調になってしまって…難しいです（汗）

やつぱり作家の方々は偉大だなあ、と今更ながらに思いつつ。

それではどうぞ！

ナギサ「…嫌な予感がする」

——翌々日、亜空間研究施設、亜空間航行試験機内部

ナギサ「Hミリア、やはり嫌な予感がするんだ。この亜空間の試験
とやらをやめることはできないだらうか?」

Hミリア「もう、まだそんなこと言つてんの…心配しなくても
大丈夫だつて!」

はい、やつてきてしました試験当日。

私たちはもう試験機に乗り込んでいて、あとは開始を待つだけ。

…なのだけれど。ナギサが言つには『嫌な予感がする』って。
なんだかんだで我が社の社員の勘は当たるから(ユート然り)、
ここまでナギサが引きずるのはさすがに心配かなあ…

あ、そういうばエイダにも再三『気をつけて』って言われてたん
だつ…ほ、本当に不安になつてきたよ…?

なんて言つてる間に、Hミリアがナギサを説得しきつたみたい。

Hミリア「それじゃ、全員運転席に座つてベルトをして。いい、
準備はできた?ハッチを閉めるよ」

カシュー、と軽く気圧式のハッチが閉まる音がする。

…Hミリアの学者な面、久しぶりに見たけど生き生きしてゐなあ…

Hミリア「亞空間軸計測機、オールグリーン。これより試験運行

を開始するよ。システム、ドライブ！」

聞きなれた転送音の後に、一瞬視界が白く染まり、即ブラックアウト。

…あれ？何だか物々しい雰囲気？

ナギサ「！」、「これは……」

H//M//リア「え、なになに！？」

赤色回転灯と一緒に響く警告音。

…これはもしかしてもしかしあつた！？

マリー「…えつと…H//コア？」、「れつて…」

H//コア「わ、わかんない！…ちょっと…何が起じたの！？」

ガクン、と一気に落ちる！？

ナギサ「……くつ！」

H//M//リア「きやああああああああああ！」

マリー「嘘でしょおおー！」

間もなく、機体が激しく打ちつけられるような衝撃。
…そのまま、何処かを滑つていくような感覚。

マリー「…と、止まつた…？」H//リア、ナギサ、大丈夫！…？」

H//コア「う…ううん…」

ナギサ「くう…」

マリー「よ、よかつた…生きてる…」

H//コア「あたしたか…何が起つて…？」

ナギサ「…」

壊れて開いたハッチの外に広がっている風景。

…そこには現実のものではなかつた筈の『見覚えのある風景』が。

マリー「ね、ねえH//コア…」

H//コア「うん…あの時のVR空間だよ。」

そう、私たちはじめを知つていてる。

コートとルミアと私とH//リアで戦闘訓練の試験で来た、VR空間。

恐る恐る、ハッチから這いだし『地面を踏みしめる』。

…おかしい。どう見ても、どう感じても。この空間は人工物じゃない。

H//コア「何で垂直空間飛行の試験機がVR空間と繋がつたんだろう？」

マリー「…H//コア、外に出て来てみて。この草木、本物だよ。」

ナギサ「…」

ナギサも続いて外に出て来て、小首を傾げる。

ナギサ「…よく解らないのだが、VR空間とは風景を現実に実体化させるものなのかな？」

H//コア「ううん、違う…VRはあくまでプログラムだもん…」

までの

精度で空間を具現化するなんてできなによ…」

マニー・ハリス、アーヴィング

エミリア「多分、そう。VR空間じゃないんだと思つ...何、iji?」

ナギサ「ヒーリア、話についていけないのだが…」

エミリア「ああ、ごめん。えっと…」

エミリアがナギサに事情を（解る範囲で）説明する。

その隙に、私は周辺の調査。：主に草木や土質の、だけど。

結果として、じいじは『グラールじゃない』といつ仮説が立ててしまつた。

草木の植生、土に含まれる微量の鉱物、全て見たことがない。

「ミニア、「うん、もういいと... とにかくせ、早く寝ね。時間が
経つと

二〇一

ボン、と軽い音がする。… 試験機の方から。

ナギサ「その…私たちが乗ってきた試験機から、黒煙が立ち昇つて
いるんだが…」

エミリア「ええええーっ！？」つてね。でも大丈夫！」なん」ともあらー

載してある

から、しばらくすれば自動的に故障部分が直るわよ

?

と、エミリアが言い切らないうちに試験機を淡い光が包み…
光が晴れた機体には、傷一つ残っていなかつた。

マリー「すっごーい…さすがエミリア…」

エミリア「ふふん、どんなもんよー…これでグラールに帰れるよ…」

すると、いち早く中に入つていったナギサがハッチから顔を覗かせた。

ナギサ「あの…モニター部分にバッテリーエンブティと表示が…」

マリー「嘘あ…?」

エミリア「ええええーっ…?…つて、なんちゃつて…こんなこともあるー

かと、大気中にあるフォトン粒子を収束させて、エネルギーに

変換する装置をつけておいたの。これでバッテリー切れに対応

できるわよ!」

エミリアがハッチに入つていったかと思つと、少しもしないうちこ試験機が

見覚えのある暖かい光に包まれた。

マリー（ここにもフォトンあるんだ…）

エミリア「ほら、もうエネルギー充填完了…これでグラールに戻れるよ!」

マリーも早く入つて入つて!」

「マリー「あ、『めん』めん！今いへ！」

何か、何か心に引っかかるものを感じながら。試験機の中に滑り込んで、ハッチを閉める。

「ミコア「さて、これでもう安心ね。さつと研究施設に戻つてこのトラブルの原因を究明しなきゃ……あ、あれ？ 航空計測器が

誤作動を起こし

てる！？ 通信システムもダメじゃん！」

「何だか、とっても嫌な予感……エイダ、予想、的中かもよ……？」

「ミコア「な、なんだろう、これ……故障部分は直つてるはずなのに何かの影響

でシステムに障害が発生してる……？」

「マリー「……」」

半分涙声で私が言つ。

いや、連絡も取れないなんて……エイダ……！

「ミコア「……そう言つたいのは山々なんだけど。データベースを開こうにも

それにも影響してて原因が分からぬ……うー、困つ

たなあ……」

「ナギサ「く……」

「マリー「……ん、あれ？……ナギサ？」

「ミコア「……ナギサ？」

ナギサが、欠片騒動以後一回も見せなかつた表情。
H//コアは氣付いてない。この表情は。

ナギサ「ぐつー！」

マリー「ナギサー！」

どうして、終わつたはずなのに、何で今も！？
頭の中のクエスチョンマークを振り払つ前にナギサが機体の外へ歩
きだした。

ナギサ「……何かが……何かが私を……呼んでい……」しつちだ

H//コア「え、ちょ！？ ちょっとナギサ！」

マリー「H//リア、追うよー！」

H//コア「あ、うん！… そりだよね、もしかしたら誰かに会えるか
もー…」

機体を置いていくための口実だろ。H//リアがハッチをロックす
る。

ふらふらと歩くナギサは明確な目的を持つてゐるかのように進んで
いく。

…まるで、本当に浮ばれているかのよう。

… 」のとき私たちは、多分誰かの掌の上で踊っていたんだと思つ。

今にして思い返して、そう思つ。

神様つて存在がもじいるのなら、多分性格は最悪。

… 私たちをこのとき導いていた神様は、破壊を司る神だったのだから

う。

ナギサ「…嫌な予感がする」（後書き）

：最後の文はネタバレになっちゃいますかね？（汗
いえ、一応奴と直接対峙する訳じゃない…から、大丈夫、の筈！（殴

何か不都合がありましたらご指摘お願いします♪（――）♪

いや、サイドストーリーの中に主人公混ぜるのって案外構成変わっ
ちゃいますね（。。。）
というかもともと主人公が空氣すぎるからなんですけど…（w

いかがでしょうか、なにかご意見ご感想等ありましたらよろしくお願
いします！

ではでは

Area1・森（龍書き）

「んばんは、これ書いひあるじゃうしてもマニーさん達が動いて
くれない Anagelica です ^(_ _)^
メッセージカプセルの内容収集したり色々したりで資料が…！

久しぶりの投稿ですしここだべつてのもあれなんどうかあつ
きあいください！

それでせびりやモ！

Area1・森

——森エリーア1：sideマリー，M，ミスラ

Hミコア「…それで、じー、どー?」

マリー「すっかり迷っちゃったかなあ…」

ナギサを追つて来たのはいいんだけど。
知らない土地で迷子になつてしまふなんて…

ナギサ「す、すまない…」

Hミコア「あ、いや謝らないでよナギサ！大丈夫、きっと何とか
してくれるって…マリーが」

マリー「え、私!?ちよ、ちよつとまつて道なんて覚えてな…い…」

言い終わるか終わらないかのそのとき…。

視界の端に、何かオレンジ色の…光?なんだろう?

ナギサ「ん?どうしたんだ、マリー?」

マリー「あ、いやちよつと気になるものが…」

そう言うと私は、そのオレンジの光の方へと駆け寄った。
光を出しているのは…何だらう?これ?カプセルみたいな…

マリー「ね、Hミコア!ちよつといつちやめて…」

Hミコア「お?早速あたしの出番?何々…つて、何これ?」

マリー「さあ…何か機械っぽい…よね?」
ナギサ「触つてみればいいじゃないか?」

エミリア「そうだねえ…? むろ、スイッチみたいなのが発見ー! ポチつとな」

マリー「ポチつとな、つて」

エミリア「な、何よー!」

次の瞬間、思いも寄らないことが起きた。
…オレンジのカプセルが、喋りだした。

『あー あー。』

「「喋つたあー! ?」」

私とエミリアとで驚いて肩を寄せあつていると。
ナギサが近づいてカプセルの側にしゃがみ込んだ。

ナギサ「何だ、喋れるのか?」

ナギサ、その冷静さはすごいからくるの…!?

なんて思つていると、そのカプセルは言葉を続けた。

『ゴホンー。』

『あたしは リコ。ハンターのリコ=タイルル。』

マリー「あ、ビ、ビツキ…」

H//コア「…マリー、よく聞いて。」
「これ録音じやない?」

マリー「え?…えちよつ、恥ずかしつ…!？」

『顔が熱くなるのが判る…まさに、穴があいたら入りたい…
力プセルはそんな私の考えなんて意にも介さず、続けた。

『これからこの力プセルを記録として 残していくこととする。
後に あたしに続いて来る者のために。』

『今、これを聞いてるなら 判るはずよ。この惑星ラグオルに
何らかの異変が 起きつつあることを。』

『忠告しどくわ。気を抜かず、常に周囲に気を配ること。
もし 生き抜くことを望むなら、ね。』

音声はそこで終わっていた。

私達に突きつけられた唐突な真実。

マリー「…惑星ラグオルって、どー?」

H//コア「ええと…」めん、わかんない

ナギサ「要するに他の星だつて、言葉が理解できるだけ良いじゃな
いか」

マリー「あ、そつか…グラールじゃないので、言葉が判るつてことは

…」

エミコアがうん、と力強く頷いた。

…目が輝いてるのは科学者故の本能、なのかな…

エミコア「誰かここに住む人に会えれば何とかなりそう…」

ナギサ「…だが、どこに人がいるんだ?こんな森の中に」

マリー「あ、そのカプセル追いでいつた人搜せばいいんじゃないかな?」

エミコア「ナイスアイディア!じゃあこのカプセルを探してこいの…

リコ?の

足取りを追おつ!」

ナギサ「リコ…リコ、か…」

マリー「ん~、ここから見える範囲には…あ、あれかな?」

エミコア「行ってみよつ!」

――森、セントラルドーム近辺――side・エミコア・リコ――

エミコア「…ふう。結構歩いたけどあんまり無いもんだね」

ナギサ「そうだな、ここにあるので3つ目か。…ところでエミコア、

マリーは

わざわざから後ろの方で何をしていろんだ?」

ナギサにむかれて振り返ると、向かいのマリーが……十全こじつている。

H//コア「あ、なんだろう。おひさままでカプセルがあったといひ
うござがんで

「ねどり…」

ナギサ「珍しいな、彼女が私達から離れて歩くなんて

確かに言われてみればそうかもしれない。

マリーがあたしたちと離れて歩くなんてそういうことな。H//コア「…まあマリーなりに向か考へてゐるんじやない。それまでは全部で三つ……四一つは元からいたものだね。」

「ねどり…」

ナギサ「ああ、もうだな。どうする? 一番こまとうて聞いてしまおうか?」

H//コア「その方がいいな……おーい、マリー。カプセルの中身聞くから」

「ねどり…」

マリー「……う。ねーい。今こくよー。」

たつたつたつたつと小走りでマリーが一いつひづくへと入る。

ナギサ「ああ、再会……H//コア、どうせんせんせんせんだ?」

H//コア「ああ、それほれ貸して」りんごへ……りんを出すと……」

ピッ、と軽快な音とともにメッセージカプセルが起動して、最初に見つけた

『おかしいとは思つたんだ。森の動物がこんなにも人を襲うようになるなんてさ。』

『一』の間までは どの動物も みんな おとなしかつたのに。』

「何かきつと原因があるはずだから、それを探ることにする。」

ほとんび
商売抜き。
あたしも
酔狂なことだ。

『「ほんなことやつてゐから 祭りに参らるのかしらね、
レッジ・リング・リーグとかいつて。』

『でも、あたしは、そんな大層な人間じやないし。』

『みんな 英雄が欲しいんだ。そこにあたしがたまたまハマっちゃつただけ。』

マリー「……あれ、終わり? 何とも半端な……」
エリシア「まあまあ。一いつ回り行かへん」と

『どうだろ？その辺の動物の死骸は。』

『あたしら ハンターズの使う火器といえば、いいとこ
レンジャーの使うアームズ系。でも これは……』

『あたしらの手によると思えない強力な火器で 倒されてる……』

ナギサ「アームズ、とは？レンジャーが使うなら銃なのだろうが…」
エミリア「あー、はいはいストップ。三つ目流すよ～？」

ピッ

『大変なことが起きた…！大きい地鳴りと共に 地下から
何かが 吹き上がりてきて…』

『セントラルドームで大爆発が…あれじゃ 中は…！』

『…何を言つて良いか 判らない。』

『この惑星に降りて 7年、せつかく みんなで ゼロから
環境を 整えてきたのに…』

『…いつ たい何があつたの？』「んとこの異変と 何か 関係がある
の？』

マリー「…えーと、エミリア？ちょっとだけ単独行動して良い？」

H//コア「…珍しきね。つよーかい、あたしたちがひまむかひで、
用事 うちゅうせと済ませて来りやつへよ」

マリー「ありがと、すぐ戻るねー。」

そつ面つとマリーはわざわざ来た道を駆け戻つて行つてしまつた。
…ちよつとだな、心配だけば。マリーなら大丈夫だよね。うん。

かと思つたが、さつあまでしゃがんでたといふで…また何かしだし
た?

本当にじるんだが、マリーつけば。

なんて考えていた。

ナギサ「…リア? H//コア?」

H//コア「はえつー? ああ、ほいほいなんじょい?」

ナギサ「少し気になる点があつて…あれは何かのモニメントだろ
うか?」

H//コア「え?…どれどれ?」

そう言ひ、ナギサが指を指す方を見ると。

成る程、そこには明らかに人工のモニメントリソル柱があつた。

H//コア「うーん…調べてみよつか

ナギサ「しかしここを動いてはマリーが…」

H//コア「あ、じゃあナギサはちよつとだな」で待つてよー。あ
たしが

ナギサ「… それなら。すまないなエミコア」

エミコア「なあに水くせこ」と言ひてゐのよーじや、 わかとだけ待つてね?」

ナギサ「ああ、 行つてらっしゃい」

とはいへ、 そんなに離れてないんだナビ。
距離にして50メートルくらい、 軽く走つたら本当にすぐ着いてしまつた。

エミコア「んー…………ん? 何だろこの柱、 隨分経年劣化してるなあ……」

確かさつきのメッセージカプセルによるところ達がこの星に来たのは7年前。
でもおかしい、 ここの柱の劣化の仕方をみると明らかに7年位いるんじゃない。

エミコア「おつかしいなあ……」

といこつ手を触れると。

「ウン、 といづ音とともに柱がオレンジの光を放ち始めた。

エミコア「うわあー? ……び、 びつくりしたあ……何ともないから触つても大丈夫

だとは思つただけで……と、 あれ?」

さつきまで何もなかつたのに、 柱のオレンジの光とともにこれまでのよくな物が

浮かび上がってきた。

H//コア「ふふーん、あたしに読めない文字など……あり? 何だろ
これ、全然

読めないや……」

悔しきけど、持ち合わせの翻訳ツールを試してみる。

…知らなご言語、か。…絶対解読してやるんだから……！

H//コア「…断片的にしか判らなーなあ。光…影…対…無く…？」

何だらう、何かを示唆しようとしているのは判るんだけど。

…首を傾げていると、後ろから足音が一いつ。

ナギサ「H//リア、マリーが帰ってきたから連れてきてみた。何か
わかったか?」

H//コア「ああ、ナギサ。んとね、何かを示唆しようとしているのは
判るんだけど……」

マリー「光、影、対…無く…? んー、何だらうね?」

H//コア「え! ? マリー あんた読めるの! ? .」

つい声を張り上げてしまつ。

だって、マリーは今翻訳ツールなんて立ち上げてないんだから……

マリー「ひあつー! あ、何かごめん!」

H//コア「あ、いや、怒ってるわけじゃないんだけどわ……」

マリー「あ、そ、そつの……これなり大きな声出すから驚いたやつ
て……」

H//コア「ああ、『めぐ』めぐ。え、でもあなた何でこれ読めたの
…」

マリー「んー、正直云ひたわからぬ。何かこんな感じかなーって
…」

H//コア「ちよ、直感ですか」

全く、マリーにはいつも驚かされる。
…気が弱いかと思ったら我が強かつたり、ヒートみたいでキャストだ
つたり。

…まあ、嘘が下手っぴなこいつが云ひながら本当に直感なんだわ。

H//コア「あなたのそういうこと、凄こと雲つわ…」

マリーがきょとん、として小首を傾げる。

H//コア「ああ、気にしないで。…ええと、じゃあ探索続けようか
？」

ナギサ「H//リア、それならあの洞窟の方に行つてみないか？」

マリー「洞窟の方…つてこいつ、VRだつたら確か奥にはドア、
ンが…」

H//リア「つーん…でもまあ、VRではあんな状態でも勝てたし。
行つてみよう」

マリー「つーん。あんまり、気が進まないナビ…」

ナギサ「何だ、怖いのか？」

ナギサがマリーを煽る。…いつもながらマリーがムキになつて進み出

すのだけれど。

マリー「うん。怖いよ?」

…何かがおかしい。

HIIコア「マリー、大丈夫? 本当にイヤならあのセントラルドーム
だつば? の方に

行くけど…」

ナギサ「…マリー、挑発してすまなかつた。だが、私は向こうに行
かなければ

ならない気がするんだ」

マリー「…」

マリーが俯いて何かを呟く。

小さすぎて一部しか聞き取れなかつたその単語は。

HIIコア「…依り代?」

まつ、とこつ顔をしてマリーが顔を上げる。

…田には、静かな決意の色。

マリー「…ううん、何でもない。じつちじめんねナギサ、行こ

う…か

ナギサ「…感謝する。進もう



あたしはこの時、彼女たちが何かを感じ取つてこることを気づいていた。

気づいてはいたのだけれど、それが何かは判らなかつた。

今にして思うと、それはあたしも感じていたのだ。

本能が鳴らす警鐘。

メッセージカプセルにあつた凶暴化したモンスター達とあたし達は
出合つてなく。

…あたし達は本物のドラゴンの恐ろしさをその身を持つて体験する
こととなる。

G ro w l f r o m t h e d e p t h s o f e a r t h (前書き)

今回はデリケン戦だけになります A n n o u n c e m e n t a です ^ (ーー)

^

直接戦闘する訳じゃないイベントなので…

ストーリーの筋は結構変わると思いります。これから。
：原作通りにやると主人公が空氣過ぎて（黙

そ、それではどうぞ！

G ro w l f r o m t h e d e p t h s o f e a r t h

——セントラルドーム地下：sideマリー，M，ミスラ

『移住のための 急激な開拓で、知らず知らず

惑星の生態系を 破壊してしまっていたのかも知れない。』

『それで、原生生物が 侵略者を 排除しようとした…
そんな推測は できる。』

『でも、だつたら あの爆発は？』

『情報が足りない。もつと 調査が必要だわ。』

ナギサ「地下に入った途端にメッセージカプセルか。やはりリコは
この先のようだな」

マリー「そうだね。でもこの先は確か…」

そう言いながら歩いていると、ドーム状の広い空間にでた。
Hミコアと顔を見合わせ、苦笑いを交わす。

Hミコア「VRだとボスだった、よね？」

マリー「うん。これ倒せたら帰れたりしないかなあ…」

ナギサ「？—一人とも、何の話を…」

ナギサの言葉は最後まで続かなかつた。

理由は一つ。

倒さなければ「ひらりがやられる敵の存在に、彼女が気づいたからだ。

マリー「あー、あの時より一人少ないけど…倒せる、かな?」

エミリア「倒せるかどうかつていうかやらなきゃやられる感じだね」

ナギサ「一人がそこまで警戒する相手なら私も気は抜くま」

…全力を出さないとやられてしまいそうだしな

思い思いの言葉を交わしながら、それぞれが武器を具現化させる。
もちろんスタンモードなんて入れていない。

エミリアはクラーリタ・ヴィサスを。
ナギサはスティールハーツを。

そして私は、剣影を。

鞘から抜き放ち、気を張りつめる。

敵はどこから来るのか、これは訓練ではないから判らない。

けれど今まで磨いてきた戦闘センスを発揮できれば、大体は掴めてくる。

私は静かに目を閉じて、呼吸を整える。

足の下に伝わる小さな振動。前後左右どこからでもない、どこつことば…！

マリー「二人とも今すぐここから離れて…ドラゴンは下から来るよ

!

返事はない。彼女たちは返事をする前に待避を始めたからだ。言いながら私も走り出していた。足下に伝わってくる振動が大きくなり、そして。

耳をつんざく轟音と、それとともに吹き出す溶岩。

強襲の回避に成功した私がみたトランは、VRのそれとは全くの別物だつた。

外見の問題ではない。ひしひしと伝わってくる「狩る側」の生物特有の威圧感。

卷之三

エミリア「マリー！大丈夫！？」

そうだ、私は一人じゃない。

…エミリアに戦闘のノウハウを教えたのは私なのにな、そんな基本のことを今

教わるなんてまだまだだね。

ズシン、という振動と同時にドラゴンが空中から降りてくる。もづく、威圧感なんて感じない。

マリー「ナギサー・ドラゴンの翼をお願い！牙と爪に氣をつけて！」
ナギサ「了解した……はああつー！」

エミリア「後方支援は任せて！」

マリー「ありがとう！火球と突進には注意してね！」

私の仕事は何か。

攻撃力だけならナギサが上だらう、なら。

マリー「ふつー！」

私は尻尾を切り落としてドラゴンの戦力を落とす！

ナギサ「はあああああー！」

マリー「やあああああー！」

と、一いちいちの出鼻をくじくじに突然。

ドラゴンが、ぐるっと少しだけ向きを変えた。

マリー「あつ…ナギサー・ダメー！」

私の制止は間に合わず、ナギサはグラン・クラッシャーの動作に入ってしまう。

ドラゴンが、頭をナギサの方に向けた。

少しだけ開かれた口から炎が漏れているのが見える。
まづい、あのままでは…！

ナギサ「なつ……！」

一瞬ためらってしまったナギサの一撃は、ドラゴンの角に弾き返される。

ナギサ「…………しまつた！」

エミリア「ナギサ、今助けに……！」

マリー「ばかっ、エミリアー今はダメーーー！」

エミリア「えつ？…きやあー！」

マリー「くつー！」

考えるよりも先に足が動いていた。
驚くほど冷静に状況が見えていた。

エミリアとナギサの距離は三メートル弱。
ドラゴンの炎は大きくなっていく。

時間がゆっくり流れるような錯覚に囚われながら、必死に足を動かす。

ここからなら、エミリアの方が近い！

走りながらエミリアを脇に抱え、ナギサの方に向かつて一気に頭から跳ぶ。

最悪私なら、修理すれば今ここで炎を食らっても問題ない。

けれど彼女たちはこのドラゴンの炎には耐えられないだろう。

機械の体でよかつたと、そう静かに思いながら二人を下にして倒れ

込む。

……けれど、私達に炎が浴びせられることはなかつた。

????「たあああああ……」

……」の声はさじこかで、なんて思つてゐる。

私達のすぐ後ろにドーラゴンの頭が落ちてきた。

マリー「……え？」

ハミコア「『』、『』めんマリー……」

マリー「いや、大丈夫……だけど、これ」

私が一人の上から体をどかしてドーラゴンの頭を見えるようにする。

ハミコア「す、す、す、ドーラゴンを一撃で……」

マリー「いや、これは私がやつたんじゃなくて……」

なんて話していたら、後ろからいきなり声をかけられた。

????「見慣れない格好ね。お前たちもハンターズか?」

ハミコア「え?」

????「まあ、いいわ。とにかく『』は危ないからすぐ『』バイオー

ア1

に戻りなさい」

ハミコア「あ、あの!ちょっと待つて……って、行っちゃつた。

ハンターズ？パイオニアー？なにそれ？「

エミリアが一人で考え込んでいる間に、ナギサが一切言葉を発していないことに気がついた。

……頭でも打っちゃったかな、意識が飛んでるみたい。

マリー 「……あー、エミリア？」

エミリア 「ん？ どうしたの、マリー？」

マリー 「ナギサがさつきの衝撃で気絶しちゃって……ちょっとリード休憩

してもいいかな？」

エミリア 「ああ、結構な勢いで飛び込んだもんねえ……うん、それなりちょっと休んでいい。さつきの人は気になるけど

……」

マリー 「あれ？ エミリア、気づかなかつた？ 多分さつきのがリコさんだよ。

声がメッシュセージカプセルのと同じだったじゃん

エミリア 「……ええーっ！ え、ちょっと遅おつよー早くー！」

マリー 「や、でもナギサが……」

エミリア 「……うーっ、わかつた。じゃ、ナギサが回復したら出発ね

……地面に、ではなく……
そう言い、エミリアがドサッ、とこつ音を立てて座り込む。

マリー 「了解、つと……エミリア？」

H//コア「せこいなんじゅつ?」

マークー「ゼロンの首をイス代わにすのせかすがじどりかと…」

H//コア「…うみつあきやああーーー！」

いつもは見せないような速さで立ち上がり、スカートをはたいて、そしてまたいつもは見せないような速さで、倒れているナギサの隣に座り込む。

これだけ騒いでも田を覚まさないナギサみると、ここに待機するのは長そうだな、と少しだけ苦笑い。

…彼女が本当に「だとしたら、できれば早く追いつきたいのだけれど。

でも、ナギサを氣絶させてしまったのは私だったりするので…

…やっぱり、強くは言えなかつたりするのだった。

… こんな風にしてみたり。

戦闘描写は苦手です… でも上達したいので、『意見』、『指摘』、『感想』等ありましたらよろしくお願いします

それでは m (—) m

Area2・洞窟（前書き）

おはよーい♪やります、
あるいはここんて、まけ
もしくはこんばんは。

Area2・洞窟です^_^(ーー)^\n

色々考えた結果、私はこれをAPSPO2-Yのマップ準拠ではなく、
PSOのマップ準拠にしようかと思つてまして…

洞窟の奥の清流があるところがとても好きだったので、インフィニ
ティで出なくてショックでした…

今回は少し構成に自信がないのですが…

矛盾点や引っかかる点などありましたら教えてくださいとも嬉しい
しいです！

それでは、ピリッペー。

Area2・洞窟

——セントラルドーム地下・sideマリー、M、ミスラ
…状況を整理したいと思つ。
確か元はといえば亜空間航行のシミュレーションの実験だけだった
はず。

それからまあ事故があつて亜空間航行をしてしまつて。
時空を越えてこのラグオルといつ惑星に来てしまつた。

そして危ないとこをこの星のリコで人に助けてもらつて。
彼女を追おうと思ったんだけどナギサが気を失つちゃつて。

少しここで休憩していこう、ってなつた。

そこまでは…うん、まあ、なんとか納得できる。

けど今なんで私は左足にエミコア、右足にナギサで一人も同時に膝枕
してゐるんだろう?

いや、ナギサを膝枕ならわかるんだけど。氣絶させちやつたの私だ
し。

何でエミコアまで…つて、寝息たててるし。

マリー「律儀に膝を貸しちゃう私も私なんだけど…はあ」

そんなこんなでもう10分くらい。そろそろ足がしびってきたなあ…
なんて思つてると、ナギサの瞼がピクリと動いた。

ナギサ「う…うん…」

マリー「あ、ナギサ気がついた?」

頭の中ではまだ戦闘中だったのだり、飛び起きよつとするナギサを
抑えて膝枕の状態に戻す。

ナギサ「痛つ…頭がガンガンする…が、大丈夫だ。すまない、私は
気を失つて

しまつていたのか」

マリー「あはは…いや、元凶は私つていうか…ごめんね?」

ナギサは一瞬記憶をたどるような目をして、会話したよつと語った。

ナギサ「…ああ、いやこひこひこひこひつてすまない。感謝す
る。

そうだ、ドライゴンは?倒したのか?」

マリー「わつ言つてもらえると助かるよ…倒した、つて言つても私
たちは

何にもしてないんだけどね?リコさんが来て、倒して
くれた」

ほり、ヒドリゴンの生首を指で示す。

ナギサ「…彼女はとんでもない実力者のようだな」

マリー「全くだよ、と。ほり、エミリア起きて?そろそろ行くよ?」

ムクッ、とナギサが起き上がったのを確認して、エミリアを起こす。

エミリア「ん…あと5分…」

マリー「そんな古典的なボケいらないから…そろそろ足が痺れて来ちゃって

限界なんだって…」

ナギサ「貴女は足まで痺れるのか…難儀なことだな」

マリー「むしろ何で他のキャストが足痺れないのか不思議でたまらないよ…」

エミリア「…うう、わかつたよ起きるよ…ふあ…おはよ」

マリー「はいおはよう。さて、確かにコさんはあの転送装置から先に進んだよね?」

エミリア「うん、確かにそつだつたはずだけど…ナギサ、もう動いて大丈夫なの?」

ナギサ「ああ、おかげさまで。私のせいで待たせてしまったんだ、さあ行こ!」

マリー「失神状態から目覚めてすぐ動けるとかナギサって結構規格外だよね…」

エミリア「キャスト全体からみて規格外のあなたには言われたくないと思つけどね」

エミリアから鋭い切り返し。くそ、反論できない。

マリー「それを言われると痛いなあ…」

ナギサ「ふふ、貴女こそ足は大丈夫か?」

マリー「逆に心配されちゃったよ!? 大丈夫大丈夫、行ける行ける

！」

…明るく振る舞つてはみるが、どうにも心の中に残つてゐる不安は消えない。

だって、このまま進んでしまつたら取り返しのつかないことになつてしまいそうで。

でも進むしか道はないなら。

精一杯あがくだけ。

マリー「…うん、大丈夫。行く！」

そう言って、私は先頭に立つて転送装置へと近づいていった。

——洞窟：sideマリー，ミスラ

転送装置を抜けた先で私達を待つていた物は、想像し得なかつた光景だつた。

おびただしい数の原生生物の死骸。灼熱の溶岩。血液が蒸発し、発する悪臭。

いるだけで体力を奪われそうなの空間は、VRでは体感していい「現実」だ。

エビルシャークからナノノドリ、山まで、死屍累累と表現するのがふさわしい。

そのすべての原生生物の致命傷であらう傷跡はとても鋭利で。一撃でドライコンの首を落とした、あの切り口を彷彿とさせた。

けど、何より私達の頭を満たしていたのは、普段絶対に巡り会わない、この暑さのことのみだった。

エミリア「あつつか……」

ナギサ「言つたなエミリア……よけいに暑くなる……」

マリー「パーシが灼ける……熱暴走しそう……」

エミリア「そつか、あんたは人工皮膚とはいえその下はさすがに金属か……

『愁傷様です』

マリー「挿まないでエミリア……あ、あれ」

ナギサ「メッセージカプセルか。よく見つけたな……回収しよう」

エミリア「多分それ今とてつもなく熱いと思つから直接ナノトランサーに

入れちゃつた方がいいと思うよ……」

ナギサ「わかつた、ありがとう……よし、回収した」

マリー「幸い原生生物は皆リコさんを掃討していくてくれたみたいだし、

死体の続く道を進めばリコさんに会えるかなあつて思つたり……」

エミリア「賛成。このあつつい中戦闘なんてしてたら倒れちゃうつての」

ナギサ「……リコは、私や貴女より規格外かもしないな、マリー？」

「マリー、なぜ私に振るのか……あ、ここ右に曲がるみたいだね

通路を曲がって少し広い部屋である。

そこには、見覚えのあるモニコメントが建っていた。

H//コア「あり?」これは確かにあったよね?」

ナギサ「ああ、覚えている。H//リアが調べに行つてくれたやつだな」

H//コア「あ……ええと……あれ?何で書いてあつたんだつけ?」

H//コア「『光…影…対…無く…』だね。マリーはあれ読めたじゃん!」

マリー「あはは、面白い……」

ナギサ「しかしこれはまだ起動されていないのだろうか?森のは周りが光に

包まれていたと記憶しているが

H//コア「ああ、あれは……この辺をちょっととなー。」

相も変わらない面白かけ声とともに、H//コアがモニコメントに触れる。

すると、森にあつた物と同じような不思議な光が柱を包み込んだ。

マリー「さうすがH//コア!ええと、なになに?…存在…無限…?」

H//コア「解読はやあつー?あたしの見せ場とらないでよー。」

マリー「…へへ」

H//コア「『てへつ』『じゃない』もつ、無駄に可愛いのがまたムカつく!」

ナギサ「誉めているのか、それともけなしているのか…よくわから
ないな」

マリー「私、星まで飛ばした覚えはないんだけどなあ…」

H//コア「天然！？」

マリー「ああ、ほらほらモニコメントの解析終わつたんならそれそ
ろ行こーつ？」

早ことにコロをなんに追いついておきたいしゃ」

ナギサ「マリーのスルー能力は高いな…」

マリー「いえいえそれほどでも？」

H//コア「それこそ誉められてるのかわかんないよ…」

あはは、と笑つて受け流し、モンスターの死骸をたどつて歩き出す。
足下にあつたメッシュージカプセルを拾い、代わりに一つ物を置いて。
…」そこそやつているわけではないんだけど、なるべくながら知られ
たくない。

これは、一種の賭けだから。

――洞窟、最奥部……Side H//コア・ムラー

あつついあつつい言いながら歩いてきた洞窟も、最奥部まで来たら
空気が一変した。

溶岩ではなく、清らかな小川が流れているのだ。

驚いたことに、植物の自生までしている。…」の花、なんて言つんだろ？。

ふと花から田を上げると、田をさらしたくなる光景がそこにはあった。ナノノドリゴからギルシャークまで、ありとあらゆる生物が変わらず死んでいる。

中には見たことの無いようなモンスターまで死んでいる。

調べたくないかと聞かれれば調べたい。とても。けど、隣で何かを思い詰めたような顔して歩いているマリーを見たら…

時間とらせて、ちょっとこいつらのこと調べるから。
なんて、言えない。

マリー「…」
ナギサ「…」

ヒミコア「…空気がとてつもなく重い…」
マリー「…ん、ああ、「めんねエミコア」

ヒミコア「いや、謝られてもあれなんだけど…あれ？」

モンスターの死骸をたどり続けて數十分。

私たちの眼前に広がってきたのは、大きな水路のよつたな場所と。

その水路の上に浮いている、貨物運搬用と思われる…いかだ？あれ、なんかこの光景見覚えが…

Hミコア「これ、や。イヤな予感しか…」

マリー「しないよねえ…」

ナギサ「…ティー・ロレイでも出てきただな

マリー「その気持ち痛いほどわかるよ…」

はあ、と三人で揃つてため息。

でも手分けして周りを探して見てもこれ以外の移動方法なんて見あたらない。

渋々と私たちのはいがだに乗り込んだ。

すると、こちらからは何も操作をしていないのに、自動的にいかだが動き出した。

…思つたよりは速いけど、目的地がわからないため何とも言いがたい。

三人で黙つているのもおかしいな、と思いつつふと、ナギサの方を見る。

…良い暇つぶしを発見した。

Hミコア「そうだナギサ。あのメッセージカプセル再生しない?」

マリー「そうそう、それなら私も道中拾い上げてきたから聞いておきたいなって」

ナギサ「良い考えだな。よし、なら私の持つているやつから順に再生で良いか?」

「異議な~し」

マリーときれいにハモる。

顔を見合させて、ちょっとだけ照れ笑い。

ナギサ「仲がいい」とだな…じゃあ、再生する」

マリー「お願い！」

ナギサはおつかなびつくりカプセルを床(?)に置き、スイッチを入れた。

Area2・洞窟（後書き）

こんな強引なところで何故切るかと云つて、終わらなくなりそうだからです（。 。 : ）

このままだと坑道まで行つてしまいやうで…

P.S.O. 準拠と言つましたが、あくまでリコのメッセージカプセルとマップ構成のみだと思ってくださいと光栄です（（（ . . : ）

なにかご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願ひします（ - - ）

ではでは

Area3・坑道（前書き）

まだまだ続くよ時空を越えて、Angelicaです^_^(ーー)^_。
超長文になってしまつと途中でぐだつてしまわないかが心配で()。
…

あと、これまでのHミコアの名字の表記がパーシバルになつていた
のをミコラーに修正しました。
細かいですが、「」連絡までに。
それではどうぞー。

Area3：坑道

『す、じいわ。この洞窟は 新しい発見にあふれてる。』

『見たことも聞いたこともない生物。この星で これまで存在を知られていない生物。』

『原生生物の亜種というか、突然変異したものによつてひも思える。』

『政府が ラグオル生態系の情報を隠蔽していたってこと?』

『だとしたら なぜそんなことを?』



『思えば、バイオニアーには おかしなことがいくつかあった。』

『あたしがたまたま見たデータでは、記録されている総人員数と物資の消費量がかみ合つてなかつた。』

『つまり、IDを持つていない人間が 少なからず いるつてこと?』

『なんで?どんな目的で?』

『ドキドキしてゐる。怖さと興奮が ないまぜになつた この感情ー』

『科学者としての探求心?』

『それとも、ハンターとして未知の敵に挑む 高揚感?』

『脚が 自分の脚じゃないみたい。…でも、確実に向かつてゐる。』

『もつと 地下深くへ…何かに 導かれるようだ』

『そもそも これだけ環境が整つた惑星に 知的生命体がないのが
不思議だった。』

『でも 見て このモニコメントー森にあつたのと 同じー』

『あれは やはり 我々が建てたものじゃなかつた。やつぱり
先文明はあつたんだろうつか?』

『でも、森のアレ以外 惑星表面にその痕跡はなかったように思える。』

『先文明があつたならそれも おかしい話…』

『「」の文字 解読できるかな。手元には 貧弱なツールしかないけど…』

——地下、大下水道：sideマリー、M、ミスラ

メッセージから得られる情報の質は、地上にあつたものとそれほど変わらなかつた。

現行政府への猜疑心と、彼女個人の興味。
……それと、この惑星にいる何かへの推測。

ただ一つ収穫があつたものといえば、先文明の無かつたであつてこの惑星にどこの文明の手が入つているという事実。

何かに心を締めあげられるような感覚は消えないまま、再生は終わつた。

マリー「…モニメントの近くにあつたので最後、かな？」
ヒロア「うん、そう。でも…んー、何か引っかかるんだよなあ…」

珍しげ、というわけでもないが。
H//コアが妙に神妙な顔をする。

ナギサ「どうした？」

H//コア「いや、ええと……はつきり言える訳じゃないんだけどね……」

ナギサ「へ珍しこな、歯切れ悪くてH//コアは
マリー「わざと雨が降るんだよ」

H//コア「何よーーあたしが歯切れ悪くひき腰につてのーー？」

H//コアが神妙な面もちから一転、こつものように表情豊かになる。
うん、やつぱつH//リリアは「うじやなき」。

マリー「あはは、『冗談冗談。ゆっくりでいいからね、話してみてよ』
ナギサ「悪いのは歯切れだけで、H//コアが悪いことは言ひたくないぞ？」

マリーの腰ひときおつだ、ゆっくりで良から続けてほ

しー

H//コア「二人揃って全く……」

ぶつくわ腰こながらも説明を始めてしまったのはH//コアの悪いところ
だと思つ。多分。

H//コア「ええっと、ココのメッセージの中じゃ、『何かに導か
れる

マリー「ああ、『奥深くへへ』、つてやつだね
よつて』つてあつたじやない？」

Hミコア「そりゃ。それも、最初にこの惑星に来たときナギサも同じ

」と言つてなかつたっけ?」

ナギサ「ああ、確かに私も引っ張られるような感覚はあつたな」

Hミコア「でね?ナギサのその感覚つて…あたしが実際に見た訳じやなくて

こいつからの伝聞なんだかどさ?」

といふ、Hミリアが私を指す。…ヒトを指せしむやいけないのに。でもあえてつっこむような雰囲気でもないし、じとじとした視線を送る。

Hミコア「ナギサ、欠片を探すときもその感覚あてにしてたよね?」
ナギサ「…ああ、まさにその通りだ。そして、地上で感じたのも…

非常に少しではあるが、あの感覚に似ていたような氣もする」

マリー「…嫌あな予感がいっぱいだねえ」

Hミコア「できれば外れて欲しいねえ…」

ナギサ「だ、だがアレは滅ぼしたはずじゃ…」

Hミコア「ワインアルはこいつつてた。『これは滅ぼすことのできないお前を

永久に閉じこめておくための棺だ』、ってね?」

マリー「…うん、ハイダの言つとおり万全の装備をしてきておいて本当に

よかつたつて今心から思つてる…」

Hミコア「ま、一つの仮説にすぎないんだけど。…あんまり気にし

ないでね？」

ナギサ「何、もう一度対峙する」とがあつたらまた打ち負かせばいいだけだ」

マリー「おお、ナイスポジティブシンキング！」

エミコア「そゆこと…あれ？いかだが減速してきたね」

マリー「あそこには桟橋みたいなのがあるよ！着いたかな？」

わっしが乗り込んできた方向とは逆の岸に、いかだの高さの桟橋があるのを発見。

やっと降りられるのか、と腰を上げようとしたらそのとき。

ナギサ「やうらじいな…な、何だっ！？」

エミコア「うわあーー、いきなり叫ばないでよナギサ！心臓に悪い

…」

ナギサがいきなり叫び、武器を構えて戦闘態勢に。

何事かと一応武器を構えてはみるものの、敵の生物の気配はない。

マリー「…何も、いないみたい？」

ナギサ「いや、さっきまさにディー・ロレイほどの大生きの影が水面に浮かんで

また沈んでいったのが見えたのだが…」

エミコア「…またボス級っ？」

エミコアが杖を構えて、器用なことに静かに叫ぶ。

…水面にナギサが見たという影が浮かんでこないまま、いかだが桟橋に着いた。

嵐の前の静けさとでも言おうか、異様な静寂が空間を支配していた。

「マリー、ゆっくり降りて、一人ずつあの扉まで進もう。で、最初の一人が

扉が開くかどうかをチェックして。開いたら、そのまま中に。

開かなかつたら…」

ナギサ「最後の一人が来るのを待つて、扉を破壊して突破だな。了解した」

桟橋から扉までは長めに見積もつて15メートルくらいだろうか。走れば何て事無い距離だが、走った音で見つかってしまっては元も子もない。

エミリア「おつけー…最初あたし降りるね？」

マリー「じゃ私最後に行くよ」

ナギサ「私は2番目か。エミリア、いつでも良いぞ」

おつけ、と声になつていない声でエミリアが返事をする。どこかで、魚が跳ねるような音がした。

マリー「…やばい、かも」

エミリアが扉までたどり着き、ロックの有無を確かめる。ジェスチャーは…両手で大きな丸。

ドアに鍵はかかっていない。

ナギサ「続く。…貴女も、できれば速く来た方がいいと思つ
マリー「同感。…でも、順番は順番。速く！」

足音はなく、滑るよつとナギサがH//コトのところまで行き着く。
…そのまま何事もありませよつて願つて一步を踏み出す。

…現実は、いつだって非情なものだ。

桟橋に片足をかけたところで、乗員といつ重りを無くしたいかだが
少し揺れ、水面に波が走る。

チャポン、とこつ氣の抜けた音と同時に、遠くから船が近づいて
くるよつな音。

顔から血の気が引くのがわかつた気がする。

…キヤスト相応の色白になつてゐるだらうな、今。

水の中では音の波は空氣中よつと倍速へさざるんです、なんてハイ
ダが
言つていたよつな気がする。

…船と違ひのせ、エンジン音がないことひとつ。
…船

「マリー 「……走つてえ！！」

叫び、自らも走り出す。

さばり、と何かが飛び出す音を冷静に聞きながら、頭の中は大混乱。

脚がもつれそうになる。

脚がもつれたら終わり。

極度の緊張、死の恐怖。

私の脚は、…ちゃんと仕事をしてくれた。

「ミリア 「マリー！ ヘッドスライディングしてー！」

返事をする余裕なんてない。

おそらく『何か』の攻撃が私の頭を狙つてきている。

ほとんど反射で、私は扉の中へ頭から滑り込む。

後頭部を何か細長い物がかする。

起きあがる前に、ナギサが私を引っ張り奥へ引きずり込んだ。それとほぼ同時に、ミリアがドアを閉める。

…パネルをいじっているところをみると、恐らく手動でしか開かないように設定しているのだらう。

何はともあれ、一難は去つた。

「マリー 「あ、ありがとう」一人とも…」

ナギサ「いや、礼には及ばないさ。一番危ないとこを貴女に
やらせてしまつたからな」

H//コア「やめじよめじよ」と。ほり、立てる?」

H//コアが手を貸してくれる。

その手を取つて、何とか立ち上がる。

マリー「あはは、膝笑つてゐや…でもまあ、大丈夫。進めるよ」
ナギサ「無理はしないでほし…まあ、大丈夫といつなら進むが」

H//コア「キツくなつたらいいなよっじや、進もうー。」

マリー「うんー。」

——坑道エリア：sideマリー、M、ミスラ

緊張が解け、襲いくる疲労感との戦いになる。

アドレナリンが分泌されるとこ今までヒトに近こと、いつこう時に
辛い。

ナギサを先頭に、H//マリア、私と続く。

黙々と歩いているだけだと、何だか余計に疲れる気がする…。

何か目的を、と探したら田舎のまやはり「せんの残していった
メッセージカプセル。

それらを回収し、二人から少し離れて」つそり置き土産。
：役に立つかは、わからないけれど。

「マリー「それにしても、代わり映え無いねえ…」

先ほどのモンスターから逃げて転がり込んだこの場所は、研究所の
よつ。

無機質な通路と部屋を交互に見ていくと、同じ所を回っているかの
よつな
錯覚に陥る。

エミリア「大丈夫大丈夫！地図つけながら来てるけど、まだ迷つて
ないよ」

ナギサ「何だ、てっきり私はもつ迷つているものかと思つていたぞ

マリー「ナギサ、そいつときは言おうね…？」

ナギサ「ああ、次から話すわ」

あっけらかんとするナギサに、エミリアと顔を見合させ、ため息。
てこうか、それなのにナギサ先頭歩いてたの…？

ナギサ「というわけで私は道がわからないんだ。エミリア、案内し
てくれ

エミリア「はいはい…じゃあこの部屋から向こうに行つてみよつー。
L字の角に、見覚えのある…

エミリア「あー…またあのモードメントがあるよー。」

「マリー「これで合計三つ田か… そろそろ全文解読できるかな?」

私が言い切るより前に、H//コアが柱に駆け寄る。

ナギサ「ああ。私にはさっぱりだ。難しことは任せた」

H//コア「ええと、この辺を…」

会話が成り立つてないなあ、なんて考へていると。例によつて例のじとく、モニメントが光に包まれる。

H//コア「おー! 今回で全部解読できやつ…」

そうこうと、H//コアがなにやらしゃがんでぶつぶつ言いだした。
…しゃがんだのに、気付かないのかなあ?

マリー「… H//コアの足下にあるメッセージカプセルには突っ込ま
ない方が

いいかな?」

ナギサ「H//リアが蝶りきつたら拾い上げよう。邪魔をしては悪い
からな」

マリー「それもそうだね」

そうじて待つこと数分。

H//コア「読めたあー!」

ガバッ、と擬音付きでH//リアが立ち上がる。

マリー「おめでとう! それで、何て書いてあるの?」

Hミコア「ふふーん、えっとね?『光ありて　影を成し　対ありて
対無く

不在の在　かかる姿の　転生の　宴　無限なる　律
Hに　印
結びなさん　ムウト　ティッシュ　ポウム…』って書
いてある。

んー、どうこいつ意味なのかな?」

ナギサ「それなら印とは多分、この柱のことではないだろうか?

このマークとか、いかにもそれらしいのでは?」

マリー「うーん…わかんないね。エミコア、リルさんのメッセージ
カプセル

再生してみる?」

Hミコア「そだね。何かヒントあるかもだし。…道中拾つてきたのもついでに

聞いちゃいますか!」

『Hのあたり…明らかに　手が入っている。あたしらの文明の。』

『何のために　こんな地下まで　穴を　掘ったんだろ。』

『そいいえば、地上のものと別に地下工場を建設する予定があつたはず。

そう 聞いたことがある。』

『それと 何か関係があるのだろうか。

その工場で新しく開発されたメカとか。』

『それとも、地下工場建設といって 何か 別のことをしていた?
…それは 考え過ぎかな?』

『いや、情報操作なんて 無い話じゃない。』

『結局 あたしらは 何も聞かされちゃ いない。』

『政府筋は あたしらハントーストにキビシイしなあ。
利用するときは 利用するべせじ。』

『これで 三つ目。複数で 何かの意味を 成すのかなあ。』

『光…影…対あり…存在…無限…律…印…』

『いくつかの単語の意味は絞れても、文脈がつかめるまでは至らな
い。

「やしきー！」

マリー「…ヒントじこヒントもなかつたね？」

H//コア「うん…」の辺の端末に何か情報無いかなあ？

ナギサ「ああ、ここは見た田研究所だからあるかもしれないな
マリー「じゃ、端末探しに行つてみる？」

H//コア「頼めるなり。」

ナギサ「道すがら、ここに来るまでも幾つかあつたしな。ならば、
先に

進んでいなければ見つかるのではないか？

マリー「やうだね。じゃあ、さつとか進みましようか？」

H//コア「おー！」

と、威勢良く歩きだしたはいいものの。
さすが研究所、次の部屋に端末はあった。

H//コア「なんか拍子抜けだなあ…」

マリー「あはは、まあ探し回つてくれたになるよつはここなんじゅ

ない？

ナギサ「ああ、マリーの言つとおりだ。今まだ遭遇していないから良いが、

もし警備のマシナリーなどに見つかったら面倒だからな」

Hミコア「それもそつか。……うーん、何かここには生物学的な研究所っぽくて

めぼしい情報はないなあ……おっ何だろう、これ

何だろう、って、何だろう。

何か、とてもなく嫌な予感がする。

マリー「あ、あの、Hミコア？よくわかんないキーは押さない方が

…」

Hミコア「…もひ押しちゃったよ…」

と、その時。

壁に備え付けてあった赤色灯が、けたたましいサイレンとともに回りだした。

『A.I.ボル＝オプト、ハッキング検知。侵入者ヲ、排除シマス。非戦闘員ハ、

退避シテ下サイ。繰リ返シマス…』

マリー「…Hミコア、何しあがつてゐるのよーー！」

Hミコア「じめんつてえーーー！」

ナギサ「はは、凄まじい量だな。これは……」

「逃げるが勝ちつー！」

珍しく3人できれいにハモる。

けれどそんなことに感心している暇は、残念ながら、ない。

マリー「ちゅちゅちゅ、ギャランゾがこんなにこぼして……嘘でしょー？」

HIIコア「後ろからはシノワがいっぱこだよーー速く速くーー！」

ナギサ「ここまで来ると壮观だな……！」

マリー「ナギサ感心してないでほひーーちーー！」

何だか逃げてばっかり。

そんなことを思いながら右へ、左へ。通路を、部屋を、駆け抜ける。

すると、HIIリアがふと部屋の隅を指さし、叫んだ。

HIIコア「あの転送装置使えないかなーー？」

見ると、確かに転送装置らしきものがある。

・勝手が分からぬけれど、どうせ走り続けるなら少しでも遠くへー

マリー「試してみようー行ー！」

ナギサ「了解した！」

赤い光を放つ転送装置に駆け込み、どうにか起動する。

追いかけてきているシノワのうち1体が飛びかかつってきたのが見え
て…

景色は、急転した。

Area3・坑道（後書き）

ながつー！ですわやつぱつ…（。ー。：）

ですが自分にできる最短ルートがこれなものでどうか、容赦願います（汗

なにかご指摘やご感想等ありましたら一言ください嬉しいです！
ではでは、^__^__^

Area 4：遺跡（前書き）

改めましてこんばんは、Angelicaです^_^(ーー)^_

いやあ、もうこの時期は精神がすり減つてすり減つて
勉強なんて大嫌いっ！(ー；ー；ー)

さて、そろそろ現実から逃避行を繰り広げながらキーボード叩くの
でよければおつきあい下せー！

それではどうぞー！

Area 4：遺跡

—— 遺跡入口 : side マリー , M , ミスラ

マリー 「う…酔った…」

エミリア 「ちょ…何でこんなにぐいぐいするの…？」

ナギサ 「…だめだ、目が回る…」

グラーのそれとは違う転送の浮遊感が私たちの平衡感覚を奪う。いつもの転送をフリー フォールとするなら、この感覚はさながら「ヒーハーハーハー」カップのよう。

…つまり、とつても目が回る。

エミリア 「ちょ、ちょっとタンマ…」

マリー 「大丈夫、私たちも動けないから…」

ナギサ 「そりゃあ、この星に来てから転送装置に乗るのは初めてだつたな…次はないように願いたいものだが…」

エミリア 「本当に。柄にもなく心からそう想う

マリー 「…ふう、私はもう大丈夫かな。二人は？」

ナギサ 「なに、これくらいどうということはない。慣れたぞ」

エミリア 「え…ナギサ、順応早いつて…」

よくよく考えればエミリアは近頃研究ばかりで体が鈍っているの

かもしだれないかな、なんて思つたけれど。

そういえば祭りの警護とか星靈祭とか出たじやん、と思つ直し。
衰えをからかうのは無しにした。

マリー「もうちょっと待とうか?」

H//コア「いやあですがにそこまでは…うん、もう大丈夫。よーし、
じゅあちゅあちゅあと『』と探し出しちゃうか…」

おー、と続いた声は私だけ。

…恥ずかしくなつて拳を振りあげるのほ途中で止まつた。

そして、続かなかつたナギサがおずおずと口を開いた。

ナギサ「あー、H//リア? その、實に言つこへいのだが…ええと。
『』の…何だらう遺跡だらうか? 入るのか? …

いや、
どうしても入らなければならぬのか?」

自慢ではないけれど私は人の心情の動きには聰い方だと思つ。
ナギサが入りたがらない理由は…焦りと、怯え。

ナギサらしくない、と茶化して強引に入るのは簡単だけれど。
あのナギサが引いているという事は、確実に何かがある。

マリー「ナギサ…何か感じるの?」

ナギサ「紛れもない、ヤツだ。ヤツが、この場所の奥深くにいる

H//コア「…ダークファルス?」

ナギサが、無言でこくんとうなずく。

マリー「…中からリコさんだけ連れて帰つて来るじゃ、ダメかな？」
ナギサ「事態は、常に最悪を想定しておくものだろ？」「..」

ナギサの一言が全てを語つていた。

つまり、入つたら何らかの形でダークファルスと接触がある。必ず。
Hミコア「…それでも、中に入らなきゃあたしたちはグラールに帰れ
ないかもしない。あたしは、入るべきだと思う」「..」

ナギサは？と、Hミリアが目で訴える。

それに対し、ナギサは目を伏せがちに言つた。

ナギサ「正直なところ、私は入りたくはないんだ。今思い出しても
体の中を這われ、内側から闇に食われていくような
絶望感。」

ヤツは必ず素体を欲する。一度体内にヤツを飼つた

私は「..」

言葉は、続かなかった。

自分の腕を抱き寄せ、小さく震えているナギサは久しぶりに見た。

それほどまで、彼女の心には大きな傷があるのだろう。
決断は、私に委ねられた。

マリー「..」

適当に決められる問題じやない。

マリー「…私は」

ナギサとHニア、両方を視界に捉え、言ひ。

マリー「私は行くべきだと思ひ。理由は一つじゃないけれど…でも。多分ここで行かなきゃダメなんだと思ひ。…ナギサ、素体の

条件つて何?」

ナギサ「一番は優秀であること、だ。分野は問わない。頭脳、体力…私は戦闘能力において、だつた」

Hニア「…ちょっと待つて?」

記憶を引っ張り出すような仕草をして、続ける。

Hニア「学者で、あの戦闘能力で、英雄視されるほどで…条件、クリアしちゃつてない?」

ナギサ「いや、まだだ」

ナギサが即答する。

ナギサ「彼女が希望を持つて行動してたら素体とはなり得ない。外からヤツが入るには絶望感、悲壮感、とにかく負の感情が

必要不可欠なんだ。だからワイナールは最後に欠片を使って

強引にヤツを…」

負の感情、と言わふと、思い当たる。

…メッセージの一節。

マリー「…『この惑星に降りて7年、せつかくみんなでゼロから環境を

整えてきたのに…』って、最初の方で言っていたよね

?そもそも

リーフさんが本格的に調査を始めたきっかけがここからだとした

ら、最初から希望なんてなくて、疑心暗鬼のままに探索してる

ようにしか思えないんだけど…』

エミリア「『政府筋はあたしらハンターズにキビシイしな。利用する

ときは利用するくせにや。』っていつのも、そうだよね?」

ナギサ「…なんて、事だ」

ナギサが絶句する。

…状況は、思つてゐるよりもマズいかもしねえ。

マリー「私は、リコさんを助けに行くべきだと想う」

エミリア「あんたが行くなら、あたしも行くよ…まさか一人で行かせる

わけないでしょー!」

ふと、ナギサの方を見る。

マリー「…ナギサ、辛いな…」

ナギサ「いや、行く。頼む、行かせてほしい。もう私は、私のよう

な…

そして、彼のよつたな被害者は出したくないんだ

静かな、それでいて芯のある声。

例えるなら、青い炎のよつたな。…それは。

マリー「ナギサらしい、ね。行こう!」

入口は開かれていた。

まるで私たちを飲み込まんとするかのよつた。

ナギサ「ああ!」

H//コア「うん!」

それでも、私たちは突き進んでいく。

：一人では、ないから。

――遺跡内部、ブロック1・side H//コア・H//バー

威勢良く駆け込んだあたしたちを待っていたものは、まるで
SEEEDの浄化中、といつよつたな部屋だった。

残っている死骸はなく、血痕のみ。

しかも、明らかに既存の生命体のものじや、ない。

今度は調べたいなんて言わない。

…もしかしたら、一人の命がかかっているから。

終始無言で走つていると、マリーがいきなり立ち止まつた。

「…どうしたの？」

マリー「声が…声がするの。……」

唐突に、マリーが閉じられた扉に向かつて走り出す。

ナギサ「何を…？」

次の瞬間、いきなり閉じられていたドアが開いた。

ロックを示す赤いマークがアンロックを示す青に変わつている。

「…声つて、誰のよー？」

半ばやけくそになり、マリーの後を追う。

…じつやう、科学以外の力が働いているらしい事はわかつた。

マリー「…リコさんのカプセル…」

やつと追いついた、と一息ついてみると、マリーがカプセルを
探し当てた。

おもむろに、再生が始まる。

『父さん…会いたい。』

『思えば、親不孝ばかりしてきたなあ。今頃、何してるんだろ。』

『……ここにトラップもかかると 身動き とれないわ。』

『ひとりが うらめしいわね。』

マリー 「ヤバい、よね？」

エミコア 「結構、ね」

ナギサ 「…向こうにもあるぞ、行ってみよう…」

ナギサの一聲に反射で駆け出す。

このまま辿つていけば最短距離でリコの元にいけるはず！

『窓から 遠くが見える…』

『かなり 大きな遺跡のようだ。こんな文明が あつたなんて。』

このカプセルはかなり窓際においてあった。

確かに、遠くにまで見えるこの建造物はかなりの規模だ。

マリー 「…先文明は無かつたんじやなかつたっけ？」

ナギサ 「だがこれはどう見ても遺跡だ。先文明があつたとしか…」

そういうかけたナギサが、ふと動きを止める。

ナギサ「…あれは、何だ？」

ヒミコア「あれって？」

ナギサが、指で示したその方向には。

異常なほど大きい穴があつた。

水脈を貫通してゐるのか、上に続く壁からは所々水が噴き出している。

ヒミコア「…行ってみよう!」

マリー「…うん」

何か胸につっかえるものを感じながら、穴の縁まで駆け寄つていいく。
想像に違わず、そこにはカプセルがおいてあつた。

『この大きな穴は…?』

『なにか すゞいヒネルギーが吹き出したよくな…もしかして…?』

『セントラルドームは これのおかげで…?』

ナギサ「…なんなんだこの穴は…底が見えないぞ…」

ヒミコア「天井も見えない…どれだけ地下深くなのよ…」

マリー「…一人とも、そろそろ…」

「めぐ、今行く。
そつとて私はマニーの元へ駆け寄った。

Area 4・遺跡（後書き）

どうも中途半端ですこません（…）
や、切れが悪いの何の…！

リコちゃんは、登場シーンを遅らせてもうこました。

カプセルの内容の改変が自分の許せません…（…）

また翌日でも更新したいと思つてますのでよろしくお願ひします！
ではでは～

Area 4・遺跡／2（前書き）

夜遅くにこなばんは、Angelicaです^_^(ーー)^\n...○○をやつていたらこんな時間に...！

今回は、ストーリー的に大きくは進みませんが...

とりあえずとかさか綴りますんでおつきあいトセー...

それではじりモー！

Area 4：遺跡／2

——遺跡最奥部：sideリコ＝タイレル

リコ「この単純かつ入り組んでる構造、線対称な外見、…動力部。
…もしかしてここって…」

誰とも無く呟き、自己完結する。
隣に人がいないから、独り言。

…あたしはいつも、独り言で完結させている。
仲間がほしい、とはちょっとは思つた。

でも、そんなの本当にほんのちょっと。
地下に潜る度強くなる敵に、心が挫けそうになつてゐただけ。

あたしには仲間と呼べる奴らなんていない。
…考えると、少しだけ胸が苦しいけれど。

でも、あたしはいつでも一人で成し遂げてきた。
だから、今回だつて一人で大丈夫。

自然と重くなる足を軽く叩き、歩く速度を上げる。
叩くために振るつた手が、すでにもう疲労の限界なのを感じる。

思えばもう何体原生生物紛いの敵を切つただろう。
…数えるのは洞窟で一百を越えたあたりからやめていい。

リコ「……あつた」

探していたのはここに備え付けてある端末。

…そう、端末なんてものがある時点では過去の遺跡ではないのだ。

リコ「ええと、新しい情報は仕入れられるかなあつと…」

手元の端末を無作為にいじる。

どうせ、古代の文字で読めないのでからううのは勘に頼るに限りある。

そして、見覚えのない文字列を見つけたら翻訳を試みる。

…手元の貧弱なツールじゃ、まともな解析なんて出来やしないけど。

リコ「…やっぱ」

新たに得られた情報は、想像するに難くないものだった。

リコ「ラグオルに先文明なんて無かつたんだ…」

この遺跡の本当の姿は。

宇宙船だ。

巨大な、古代に建造された宇宙船。
しかも内部に「丁寧に封印がされていた。

何を閉じこめていたのか、きっとあたしらはそれを解放してしまった。

何かを封じ込める、まるで棺のような宇宙船。

ムウト、ディッシュ、ポウム。

思えば今までにあった三つのモードメント。

あれらこそが、この宇宙船の扉を開ける鍵だったのかもしれない。

…一つの事柄がわかると、連鎖的に次々と推測が出来る。

リコ「…くそ」

一段落ついて気が抜けたのか、膝が折れそうになる。

反射で耐えて立ち続けようとすると、足が立つのを拒否している。

リコ「ちよつとだけなら、いいよね…」

せめて顔から倒れるのだけは嫌だ。

そう思った私は何とか体を捻り、横向きに地面に倒れる。

リコ「師匠…本当に、死んじやつたんですか…？」

一度気が緩むと、もうダメだ。

押さえつけていた感情が止まらなくなる。

リコ「寂しいなあ…こんなところで独りで死にたくない…な…」

負の感情がほとばしる。

…弱い心は、闇を呼ぶと師匠に教わったが。

なるほどじうじうとか、とたつた今理解した。

壁際に倒れたあたしの視界には、敵の姿しか見えないほどに。

音もなく」こつらはやつてくるのだ。

「……ああ、だめだ。動くな、数えられない。

焦りはなく、ただ静かな心があった。

……のだが。

「…………」

心の静寂は、ヒトのよひな、機械のよひなどいつともとじれる声こ
一瞬でかき消された。

――五分前、遺跡・シティココア・リバリー

「マリー、ヒリア、何か嫌な予感がする

歩いていると唐突に、マリーがあたしに言つてきた。
それはあまりにも唐突で、思わず間抜けな問いを返してしまつ。

エミコア「具体的に言える?」

マリー「…何かが、手遅れになりそうだ」

変わらず的を射ない答えを補足するかのようこ、ナギサが続ける。

ナギサ「壁や床に飛び散っている血痕の後が減つていて。…倒される頭数が減つているところだと。リコも、体力の限界が近い

のかかもしれない」

エミコア「とこうと…早く追いつかないところが危なって」とへ

控えめに、けれどもはつきりとマリーがつなずく。
考える時間は要らなかつた。

エミコア「それじゃ、道中の情報源は全無視で…ところの水流を最優先

しょつー異論はー?」

ナギサ「ない。早く行こう」

マリー「私もなーよ。…走るつー

目指す扉は部屋の対角線上。

あたしたちは、各自の全力で進むことになつた。

まあ、一番遅いのは当然あたしなんだけど。

…あたしの田の前には、ナギサ。

もつすでにあたしたちとの差を引き離していくのがマリー。

あんなに必死なマリーは、今までに一回しか見たことがない。

…一回とも、世界を救つたときだ。

H//コア「マリーがあのモードに入つたら追いつけないよね…」
ナギサ「…私もあれだけ速くなつてみたいものだが」

H//コア「いやいや無理無理」

ナギサ「何、その程度は解つていいさ」

何せあの速さは短距離の世界記録保持者並に速い。

一回計つたのだが、スピードガンが表示されるレベルだった。

…あたしたちは一人で、かつ出来るだけ速くどこにいるのか解らない
リ」「の元へ向かつていった。

——遺跡最奥部：sideマリー，M，ミスラ

風のように駆け抜ける、とはいえるここまでスマーズでもない。
なぜならドアが開くのに時間かかるから。

早く開いて、ヒドアの前で念じていると。
…見したことのないモンスターたちが『何か』を壁際に包围している
部屋
に当たつた。

マリー「…」

モンスターがいて、侵入者の私に気を取られずに何かの方を向いている。

それだけで、答えは出た。

マリー「ツ……はあああああ――――――」

携えた剣影を鞘から抜き放つ。

抜き放つ際に鞘の中で刀身を加速させ、居合に斬りを繰り出す。上半身が下半身に別れを告げ、空中に霧散するモンスター。同胞が殺されたことでやつと氣づいたのか、他のモンスター達も皆こちらに向き直った。

マリー「やあああああ――」

剣影のグリップを逆手に持ち替え、敵陣の中心を突破する。壁際、最初に奴らが向いていたところまで歩みを進めると、赤髪の女性が

こちらを虚ろな目で見ながら倒れている。

マリー「リコさん――」

リコ「あんた……誰……？」

なるほどごもっとも。

だが今はそんなことを話している時間じゃない。

マリー「じがない傭兵です！そんなことよつてひづくー！」

私は言つなりつ「やんを半ば担ぐよつて肩を貸し、たつた今きた道

を戻る。

幸い、まだモンスターの間の道はあいている。

そこを突つ切り、部屋の外まで一気に退避する。

その時、やつとH//リアとナギサが合流しててくれた。

マリー「『めん、先行っちゃって…』

H//リア「間に合わないより数千倍マシ。気にしないよ?」

ナギサ「H//リアに回感だ」

二人とも優しいね、といつのば声には出さずにおく。
…ふと、肩のリコさんの息づかいが変わったことに気づいた。

マリー「…リコさん?」

声をかけてみるが、反応がない。

手遅れだったの?嘘、そんなのつて…

そう思つたところで、H//リアが言つた。

H//リア「…よべ寝てるねえ。よっぽど疲れてたのかな?」

マリー「え?ね、寝てる…?」

ナギサ「ああ、この息づかいは寝息だな。…ぐっすり寝ていの」

マリー「ええええ…」

H//リア「…とりあえず、起きるまで待とつか?」

ナギサ「ああ、やつしよつ」

マリー「私の急いだ意味つて…」

このあと、何故か三人を同時に膝枕する事にならうとは、私はまだ思い至っていなかつたのだった。

Area 4・遺跡／2（後書き）

「今回も中途半端ですすすすみません（———：）」

正直終わる見込みが立ちません（。 。 ；）

次回はいよいよ奴が…？！

ご意見、ご感想などよろしくお願ひします

ではでは

Area 4・遺跡／3（前書き）

「なんばんは、
こんなにあはせ、

おはよひいじわらこます。 Andanteです^_^(—^_)

また今回も引きの切れが悪い…
いや、ある意味いいのかな…？

戦闘に入っちゃうとなんだか文字数があっせんじく増えそうなんで

(汗

とまあ、どうかおつきあこぐださこー！

それでせびりやー！

Area 4：遺跡／3

——遺跡最奥部：sideマリー，M，ミスラ

案の定、と言つところだらうか。

何故か眠りに落ちてしまつたり「口を硬い床に寝かせておく訳にもいかず、結局はまた私の膝枕。

仕方なく右膝で寝かしつけていると、ナギサがそもそも当然かのように左膝に。

その様子を見ていたヒリコアが、あわつことか正面から膝の間に仰向けて。

…「Jの子達には恥じらいがないのかな、私はちょっと…いや、結構恥ずかしいん

だけど…？

一応キャストだし人工皮膚の奥は金属だから硬いと思つんだけどなあ…

…ヒリコアかナギサに代わつてもうおつかとも考えたのだけど。

「あたし（私）が寝れないじゃん（じゃないか）」とにべもなく…私は正座でこはれはいつたい何の苦行だろ、と考えていたら。

リコさんの瞼がかすかに動いた、気がした。

マーー「…リコさん？」

声をかけてみる。

リコ「…う…ん…?」

マリー「よかつた、気がつきましたか?」

「がばつ、と立ちあがめりつとするのを緩やかに制して、座らせる。
あれ?何だかデジャヴ…

リコ「ちよ、あ、え…んんん?」

リコさんが端正な顔をゆがめて頭の上に『?』を何個も飛ばす。
リコさんが起きたことに気づいたのか、二人がむくつ、と起きる。

Hミコア「おはよつ…軽く寝てた…」

ナギサ「おはよつHミコアとマリー…ああ、リコもか。おはよつ」

リコ「え?ああ、おはよつ…って、お前ら誰だ?ハンターズか?
マリー「…あの、ハンターズって、何ですか?」

リコ「え?」

マリー「え?」

思えば、私たちこの星の人会つのはじめてじゃん…
しどろもどろになりながら何とか説明をしようとするヒミコアが
その役を置つて出でくれた。

Hミコア「ええと、まずあなたはリコ=タイルで合つてるかな?
リコ「え、ああ。あたしがリコだが…何故あたしのことを知つてゐ
る?」

ヒミツア「あなたが置いてきたカプセルを聞いたの。それで、追つてきた」

リコ「ああ、そうか……そういえばあれはそのために置いてきたんだつた……

あれ？おー、お前はあたし見たことがあるやつへたしか洞窟に入る前に……」

お前、と指されたのはヒミツアではなく私だつた。

マリー「はー、助けてもらいました。あ、その筋ほどつま…」

リコ「ああこわい…」

お互に正座でふかぶか頭を下げる。

…何やつてんだつら、こんなことひどい。なんていじめ、向こうせ感じていぬだらうと思ひ。

ヒミツア「ほらほら変な挨拶はいいから…」

ナギサ「ああ、それよりも今はそんなことをしている場合ではないだらう？」

マリー「やうだつたやうだつた…」

リコ「…いや、質問に答えてほしこのはあたしなんだが。お前、一体何者だ？」

見たことのない纖維の服装、見たことのない武器。それらは…？」

…はじから説明すればいいだらうか、ヒミツアに助けを求める。任せっきりでジエスチャーが帰ってきた。

エミリア「えっと、端的に事実のみを言つとね。あたしたち、この世界の住人

じゃないのよ」

リコ「…」めん、頭は大丈夫か?「

エミリア「絶対言つと思つたよもう!」

ナギサ「…まあ、怪しいセリフではあるな

リコ「いや、すまない…続けてくれ。もう何があつても驚かないと思つ」

エミリア「いいや、絶対驚くな。私たちが何でここにいるかというと…」

エミリアが簡潔に事情を説明する。

私たちはグラール太陽系からきたこと。そこでは資源の枯渇に貧窮しており、

その解決策として亜空間航行を発明し、実際に使用しようとして実験の最中に

トラブルでここにきたこと。

船が原因不明の故障で寄る辺がないこと。

現地の人々にコンタクトをとろうとして辺りを探すが、あつたのはリコさんの

メッセージカプセルだけだったこと。

色々あつたようで、まとめてしまえばつまりはそれだけだった。

リコ「…にわかには信じがたい、が。嘘をつく理由もない、か。わかつた。

あたしはそれを信じるよ

HIIコア「ありがと。ええと、それで…」HIIはこの先に進むつも
り?」

リコ「ああ、そうだよ。あたしは隠されている真実を暴かなければ
ない。

たとえ、自己満足に終わったとしてもね」

ナギサ「…そこまであなたを動かすものは何だ?」

リコ「正しいことを知りたいと思うことに理由が要るかい?」

マリー「…でも、全て独りでやらなくとも…」

リコ「あたしだって…いや、何でもない。ともかく、あたしは先に
進む。

お前らは…」

HIIコア「こっちから来たから、奥に進むならあっちだね」

リコの言葉を最後まで言わせないよ!HIIコアが割り込む。
…頑なになつていて人の心を柔らかくするには先手をとる。これ重
要。

リコ「…は?解つてるのは?これから奥は危険度も増すだろ?。あ
たしでも

お前らの安全は保障できないんだぞ?」

マリー「ああ、戦闘能力に関しては問題ないかも…」です

ナギサ「何故敬語なんだ…」

マリー「だ、だつて…」

リコさんの眉間にしわが寄る。
…何だか不穏な雰囲気。

リコ「問題ない?」のあたしでも苦戦する敵だぞ~デラゴンで苦戦してたお前

らが太刀打ちできるとは思えない!」

マリー「ん~、とですね。あれは…以前戦つたこと也有っての氣の緩みとでも

言い訳しましょうか…」

リコ「以前!?」

エミコア「面白い…でも、もつ氣の緩みはないから大丈夫!」

リコ「…いや、でも」

ナギサ「貴方は介抱してもらつた恩を返さないつもりか?それはいけないな」

リコ「…わかつたよ。その代わり、自分の身は自分で守る」とが条件だ

遂にリコさんの方が折れた。

…こんなでも傭兵だから、自分の他にも田を配る余裕はあるんだけどな…

マリー「それは大丈夫、です。じゃあ行きましょうか?」

今度は急いで走ることなく、私たちは遺跡のさらに奥へと進んでいった。

正直、こいつらを侮っていたかも知れないと思つた。
この宇宙船の動力室らしい広い部屋に入ると、これでもかといふく
らいの
敵が現れた。…のだけれど。

カオスソーサラーのコアを的確に破壊し無力化し、カオスプリンガ
ーの突進は
受け流しすぐに反撃に転ずる。

ダークベルラの腕を弾き、接近して背後をとる。
全て、戦いになれている者の動きだった。

エミリア「…リコ？大丈夫？ボーッとしてるけど」
リコ「あ、ああ。大丈夫。少し考え方をしていて」

ナギサ「何だ、私たちの実力に畳然としているのかと思つたのだが」
マリー「いや、さすがにそこまでではないと思つんだけどなあ…」

ナギサの言つとおりだよ、とはなかなか言えない。
自分と同程度に強い仲間が嬉しいだけだ、とお茶を濁しておく。

リコ「…さて、生物のサンプルはゲットできたが。これはちょっと…
何というか。グロいな」

エミリア「单刀直入に言つねえ…でもまあ、グロいよね」

黒だか赤だか紫だか解らないマーブル模様がうごめいているんだ。
これをグロテスクと言わず何を言おう。

リコ「サンプル、情報…おかしい、もつと奥があるはずなんだが」
変異生物には多かれ少なかれ原生生物の原型があるので。
「」の敵にそれはないと言つていい。

…生物と言つより悪意の固まつと戦つてゐる感じだ。
だが、その悪意に不純物が混ざつてゐる。

生命体の細胞。それも、「」は…

リコ「考えたくないが…」「」から、元は人間か…？」

細胞からとれるDNA情報が不自然なぐらい似通つてゐる。
あたしたち人間と、だ。

マリー「SEEED汚染と同じ…やつぱり元凶は…」

ダークファルス。

マリーが呟いたその一言が、あたしの頭を貫いた。

リコ「うあつ…………くつ…！」
ナギサ「」、れは…くう…！」

マリー「リコさん…？」
エミコア「ナギサ…！」

頭が割れる。

何かの思念が入つてくる。

怨み、哀しみ、怒り…

あいつとあらゆる負の感情の波が押し寄せてくる。

ナギサ「く……や、そんな……すでにこの段階まで……？」
リコ「はあ、はあ……ナギサ、この感覚が何だか知ってるのか？」

ナギサ「ああ、嫌と言つぽいな……くつ」

引いては寄せる、感情の波が次第に弱まつていぐ。
落ち着きを取り戻したあたしの耳元、さっきまではなかつた物が見
えた。

リコ「…何だ、あの転送装置は？」
マリー「いつの間に…」

ナギサ「…」の転送装置の先には、ダークファルス自体はいない。
けれど、

なんだか、同じような物がこの先で私たちを呼んで
いる…

エミコア「…行く価値はあると思つけど。でも、いつたら帰つて
これなく

なるかもしれないってことも考へないと…」

エミコアの言い分はもつともだ。
しかし、あたしはあたしで感じている物がある。

リコ「……」の先からだ。あたしを、ずっと呼ぶ声がするんだ。けど同時に、

来てはいけない、とも言われてこりみつな…」

マリー「私はリコさんに任せせる。進もうが進むまいが、結局はある敵を倒せ

なきや私たちは帰れない気がする」

ナギサ「私はこの装置の奥に進みたい。…導かれているなら、従おう。だが

エミリア「正直あたしあざらちでもいいんだけど…でも、この装置の先には

何があるか解らない。慎重になつてもいいかもしないよ

彼女らのコーダー格らじこマリーはあたしに判断をゆだねた。
…なら。

リコ「行こう。」の装置の先に

危険な敵でも、ここつらと一緒に何とかなる。
そう思えたから。

「「「了解!」「」

私たちは未知の領域へと足を踏み入れた。

——貨物運搬用エレベーター

H//コア「う…」

リコ「え、何…？」

問いに答えたのは、三人のうちの誰でもなく。
空から降ってくる異形の物だった。

ナギサ「…見つけた！ あそこだ！」

マリー「…！ あれって…！」

ナギサ「…奴も元はヒトだったモノのようだ。取り込まれてしまつ
たのか…」

怪物が、一声何かを吠える。

聞いたことのない形容しようのない声。

けれどもしかしその声には、私のよく知る響きが混ざっていた。

リコ「うわ、でしょ……？ まさか……」

マリー「…リコさん？」

リコ「師匠…師匠ですか…？」

H//コア「え…？…あこの元のヒトがリコの師匠…？」

怪物は答えない。

答えはしないが、この感覚を忘れるわけがない。

リコ「…あたしの師匠の名はヒースクリフ・フロウウン。政府に公式に死亡を

発表されていた軍の英雄。その死には不可解な点が多くつた…もし、この

姿にされてしまつたがために死亡」として隠蔽されたのだとしたら…！」

マリー「筋は通る、ね。でもそれが本当なら…」

ナギサ「ダークファルスに寄生されてしまった、のか。救う術は…」

この姿から救う術があるのか、とナギサの方を向く。

…ナギサの顔は、伏せられていた。

リコ「うそ、だよね…？ねえ、ナギサ！」

帰つてきた声は、あたしが一番聞きたくなかった声だった。

ナギサ「寄生された人間を救う術は、その肉体を滅ぼすのみ、だ

辛い現実、という生半可なものではなかつた。
仲間もおらず、親にも素つ氣なく当たつてしまつた。

そんなあたしが唯一心を許したヒトが師匠だ。

その師匠を…殺す？あたしが、この手で？

師匠に教わったこの戦い方で？

リコ「…ダメだよ。あたしどきないよ。師匠を殺すなんて…！」

ナギサ「…」のまま放つておくのは貴方の師のためにもならない！」

リコ「師匠は死んだと思ってた。でも怪物として生かされていて、
その

怪物をあたしが殺す？……そんなの、できるわけ……ない……」

視界がにじむ。

あたしにも仲間ができたと思つた矢先にこれだ。

仲間ができたなら過去の拠り所は要らないだろう、と言わんばかり
に。

師匠を殺せ？弟子に？

…世界は、なんて残酷なんだろう。

エミコア「リコ…」
マリー「…」

聞き慣れた音が、私の後ろで聞こえた気がした。

リコ「ここまで独りでがんばってきたけど…結局あたし独りじゃ何も
できやしないんだ！」

大切な人一人救えなくて何が英雄だ笑わせるな！
顔を伏せ、膝を突き、叫ぶ。

リコ「あたしは英雄なんかじゃない…！」

…ふと、背後から。

聞き慣れない男性の声が降つてきた。

? ? ? 「お前は独りじゃない！」

Area 4・遺跡／3（後書き）

嘘だと言つてよバー——イ……

はい、ガンダムは当作品とは全く関係ありませんあしからず。
ハンターズの旦那も兄貴も嬢ちゃんも坊主も……彼らってパイオニア
2の

メンバーなんですよねえ……降りてくるの速いなライ（。 。 ; ）

突っ込んだら負けですね解ります（笑）

さてさてではではまた明日！
お休みなさいー

' , H D O L A , , h a v e t h e . . . (前書き)

更新が遅くなりもも申し訳ないですAngelicaです(。・。)

いや、リアルがいきなり立て込みまして…

受験とか受験とか進路とかバイトとかいろいろ…

書き溜めがたまつて行くばかりでなんと今回1万文字突破してしまいましたくくく

…長いので、しおり機能など使いながら長々と読んでくださりますと嬉しいです

そそ、それでは、じづぞー

, , IDOLA , have the . .

——荷物運搬用エレベーター・sideマリー，M，ミスラ

私は、目の前の光景をそう簡単には信じられなかつた。だつて、今リコさんに話しかけたのは。

リコ「ハンターズ…！？」

増援と呼ぶにふさわしい、見るからに戦闘職種の4人組。

リコ「ビッシュトお前らがここに…？」

問い合わせたのは、ライフルを携えた男性。

レンジャー「俺たちは、今までお前を英雄に祭り上げてお前の力に頼りきつっていた。だが、道中に残されていたメッセージ

が俺たちにお前の抱える不安や悩みを教えてくれた」

不可思議な表情をするリコさん。

「そうだよね、貴方の残したカプセルに入っていた内容はそういう類のモノじゃなかつた。

リコさんが口を開くより前に、唯一の女性が歩み出て言つた。

フォース「貴方はもう独りじゃない。私たちがいる。私たちがあなた

の力になるーだから.....立ち上がってー」

ダブルセイバーを持つた青年が言葉を続ける。

ハンター「そうだーあんたは..英雄は一人じゃないー今この瞬間から、

俺たちとあんたは同じ仲間だ！仲間が集まれば、奇跡は

起こせるんだよー」

リコ「.....」

リコが手の甲で目を拭つて立ち上がる。
そこに、ナギサが声をかけた。

ナギサ「もしかすると、の域を出ない話だが。貴方の師匠の中の、
ダークファルスの細胞だけを取り除くことができれば..

彼を救える可能性は、あるかもしれない」

そこに同調したのはハンターズのうちの一人だった。

ハンター「話は早い、可能性はあるんだろうー？ならその可能性に賭け

ようじやねえか！信じる心で、奇跡つて奴を起こ

そりせー！」

リコさんが返事をする暇は、なかつた。

自分たちの遙か上に鎮座していたはずの敵が急降下してきたのだ。

ハンコア「来るよー氣をつけて！」

各々が自分の得物を構える。

大剣、両剣、大鎌、長銃、片手杖、両手杖。

見事に種類の違う武器が揃う様は圧巻としか言いようがない。
しかしそんな中、私とリコさんだけが構えをとつていなかつた。

リコ「師匠……」

瞳に映つた一瞬の迷い。

けれど、そのすぐ後に宿つた決意の色が、不安を吹き飛ばした。

マリー「リコさん……」

リコ「マリーか……なんだいその目。あたしなら大丈夫。ちょっと、
柄にもなく感動しちゃつたり……何でもないっ！」

ぐるりと、リコさんが皆の方へ向き直つて言つ。

リコ「ありがと。あたし、戦つ。奇跡を起こして……師匠を救う！」

その言葉を待つっていたかのように、オルガ・フロウは雄叫びをあげ
た。

言葉になつてゐるような、しかし聞き取れない何かを叫ぶ。

「私たちには、それが彼の発する救難信号のように感じられた。
ならば全力を尽くそう。私は、エレベーターの外側を落下してくる
敵と

自分との距離を田測で測る。

マリー「……剣は届かないかな……なら」

使う武器は遠距離の物だろう。

私はナノトランサーの中から、ツインハンドガン…バトルストップバーを取り出し構えた。

ほぼ同時にリコさんも赤のセイバーを取り出し、グリップを握りしめていた。

左手には、短銃ガルド。

リコ「やつて…みせるぞ…！」

リコさんが一声大きく叫ぶと、それが合図だったかのように戦闘が開始された。

I—I—, I DOL A, have the immortal
feather

先手を打ったのはオルガフロウだった。

上方から落下しつつこちらに剣を突き立てる。

リコ「回避の時に縁まで行きすぎて落ちないよつて注意してー。」

エミリア「了解つとー！」

エレベーターの中心部分を貫いたその剣は、まるで実体がないかのように

つづく

傷跡を残さず抜けていく。

ナギサ「一体どうこう仕組みなんだあれは…衝撃は伝わっていったのだぞ?」

レンジヤー「今は仕組みどうこうよりもどう奴を倒すかだ!」

マリー「むしろ足場が崩されないのは好都合だよ!…でも食らわないよう注意して!」

キャスト「ほう、お前…ククク。楽しくなつてキタな」

唐突に、口を開いたのは今まで沈黙を貫いていた4人組の最後の一人のキャスト。

マリー「え?」

キャスト「いや、何でもない。…ほら、戦闘に集中しなければやられると?」

その言葉で意識を戻す。

…何が面白いのかはさておいて。

フォース「下から来るよ!」

叫びが聞こえたその瞬間に感じる背後の凶悪な気配。

振り向きたまに、頭と思しき部分に向かつてトリガーを引く。

連續で発射されるフォトン弾が効いていないかのように、オルガフロウは攻撃の

体勢をとる。

ハンター「前衛を代わる！あんたは下がってくれ！」
マリー「…お願いします！」

そう言って私の横に駆け込んできたオレンジの影。
私はオルガフロウの方を向いて射撃をしながら後退した。

横をすり抜けて前に走っていく青い影と赤い影。

リ「せんとナギサだ。

リコ「せいやあつ！」
ナギサ「はああつ！」

二人が繰り出したフォトンアーツは、近づいてきたオルガフロウの頭に
クリティカルヒットした。

グウウウツ

地の底から響いてくるかのような声を出し、ダウンするオルガフロウ。

ここぞとばかりに、全員の火力が集中した。

エミリア「燃えろっ！」
フォース「凍てつけッ！」

繰り出される上級のラ系テクニック。

その間をかいぐぐつて、紫のキャストが突撃をかけた。

キャスト「クハハハハ！！楽しいな、楽しいぞ！」

彼がふるうつ武器は命を奪うといわれているソウルイーター。
鎌ともとれるその武器を、的確にオルガフロウに叩き込んでいく。

ハンター「あんたに遅れはとらねえよー！」

ダブルセイバーが煌めき、鮮やかな軌跡を描いて振るわれる。
そこに、上から連撃を重ねてくる青い影。

ナギサ「…天つ閃！」

ナギサのスティールハーツが青い軌道を残してオルガフロウに切り込む。

微かにできたオルガフロウの装甲の傷を狙つて、私とレンジャーさんの

弾丸の雨が降り注がれる。

マリー「いけええええ！」

レンジャー「おらおらあーー！」

傷が広がり、むき出しになる皮膚部分。

そこに向かつて飛び込んでくる赤い影を確認して、私たちは射撃を別の
ところに向けた。

リ」「……師匠！私です！今……今助けます！！仲間とともに」「……」

赤のセイバーが目にも止まらない速さで振るわれる。

連撃に次ぐ連撃。

それでもまだ、オルガフロウは倒れなかつた。

オルガフロウの目に灯つた光が強くなつたかと錯覚するような威圧感。

それにひるんで攻撃が弱まつた瞬間に、彼は上方へと移動した。

エレベーターの警告音が響く。

落下を続けているこのエレベーターの終着点が近づいてきているようだ。

マリー「時間がないよ！隙があつたら逃さないで！」

言いつつ、真上に向かつて弾丸を放つ。

2対の青い弾丸と、それを超すスピードの縁の弾丸1粒。

レンジャー「俺だつて遠距離戦が得意なんだ！忘れんな！」

連續で頭を打ち抜かれて、オルガフロウが距離感を見失う。

徐々に落下してくるオルガフロウにめがけて、テクニックが打ち込まれ始める。

エミリア「あんたにばっかりいいカツコはさせないよ！」「

フォース「お！言つたね？あたしだつて負けないよ！」「

ラ系の範囲攻撃が目隠しなつてか、遂にオルガフロウが着地した。
…体勢は整えられてしまつたが。

そこに近距離部隊が追い打ちをかける。

ハンター「うおおおおおつ！」

キャスト「クッハハハハハ！」

ナギサ「ふつ…はあ…！」

リコ「たあああつ！」

エレベーターに接地している4本の足すべてが崩れ落ちる。
…体勢が崩れた！

マリー「ミリア、ナギサ！ブラストリリース！」

私のSUVは衛星からの転送なので使えないけれど。
彼女たちのブラストは使えるはず…！

エミリア「行くよつ、ミリア・ジュブラスト！ヌイ！…」

呼び出される炎の化身。

片腕に力を込め、発射される。

それが終わったのと同時に。

ナギサの青い閃光がオルガフロウを包み込む。

ナギサ「はあつ、はあつ…あああああ…！」

止まらない連撃。休まらない手。

息も絶え絶えになりながら、ナギサが全力を注ぎ込む。
…すると。

グウオオオオ
：

遂に、自制を失ったオルガフロウがエレベーターの縁から落ちた。
眼下に広がる大空洞へと。

マリー「あぶなっ…！」

叫んだ瞬間、エレベーターが急停止し、私たちはエレベーターに押しつけられた。

I — , I DOL A , have the divine bl
a d e

エレベーターから降りた私たちを待っていたモノは、動かなくなつたオルガフロウ
と、その周りを回遊する白い光の玉だった。

エレベーターが上昇していき、帰り道がなくなつたことを知る。

…おもむろに、リ「さんが白い光に手を伸ばす。

卷之二

師匠と呼ばれたからなのか、それとも光に触れたからか。白い玉がもう動かないオルガフロウの中に入り、周囲にまばゆい虹色の光を放つた。

マリー「おふしつ…」

ナギサ「…なん、だ、これは…」

足下に振動を感じ、反射で閉じた目を少しづつ開く。
そこには、巨人が立っていた。

ダークファルス・ディオスを越えるであろう背丈。その背丈に見合つた大剣。

両肩にマドウーグのような、自立機動らしき2対のモノ。バトルストッパーをしまい、剣影を取り出す。

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能が必要だ。」

て！
」

ナギサ「まだ、戦うといつのか…」

卷之二

ナギサの様子がおかしい」と。

マリー「…ナギサ？」

ナギサは、返事をしみじみと片手を顔の高さまで上げ…そのまま崩れ落ちた。

マリー「ナギサッ…！」

エミコア「ナギサ…？」

すぐに、私とエミコアが駆け寄る。

頭は打つてないようだが、意識がないようだ。

ちひつとこちらを見たりコさん、私たち一人に向かって言へ。

リコ「あんたらはナギサを連れて部屋の隅まで退避して…」
マリー「…でも…」

リコ「でもじゃない…師匠を、ラグオルを救うのこあんたらの力
なしで

できないよ」ひじゅ 無理だからね。心配はないよ…」

そうだそうだ、と続いたのは他のハンターズの面々だった。

…言葉の裏の、ナギサを心配する心が伝わってくる。

エミコア「…皆、頑張つて！行くよマリー…」

マリー「…ありがと、『ゼロ』ます…」

その心を無駄にしないためにも、私たちは動けないナギサを抱えて、壁際の、巨大な岩と岩の間に隠れられそうな場所を見つけて退避を始めた。

—— side · マリー · M · ミスラ

慎重に、かつ素早く。

ナギサに振動を『えすぎな』ように、しかしできるだけ速く。

岩の間を田指して進んでいると、背後で戦闘が始まった。

一声大きく叫ぶオルガフロウと、それに対しても立ち向かう5人。

銃声と、剣が空を切る音まで聞こえてきそうなほどの気配。
そして、何より大きく響くのは。

圧倒的大きさで彼女たちの前に立ちふさがっているオルガフロウの足音。

見なくても、後方何メートルのところにいるか大体解るほどの威圧感。

それに押しつぶされまいと、声を張り上げ必死に立ち向かうハンターズ。

彼女たちの身を案じてみると、壁際まで無事にたどり着いた。

やつべつと、H//コアと息を合わせてナギサを降ろす。

H//コア「…呼吸は、ある。心音も、一応は正常。…ナギサ…」

マリー「…田立った傷、と言つよりも傷一つない」

…万全の装備、役に立つな…なんて思つてこる。

…万全の装備、役に立つな…なんて思つてこる。

作業をしながら、H//コアが話しかけてきた。

H//コア「…多分、これは精神的な問題だと思つ。気の張りすぎ、倒したと思っていた相手の気配、それで蘇つてくる

イヤな

思いでの数々。決着が付いたと思つたら第2形態。
…そりゃあ、もつ想像を絶する負担だつたんだと思

マリー「…気づいてあげられなかつたな、ごめんね…ナギサ…」

まだ目を覚まさないナギサの代わりに、H//コアが答えた。

H//コア「ナギサの心を読むのつて難しいしね…でも、あたしのはあくまで

推測にすぎないから、できれば早く医者に見せた方

がいいね

マリー「でも私たちはこゝを離れられないし…」

H//コアと顔を見合させ、頷きあつ。

H//コア「信じて待ちますか…」この英雄のこゝ帰還を

「マリー、「信じれば奇跡は起きる…身を持つて知つてゐるからね。帰つてくるときは、

6人揃つて帰つてきてほしいな」

エミリアの頭の上にクエスチョンマークが飛ぶ。

エミリア「あれ? リコ、ハンター、レンジャー、キャスト、フォース…5人じゃ?」

マリー「一人大事な人忘れてるよエミリア…ヒースクリフさんがいるでしょ?」

ああ、とエミリアが合点したかのようになつた。

エミリア「そうだ、あいつらこの師匠さんを助けるためにも戦つてるんだっけ」

マリー「そういうこと。だから、6人。…信じて待とう?」

エミリア「そうだね。…ナギサも、きっと信じてる」

その言葉で、私とエミリアは岩の隙間から外を眺めた。

戦闘は激化しており、フォトンが舞う。

まだ目を覚ましていないナギサのまぶたが、びくっと動いたような気がした。

—— side・リコ=タイarel

マリーたちが一応は安全な距離まで離れたところで、ハンターズに声をかける。

最後の打ち合わせだ。

幸運なことに…師匠、は視点が高くなっこことで混乱しているのか、まだあたしたちに気づいていないようだ。

リコ「よし、まずはあの両肩のマグ…だつたものを集中的に呪こう。性能が

残っているなら、あれを倒せば多少は弱体かするはずだから

「ら
ハンター「俺とこの旦那は近距離だからどうかねえぜ?」

リコ「そしたら足だ。人型って言つことは足首と膝は効くはずだ」
ハンター「了解つと。…旦那、解つたか?」

キヤスト「ふん」

レンジヤー「なあに、旦那なら大丈夫だろうよ。それで、だ。マグを倒したら?」

リコ「ああ。マグを倒したら遠距離部隊は右肩か頭。無理のない方を狙ってくれ。」

攻撃の効きが薄いと感じたら別な場所に目標を変更してくれ。その判断は

任せ
る

レンジヤー「了解。嬢ちゃん、聞いてたか?」

フォース「もー！ 聞いてるよ！」

レンジヤー「はは、悪い悪い。…さて。奴さんもそろそろ気が付いたみてえだぜ?」

レンジャーの言葉の直後、あたしたちに黒い影が落ちる。後ろを振り返ると、師匠…だったモノ、がこちらの方を向いて止まつている。

通じないとは解つていても、思わず言葉をかけてしまつ。

リロ「ご丁寧に待つてもうひとつすいません師匠…今、助けてます！」

地の底から響かせてくるような叫びとともに、最後の戦いが始まつた。

レンジャー「でつけえ的だなおーーー。」

言いつつ、ライフルを連射する。

彼に後れをとるましと、アリスがテクニッケで追撃をかける。

「フォース、はああ……爆発しろっ！――」

先ほどのとは違い、ラフオイヒ... | ラーマンにしか出せないよつた曰

さつきは周りに気を使つてたのか、と考えつつオルガフロウの足下

へ駆ける。

……戦闘が始まつては情はいらない。自分の動きを鈍くするだけだから。

とはいえ、一瞬。ほんの一瞬だけ、切りかかる手が遅くなつてしまつた。

……そこを見逃さず、巨大な剣があたしを狙つて来るのが見えた。ヤバい。回避も防御も間に合わない。……このままじゃ死……！！

唐突に背中にドン、とこつ衝撃。

誰かに後ろから突き飛ばされたあたしは、その勢いのまま吹っ飛び、剣の剣の

リーチから抜け出すことができた。

その後、刃と刃の削れ合つ音が響く。

リコ「……お前……」

ギャイン、といつ音を立てて剣の軌道をそらした彼が言ひつ。

キヤスト「生存を第一に考える。……そんな基本もできないか？」

リコ「……助かつた。ありがとう。そうだな、あたしつたらまだまだだ」

解っているならいい、といい残してキャストはまた攻撃に戻つていった。

あたしも攻撃に加わらうとしたが、ふと頭によがめる光景のために足は止まつた。

まだあたしが「一ラル本星で師匠の教えを受けていた頃。一番最初に教わったのも生き残ること、だつた。

そして今、あたしが対峙している「」は。

仮にも「師匠」だったモノだ。

なら師匠の教えをすべてつき込めば、少しさあたしのことを思い出すかもしれない。

そうしたら隙ができるだらうか。…できるとしたら、それは師匠とダークファルスがまだ戦つているとこつ証だ。

だとしたらそこを突けば師匠とダークファルスを切り離せるかもしない！

希望は見えた。

あとは、やるだけだ。

リコ「師匠、今行きますー！」

あたしの心は異様なほど平静だった。
まるで師匠と手合わせをしているかのよつた、懐かしかずり感じる余裕がある。

オルガフロウの思考、行動が手に取るように解る。

次に誰を、どう狙うのかさえ。

リコ「レンジャー！5歩下がってくれ！」

レンジャー「了解…うおあ！」

彼がさつきまでいたところにグラントのようなテクニックが打ち降ろされる。

威力は地面を軽くえぐるほど。

レンジャー「サンキュー！助かっただぜ！」

リコ「礼はこの戦闘が終わって生き延びてからにしてくれ！」

それもそうだな、といいライフルを構えなおした彼の一撃が。オルガフロウのマグを機能停止に追い込んだ。

一瞬、ほんの一瞬。ハンターが視線をガエルとギエルに向けてしまつた。

…その一瞬を、突かれる。

リコ「…！ハンター！オルガフロウの後ろに回れ！今すぐ…！」

返事はない。

…けれど彼はあたしの声に一瞬遅れてオルガフロウの背後に飛び込んだ。

ハンター「あつぶね！」

リコ「大丈夫か！？」

思わず、身を案じる声をかける。

ハンター「ああ、助かった！…リコ、役職で呼ぶのやめてくんねえか！？」

返ってきた声は十分に元気そ�だつた。

リコ「お前等パイオニアのハンターズだらう！…名乗つて貰つて貰つてないのに

名前で呼べるかあたしはエスパーじゃない！」

一気にまくし立てる、ハンターが名乗るひつとする。
イヤ待て今名乗るな混乱する！

リコ「名前を聞くのは後でパイオニアに無事帰れたら！あたしの居場所、

しつかり確保しておいてよ！？」

ハンター「…ああ、任せときな！」

そうだ、あたしはパイオニアの人間だから。

ここつら階と一緒に帰らなきゃ居場所はできないんだから…

リコ「わあ、仕掛けるよ！」

ハンター「ああ！」

手応えは薄く、いくら切つても切つても倒せる気がしない。
まず、傷がつきやしない。

…こうなつたら大技にかけるしかない、か。

リコ「ハンターズ！全員フォトンブластは撃てるか！？」

自分のマグとシンクロして特殊な一撃を繰り出すフォトンブласт。マグを持たないあたしは撃てないけれど、マグとともにいる彼らならきっと。

ハンター「俺は大丈夫だ！」

レンジャー「俺もだぜ！ いつでもいける！」

キャスト「出来るか出来ないかなら、俺は可能だ」

フォース「準備万端！ 合図ちょうだい！」

リコ「…おつけー！ タイミングはあたしが見るからそれまで各自全力で攻めて！」

了解、という声がきれいに重なる。

…ここで、ふと懇願。

Hミコアもフォトンブラストのような技を出してはいたけど、彼女はマグを装備していないなかつたように見えた。

グラールという知らない文明の技術だろうか…せひとも研究してみたい。

そのためにはまず生きて帰らなきゃ！

リコ「レンジャー！ 回避の準備！」

レンジャー「あいよ！」

リコ「フォース！ 敵の視界を奪うように意識して攻撃してみてくれ

る！？」

フォース「お安い！」用よーいっくよーー！」

オルガフロウの眼前に今までとは比にならないレベルでテクニックが連発される。

視界を埋め尽くす爆炎に、あたしたち前衛の足下への攻撃。

サポート役のマグもレンジャーが封じている。

「これで、少しでも隙が出来れば……！」

グゥウオオオオオ…

オルガフロウの叫びから、地の底から轟くような響きがなくなる。顔を押さえ、一歩だけではあるが…ふらついた！

リコ「ハンターズ！今だ！」

ハンターズ「了解！」

4人の声がまるで一人のものであるかのように響く。
「彼らの頭上に、それぞれのマグの特性を出したモノが召喚される。

それらが連續でオルガフロウを貫き、そして…

ついに、オルガフロウが片膝を突いた。

リ「「」」を逃したら…！」

今以上のチャンスはもう巡ってこないだろ。ハンターズは今の一撃の反動でまだ動ける状況ではない…あたしがやるしか！

リ「「師匠、あなたを…救つてみせます！」

想いを乗せた刃は白く輝く光を放ち、普段の倍以上のリーチを持つに至った。

救えようと救えまいと、関係ない。

あたしは、師匠に教わったすべての力を出すだけだ…！

リ「「はああああああああ…！」

戦いに終止符を打つため、師匠の作ってくれた『赤のセイバー』を握りなおし、頭を狙つて飛び上がる。

師匠、これで一本貰います。

まだあたしが師匠に稽古を付けて貰っていた頃の口癖。

ふと頭によぎつたその口癖を、気付けばやがて口元に出した。いた。

その瞬間、あたしと師匠を残して時が止まつた…よつな錯覚を受けた。

ひざまづいたまま、顔を上げてあたしの方を見るオルガフロウ。
その瞳に、師匠の眼差しを感じる。

師匠が目だけであたしに語りかけてくる。
とどめを刺せ、と。自分がこいつを押さえつけている間に、自分ご
と…殺せと。

あたしはそれに返事をしない。

師匠がまだ自我を持つて生きていで、あたしたちのために…あたし
たちと一緒に
戦ってくれている。

それが知れただけで、十分だった。

リコ「…！」

止まっていた時間が動き出すのを感じる。
振り上げたまま止まっている腕が、自分の込めた力によって振り降
ろされる前に。

オルガフロウを隅々まで見る。

師匠といつも見つける境界線は…どこに…

…首もとから腰にかけて斜めに、力の入り具合がおかしい。
見つけたアー！

リコ「これでえ…終わりだああ！」

頭を狙っていた腕を強引に捻り、左肩から袈裟切り。さつきまでの堅さが嘘のよう、切取線をなぞるようにすんなりと刃は通つた。

その勢いのまま、オルガフロウの足下へ着地する。直後、目の前にあつた足が2、3歩下がつた。

グゥウアアアアアア…

立ち上がり、仰け反るオルガフロウ。傷口から吹き出る高純度のフオトン。

やがて、肩を押されていた手がだらりと下がり…

オルガフロウは、霧散した。

リコ「終わ、つた、のか…？」

巨人の影はもうどこにもない。
あれほど巨大だった剣も…などと考えていると。

エレベーターの上つていった方角から、剣が回転しながら落ちてきた。

サイズ的にはセイバー。…しかし、見たことない型。

リコ「……ん？」

呆気にとられ、放心している仲間たちをよそに、ふと、気がつく。
今降ってきた剣のそば。そこ…何か、ある。

あたしと対照的な青と白の2カラー。
ここからでも解る大きな背丈。

豊富な白髪と、彼の手に握られている独特的のフォルムのソード。
見間違えようがない。あれは…あれは…

リコ「師匠っ…！」

叫び、駆け寄る。

反応はない。

諦めてやるものか。

師匠がこうして、体を持つてここにいる。

…絶対に助ける…！

リコ「師匠！ 師匠！」

体を起こしてやり、何度も何度も呼びかける。
…すると。

フロウウェン「う……リコ、か……」
リコ「…そ、そつです…あたしです…」無事で本当に…よかつ
た…

だめ、こぼれるな、止まれ、涙。

あたしの頑張りもむなしく、透明な滴は頬を伝つて流れ落ちる。

フロウ・ウ・ン「〇因子に蝕まれて〇中で…お前の〇じせ、感じていたぞ…

私を助けようなど、無茶なことをしあつて…

リコ「無茶だ、と、頭では、解つても、あた、あたしは、諦めたくなかつたんです…」

こみ上げる嗚咽に、まともに言葉が継げなくなる。

それでも、生きていてくれたことが嬉しくて。ただ、嬉しくって。

リコ「…いや、みんなが、いてくれたから。…あたしは、諦められず」

「いたれたんです…」

フロウ・ウ・ン「この…バカ弟子が…うぐつ…！」

リコ「師匠ー？ 師匠ー！」

後ろから、多くの足音。

涙でグシヤグシヤになつた顔も構わずに、振り返る。

そこには、一緒に戦つてくれた仲間たちがいた。

ハンター、レンジャー、キャスト、フォース。
エミリア、マリー…そして、まだ目を覚ましていないナギサ。

フォース「傷が深いね…レスタで応急処置はするけど早くメディカルセンター

に連れていかなきやー！」

レンジヤー「先導する…転送装置は…ビンゴー出現してるぜ…」

HIIコア「ナギサも診てもらわなきや…」

マリー「フォースさん、こっちも応急処置お願いできますか…」

フォース「うつはあ、今日あたし大人気だねえ…張り切っちゃうよ

！」

さすがに師匠はあたじじゃ運べないので、ハンターとキャストに運んでもう。ソラ

ナギサは、マリーとHIIコアに抱かれるよろこびにして運ばれていた。

パイオニアへと向かう道すがら、何人ものハンターズとすれ違う。皆一様にこひらのことを心配し、声をかけてくれる。

あたしはこいつらを一方的に遠ざけていたのに、こいつらはあたしのことを気にかけてくれることがなんだかむずがゆい。

そういうわけで、地上にいた。

空気は澄み渡り、心地良い風が吹く。

パイオニア2への転送装置はすぐ近くに設置されていた。あたしたちは、迷うことなくその中へと足を踏み入れた。

, , HDOLA , have the . . . (後書き)

いやはー、長い！ですね（。・。）

読んでくださりありがとうございます、お疲れをなさず^__^

<

訂正：終了はまだ先になりますいません（。・。）

私はもうマニーさんたちが帰つてからが不安で不安で…

そ、それではまた次回！

ありがとうございました

「いつも」さんは、風邪で鼻がズビズビなAnthonicaです（
ーーー）

…先に謝ります、完結しない…！

いや、書けば書くほど色々動いてくれるアグレッシブなキャラ達ばかりで…はつはつは。んな
氣、気長にお付き合ってください！

それではどうぞ…。

――??.?.sideナギサ・アーテルハイト

光の射さない暗さの中に、おぼろげな自分の輪郭を確かめる。これは夢、だらうか。

自分で言つておきながら夢と言つたけれどの不確かさがここにはない。

触覚・視覚・嗅覚・聴覚・味覚。五感のうち、今働いているのは4つ。

口の中に広がる鉄の味、味覚。
自らに触れて感じ取る、触覚。
頭に響きわたる耳鳴り、聴覚。
まぶたの裏の血の流れ、視覚。

ただ匂いだけがない世界。

口の中に感じる血の味。その血の匂いさえ、感じ取ることが出来ない。

これは不自然だ。

…ならばこれはやはり、夢なのだらうか。

だとしたら早く覚めてほしい。

かすかに自分が何をしていたのかは覚えている。

確か戦闘中だつた。

それも、強大な敵と。

早く戻らなければ、皆に迷惑になってしまつ。
…と、考えていたふと疑問が生まれてきた。

なぜ私は戦闘中であつたのに夢なんかみているんだ？

？？？「それはお前が無様に倒れたからで、ナギサ」
ナギサ「…何奴っ！」

空間に響く声。

ナノデバイスからいつものように愛剣を…

…取り出せない？

？？？「何をしようとしたのか？」は現実ではないのだから武器
など

出しても意味はないといつのこと

ナギサ「…？」

余裕な声…こいつ、気配が少しにも、ない。

？？？「無駄だ無駄無駄、お前に私を見つけることは出来ない」
ナギサ「…お前は、誰だ？」いや、質問を変える。お前は、何だ？」

上からのよつて、下からのよつて、
頭の中に直接響いてくるよつて、不思議な声が響く。

？？？「何でも。俺には今や個の意味はなく、集まると俺ではなく
なる

ナギサ「… 単体？集まる？」

？？？「お前らの言葉を借りるなら個人と集団、つてとか。まあ深い意味

などないさ」

ナギサ「… らちが開かないな。お前はここで何をしている？」

周囲を包む声の質が変わる。

… バカにしたような口調から、硬質な口調に。

？？？「それはこいつらの質問だ。お前はこんなところで何をしている？」

ナギサ「あ。私としては早く帰りたいのだが帰り方が解らなくてな」

… とたんに、またバカにしたような口調に戻る。

？？？「… はあ。つまりは何か？お前はここに迷い込んだと？」

ナギサ「ああ」

今度は隠すそぶりもなく、盛大にため息を吐かれる。

？？？「なんつ、だお前… はあ… イレギュラーにもほぢがある…」

ナギサ「イレギュラー？」

？？？「お前には理解できない話だ、気にするな。… 戻り方が解らない、

と呟つたな？」

ナギサ「… 言つたが」

とことんこつちの話を聞かない奴だ。

…私も普段を考えると人のことはいえないか。

????「今のお前には簡単だ。光の射す方向を見つけてその方向に集中しろ。

向かつていく必要はない。ただその光に意識を集める。そうしたら、

光は勝手に向こうから近寄つてくれるわ」

ナギサ「光、か…わかつた。やってみるとしょひ」

????「出来ればお前にはもつこには来ないでほしい。田障りだし、

何よりお前の来るべき場所じゃない」

その一言で、ふとした疑問が首をもたげる。

ナギサ「そつだ、そつこえぱこにはびになんだ?」

????「…彼岸と此岸の境目、さ」

身を包んでいた気配がなくなる。

まさに雲散霧消、気配は焼き消えるようになくなつた。

ナギサ「言ひ逃げか…全く…それはそつと光、だつたか」

これ以上聞きたいことはなかつたので気持ちを切り替えて帰る手がかりを探す。

光、射す方向…

ナギサ「…見つけた」

それは、色彩は違えどあの欠片のようだ。

形を変え、色を変え、まばゆい『光』そのものだった。

じつとそちらを見つめ、意識を集中する。

気づけば手は胸の前で組まれていた。

やがて、光が私の方へと近づいて――。

――バイオニア2・メディカルセンター・sideマリー，M，
ミスラ

集中治療室でナギサの容態が急変してから約20分。

心音は弱くなり、元より色の白い顔から血の気が引いていく。

私たちにできることは、ただただ呼びかけることだけだった。

マリー「ナギサ！ダメだよまだ！そんなの私はイヤだよ！」

エミリア「頑張れナギサ！まだあんたといっぱいやりたいことがあるんだからー。」

ハンターズのみなさんはここには入れてもらえない。
…あまりに大人数だとえって悪い、との医師の判断で。

だから私たちは精一杯ナギサに声をかけ続けた。

エミリア「ナギサ！帰つてきてよ！」

マリー「ナギサ！まだまだ一杯！遊んで食べて笑つて！まだ何もかもやり足りない

んだよ！？だから諦めないで！」

下がり続ける体温に、弱くなつていくパルス。

…それでも！

エミリア「ナギサ！」

マリー「ナギサあ！」

ピク、と。

ナギサの指先が動いたような気がした、その直後。

医師「…信じられない…」

奇跡が起きた。

ナギサ「…はは、なぜ二人とも泣いているんだ…？」

弱々しく、しかしあつきりと発せられたその声に。
私たちの涙腺は決壊した。

H//コア「ナギサあ……」

マリー「ナギサあ……」

自分でも思わぬうちに、ナギサに抱きついていた。

… H//リアも同じ事をしているんだから、許されるよね？

ナギサ「ちょ、どうしたんだ」一人ともー？」

H//コア「うつさごバカナギサーどうだけ心配したと思つてんのよ
ー！」

マリー「良かつた、良かつたよう」「う……」

ナギサ「??な、なんだかすまない……」

カシュー、といつ軽い音とともに開かれるドア。
流れ込んでくるハンターズの皆+リコさん。

リコ「ナギサ！？あんた……！」

フォース「良かつたねえ！」

ハンター「おおおい冷や冷やさせやがって！」

レンジヤー「いや俺は解つてたぜ？嬢ちゃんが生き延びる」とぐぐり
いはよ？」

キヤスト「…の、割には随分と田が赤いようだが？」

レンジヤー「う、うるせー！」

ナギサ「嘘…！」

日付が変わつて午前2時すぎ。

約半日も昏倒していたナギサが、目を覚ました。

マリー「ナギサあ…」

ナギサ「ああいや泣かないでほし…すまない心配をかけた」とは謝るからー。

貴方に泣かれると私はどうしたらいいか…」

H//コア「困ったなー」バカナギサー…本当に、良かったよお…！」

ナギサ「ああうそ…え、いや…あの…」

ポリポリと、頬を搔きながらナギサが言へ。

ナギサ「その…これからは、倒れたりしないように、氣をつけるから…」

だからとこりの何なのだが…許してほし…」

その言葉に、私よう早くH//コアが反応した。

H//コア「バカ…許す許さないじゃんって…」

マリー「やつだよ…グスッ…怒ってるんじゃなくて心配してるんだもん…」

ナギサ「それは、その…」

堂々通りの泥仕合に見かねたのか、リコさんが入ってくる。

リコ「あーもうー。ナギサは無事だつたーそれで良いんじゃないの…？」

？」

その一言に、涙でグシャグシャになつた顔をH//コアと見合わせる。

もちろん、ナギサにしがみついたままで。

マリー「…えへへ、私はそれで十分かな。H//リ亞、顔、ひどいよ？」

H//コア「あたしも十分…つてマリー…ひどこって何よひどこってー！」

ナギサ「ひどいとこか…H//リ亞、鼻をかんだ方がいいこと知りません」

H//コア「ちよつー?ナギサまで!」

リリ「そう言つてるマリーもなかなかだけれど?」「マリー「えへ、自覚してます…」

ティッシュを箱でもらい、鼻をかみ、涙をふき取る。
…ハンターズの皆が何だかニヤニヤしてこいつを見てくれる。

H//コア「ひ、人の顔見て笑わないでよー！」

マリー「…まだ、私の顔おかしいですか…?」

それに律儀に答えてくれたのはレンジヤーさんだった。

レンジヤー「いやいややうじやなくてな…マリー、だつたか。お前さん、

表情がじるじる変わるから面白へつてよ

返答に困つてると、フォースさんが続けた。

フォース「やー、H//コアちゃんとか戦闘中はそう見えなかつたんだけど。」

「やっぱしふつーの女の子なんだなつて思つたり?」

H//コア「あたしは戦闘中も今も普通の女の子だよー?」「

フォースさんがぶんぶんと手を振つて弁明するよ!」
H//コア「

フォース「やや、わかつてるんだけどね?でもほり、戦いに慣れた
緊張感の

ある顔と普段の顔つて変わるじゃない?いや、うち
のキャストの

旦那とか例外は例外でいるんだけどさ」「

H//コア「…キャストでも表情豊かなのはいるけどねえ…」

…しづらばつくれておこうかな?

H//コア、こっちをそんなに見ないで六開いちやうから六。

と、フォースさんはH//コアをからかう方向にシフトしたみたい。

フォース「ほほう、まるで感情豊かなキャストが身近にいるかのよ
うな言い方

するねえ?」

H//コア「だつて身近にいるじやん。ほり、マリーが

マリー「あはは…しづらばつくれきれなかつたかあ…」

場の空気が凍つた氣がした。

フォースさんやハンターさんの田が真ん丸に見開かれる。

フォース「…え、マジ?」

レンジャー「お、おいおい、冗談は…」

…あんまり好印象じゃないのかな。でも、私は私だし。

マリー「いえ、冗談でも何でもなく…私、キャストなんです」

1拍、2拍、3拍。
少しの間をおいて…

「　「　「　ええええええええ―――？」」「

病室が絶叫に包まれた。

叫んだのは4人。キャストさんだけは命懸したかのように顎に手を当てていた。

フォース「うつそ本当！？え、触つても良い！？」

マリー「あ、どうぞ…といつても人工皮膚なんであんまり変わんないですよ？」

フォース「お言葉に甘えて…ていつ！」

マリー「ふつ！？ほ、ほほれあははほほつくれすか…」

いきなりでしかも押す力が予想以上に強くて呪律が回らない…！

フォース「…今何て？」

Hミコア「そこでまさかのほっぺですか、だつてわ」

こくこく、と未だ押され続ける頬に言葉を出すのを邪魔されながら頷く。

ハンター「え、ちょっと、ええ！？」

エミコア「……ってか、皆マリーの顎の部分のパーティに気づかなかつたの？」

レンジヤー「……俺、それはインカムの一種か何かかと思つてた…」

マリー「あはは…」

「……フォースさん、そろそろつづくの止めでもらえませんか…？」
と、思ったところで指が離された。ふう。

リコ「え！？え、え！？」

ナギサ「リコ。落ち着いて深呼吸をすると良い。ほら吸つて…吐いて…」

キヤスト「……成る程な。お前に感じた違和感の正体はそれか」「マリー」「えつ、キヤストさん気付かなかつたんですか！？」ええと、まあ確かに

「私はキヤストらしからぬ服装してますけど…」

そんな私の今日の服装はファンタカスタムドレス。

カラーリングはエイダの趣味で赤でアクセントが入れてある。

キヤストが服を着る、つていうのがこの世界ではまず違うのかな？
騒動の中心にいるのは慣れっこなので、そんなことばっかり気になつた。

「……フォースさんが、なぜか指で押すジェスチャーをしながら私の方を見ている。

ま、まだ押したりないのかな？何て考えていると。

フォース「ふにっふにだつたねえ……あ、でも言われてみれば田の奥まで見てみると

キャストっぽい……かも？」

マリー「顔近つ！？」

いきなり急接近してくる顔。
…び、びっくりしたあ…！

なかなか收まらない騒動に終止符を打つたのは、…まあ、当然と言えば当然。

医師の方だった。

医師「病院ではお静かに！ほらほら無事が確認できたなら出てください。ナギサさん

が意識を取り戻されたので今から検査などをしますから…」

フォース「ちえつ。はーい」

ハンター「あの見た目でキャスト…？いやでも、種族の差なんて…
ぐおお…」

レンジヤー「おここいら出口で止まんな。なあに色ぼけてんだ青」「オ
ー！」

ハンター「ぐはつ…レ、レンジヤーの冗貴蹴りは痛えつて蹴りは…」
キヤスト「いいから出ぬ」

ハンター「…はい…」
リコ「二人とも、先に出ててくれ」

ミニワア「オッケー！…ふくくつ…ハンターさん叱られた子犬みた

い！」

マリー「ちょ、エ、エミリア！…ナギサ、検査が終わったら連絡入
れてね！」

笑いをこらえるエミリアをどうにか病室の外に押しだし…扉が閉ま
る。

あれ？リコさんは？

…私たちみたいに土地勘がないわけじゃないんだから大丈夫か
な。
そう自答して、私たちはメディカルセンターの外に向かって歩きだ
した。

——メディカルセンター・sideリコ＝タイarel

ナギサ「…リコ？行かないのか？」

リコ「ちょっとね。医者に話があつて」

ナギサ「？…そうか。なら、医師が来るまでここにいると思いま
リコ「ありがとうナギサ。椅子借りるよっと…ふう」

よくある3脚の丸椅子を引つ張りだし、とす、と腰掛けれる。
そのまま、勢いでナギサのベッドに上半身を投げ出す。

ナギサ「はは、貴女もずいぶんとお疲れだな」

リコ「疲れないわけないじゃんか… 今日一丁でどんだけ出来事あつたと思つてんの…」

ナギサ「うーん…まあ、現に私は過労?で倒れてしまつたわけだしね」

リコ「そうそう。倒れないあたしを誉めてほしいよ全く…まあ、マリー達も倒れちゃ

いないからあたし一人で威張れないんだけどね?」

途中で気づいたら膝枕されていた、というのはあえてカウントしないでおく。

…単純にあたし一人でこいつら3人分の働きしてたって考えれば、良いよね?

ナギサ「はは、そうしたら私なんて皆に恐縮しなければならないな」
リコ「あんたのその立ち直りスキルは少し欲しいよ本當に…」

ナギサ「リコ、女たるものいつまでも過去を引きずつてはいけないんだというぞ?」

リコ「…いや、あの3人の中で一番女っぽくないあんたに言われるとは…」

ナギサ「怒つて良いが?」

リコ「ごめんなさい」

…一瞬の間をおいて、どちらからともなく吹き出す。
吹き出したらもう止まらない。病室で怒られない程度に笑い出す。

リコ「あははっ…あーおかしい。本心で笑ったのって何時ぶりだろう?」

ナギサ「…寂しいことを言つた。私は何時も本心で笑つているのだが…リコは

「そうではないのか？」

うつ伏せになつたまま顔だけをナギサの方に向ける。
…そうか、こいつらは。

リコ「あたしは何だかおだてあげられちゃつてね。周りが気を使つて来てしまうような

立ち位置になっちゃつたからあたしから遠ざけてた。…仲間、つて言えたのは、

師匠をのぞくと今日まで一人もいなかつたような氣さえするよ」

ナギサ「ふうん…だが、もう私やヒミコア、マリー やセツキまでいたハンターズの皆は

貴女の仲間だろ?」

ああ、だめだ。

ナギサの一言で胸につかえていた物が取れる。

あたしは、もう。

一人じゃ、ないんだ。

ナギサ「リ、リコ?ええと、何か傷つくようなことをいつてしまつただろうか私は!」

リコ「え?」

ナギサ「え?つて…いや、無表情できょとんとした顔で涙を流されても困るのだが…」

リコ「え、嘘!…はは、本当だ。何でだろうな、あたしにも解ら

ない……

頬を触つて確かめると、そこは確かに濡れていた。
……塩辛いけれど、あたたかい。

リコ「わかんないんだ……でも、何だか、胸が暖かくて……嬉しい、んだな。あたし」「ナギサ「そ、そうか……嬉しいなら、まあ、泣いても……良いんじゃないかな?」

どんどんじぼれる涙に、滲んで見えなくなる視界。
顔を上げていられず、伏せて泣いていたらナギサが頭をそっとなでてくれた。

いつもなら子供扱いするなど跳ね返すところだけれど……今日へりいは、いいよね?
少しだけ人に甘えたりて。

そうして少し時間がたつて涙も枯れてきた頃。
呼びかけられた声に反応して顔を上げると、医師が申し訳なさそうな顔をのぞかせた。

医師「リコ、さんでよかつたかな? 赤い輪の」

ぐじぐしと涙を拳で拭つて、返事をする。

リコ「ああ、あたしがそうですが…何でしょ?」

医師「ああ、本当にそうだったか。いや、この艦の総督から直接通信があつてね? 何でも、

君がいたら…ちらに顔を出させて欲しいと」

ナギサ「…総督から直々にか。珍しいことだな」

医師「私も詳しくは知らないんだが…ああ、そろそろナギサさん。貴女も検査の準備ができましたが…立てますか?」

ナギサ「ああ、問題ない」

医師「それはよかったです。では私について来てください」

そこまで来て、あたしがここに残っていた意味を思い出す。

…医師に聞きたいことがあつたんだった!

リコ「あ、あの…」

医師「はい?」

聞きたいやうな、聞きたくないやうな…ええい、ままで!

リコ「えつと、ししょ…ヒースクリフ・フロウウェンはどうなりましたか…?」

医師「…ああ、貴女たちが運んできたあの男性ね…彼は…」

言葉を選んでいるのか。

残酷な現実を想定した、その瞬間。

医師「…非常に信じられない生命力ですね。もう、山は越えました

よ

リ口「…え？って、いひ」とせ…」

医師が笑みを浮かべて頷く。

医師「ええ。彼はもう大丈夫です。この調子なら一ヶ月もすれば、走れるくらい」

「はなるでしう」

リ口「せつ…先生！ありがとうございます！」

医師「いえいえ。人を救うのが私たちの務めですからね。面会は、明日以降になさって
くれると彼に負担がかからなくてすむのでそうしてください」

リ口「はい！本当にありがとうございました！」

椅子から立ち上がり、礼をする。

… 師匠も、無事だった…！

医師「では、私たちはこれで。リ口さんも総督の呼び出しに向かつた方がよいのでは？」

リ口「あ、はい！」

最後までにこやかに医師は去つていった。

その後ろを歩くナギサが去り際に小さくガツツポーズをしていった。

…私も、そのガツツポーズに応えた。

嬉しいこと尽くし…だと、この後が怖くなつてくる。

総督の呼び出し、かあ… 一体なんだろう?

状況説明とかなりあたしを指名しなくても良いと思つただけじゃな

⋮ ?

いろいろ考えながら、あたしは病室を後にした。

はい、メディアカルセンターで一話つて話なつが…すいません
でもまあ、時空を越えて、で皆救済されるなら総督も救済されても
いいだろ？、と思いまして…
つていうか書いてたらいつの間にか総督から通信入つてたみたいな
感じになつてしまいまして…
…中だるみしちゃつてませんかね？大丈夫でしょうかすゞく不安で
（（・・・）

…とまあ、お昼寝の効果で眠気はないんで続きの執筆にはいります
なるべく早く完結させよ？と思ひますが…最悪年内には新章に行き
たいんだよなあ…

おっとと、長くなつてしましました。
ご意見、ご感想などよろしくお願ひします！
それではまた^（— —）^

Pioneer 2 · Day Down (前書き)

「なんばんは、こつもよつけつけ早くAnaglete.icaです」
一) ヴ

やはー、明日からテストですよひつまじょいねー?
まあ、単位もあればばこつか。ってスタンスですがね最卑(-_-;)

今回は書いてて矛盾がないようにするのが結構骨が折れて(汗
それではどうぞー。

——パイオニア2・総督室・sideリコ＝タイレル

そういうえばパイオニア2の総督って誰なんだろう、知らないな。知ってる人だつたら話しやすいんだけど…そんな幸運、ないか。

何聞かれるのかなあ、イヤな人じゃなきゃ良いけど…

そう思いながら、あたしは総督室へと続く転送装置を起動した。

リコ「失礼します。パイオニア1ハンターズ所属ハンター、リコ＝タイレル。

ただいま参りました」

秘書「ああ、リコさんよくご無事で！総督、いらっしゃいました！」

あたしに背を向ける形で立つているのが総督らしい。

今喋ったのはたぶん、お付きの秘書さんだろう。

うつん、と唸つた総督の後ろ姿に見覚えが…いいや、まさかまさか。ゆっくりと総督がこちらを振り向く。

事実は小説よりも奇なり、だった。

総督「よく、生きていてくれたな。リコ」

リコ「え…え？え、ちょ、と、父さん！？何でここに…？つてい
うか、総督つて！？」

振り向いたその人は、あたしの…実の父、だった。

総督「まあ落ち着きなさい。私は、今やパイオニアの総督なのだよ。リコ、

お前をここに呼んだのは……そうだな、パイオニアの生存者はお前だけ

かという確認、といふことにでもしておいてくれ
リコ「しておこしてくれって、そんな……つていつか生存者あたしだけ
じゃないし！」

「師匠もわちゃんと生きてるよ。」

総督「ヒースクリフ・フロウハウンドか。あの医師から報告は受けて
いるよ。

まあ、何だ。いわばそれは口実で、だな……」

秘書「リコさん、解つてあげてください。総督は立場上、あなたを
娘として

呼び出すわけにはいかないんです。パイオニア無き今、
総督には昼夜

問わず仕事が舞い込んできます。無事だと解つていても、
自分の娘さん

ですもの。顔を見て実感したかったのだと思こますよ」

総督「アイリーン、そこまで言わなくても良い」

秘書「これは失礼しました」

「ひから秘書さんはアイリーンのことを……つてそれはどうで
もよくて！」

「いけない、頭を冷やすんだあたし。

リコ「……えと、うん。心配かけた、けど。あたしは、見ての通り、
全然平気。

大丈夫。怪我とかもないし…」

総督「そりゃ、か。…本当に、無事でよかつた」

リコ「それは…心配かけて、『ごめん』

総督「謝ることではない。お前が無事に帰つてきてくれた。私から
したらそれ

だけでもう十分に嬉しい」となのだから

ほほえましこやらせどがじこやうですねえ…

秘書

総督「何か言つたか？アイリーン」

秘書「いいえ何も？」

リコ「え、と。あの、父さん…そりだ、言わなきや…」

遺跡の中で頭をよぎつたこと。

メッセージカプセルに込めた、あのときの思いは嘘じやないってこ
とを…。

リコ「あの、今まで、親孝行とかぜんぜんしなくて、『ごめん』。こ、
これからは！」

あたしも…その、ちゃんと大人になる、から…」

総督「何を言つているんだお前は」

なかなかのどんづかえて出でこない言葉を出そりと頑張つている
と。

出鼻を挫かれた。

リコ「へ？」

総督「お前はいつまでたつても私の娘だらう。孝行なんてお前が今
ここにいる。

それこそが一番の親孝行だバカ者め

リコ「え、でも今まで結構迷惑…」

総督「それがバカだと言つんだ。娘が親に迷惑かけて何が悪い?」

リコ「…この親バカ!せつかく一人立ちしょひと思つたのに何さ
！」

総督「親バカでなくて娘をわざわざ仕事場にまで呼び寄せるか!」

それもそうですね

秘書

総督「何か言つたか?」

秘書「いいえ何も?」

…父さんと素でぶつかつたのなんて何時ぶりだらう、忘れちゃつた
な…。

7年間会つてなかつたけれど。

その間の疎遠さなんて、どこかに行つてしまつたよひだ。
これが家族か、と実感していると。

ふと、思い出したことがあつた。

リコ「…ねえ父さん、一個お願いがあるんだけど総督の娘権限使つ
て良い?」

総督「娘には権限はないから私の権限を使おう。何だ?」

リコ「…本つ当親バカ…えっと、森に直してもらいたい機械がある
んだけど…」

——ハンターズギルド：sideマリー，M，ミスラ

恥ずかしい。

穴があつたら入りたい。

事の発端はそり、レンジャーさんの一言だった…

——20分前、ハンターズギルド

レンジャー『なあ、そういうえば道中でこんなメッセージカプセル拾つたんだが

お前ら何か知らないか?』

H/Mコア『え? リコのじやなくて?』

レンジャー『いや、リコのなんて落ちてたか?俺らが拾つたのは匿名なんだけど

…その、私たちを助けてください、って内容で

な

エミリア『そつか、そういうえばあたし達リコのカプセル回収しちゃつてたつけ…』

レンジャー『あー、つまく表現できねえからこいで再生するわ。』
えっと、確か

えつと、確か

「……お、あつたあつた』

照的だね。

……とあれ？タリーベ行け？』

マリー『あ、あはは……お腹痛くなつちやつて……』

?

マリー『あ、あれ？おかしいな、あはは……』

ルがあつたん
だつてさ!』

だつてさー

マリー『...何の罰ゲームよ、もう...』

マニマニ河で川の川である

レンジャー『お、いいのか?』じゃあ再生始めるぜ?全部一氣で良いよな?』

『アーティストのお父さん』ニニギ

『ちゃんと録音できるかな?...うん、大丈夫そうだね?』

『ええと、じほん。』

『このメッセージカプセルを拾つたあなたにお願いがあります。』

『…私たちを、助けてください…』

『…私たちは、この森の奥に行きます。…きっと、その先までも。』

『ですから、このカプセルを田畠に追つてきてくれださい。』

『…強制じや、ないですけど。』

『それでは、また後で…私に会えたらい。』

『…ありがとうございます、追つてきてくれたんですね?』

『…え?違つ?ただ歩いてたら見つけただけ?』

『…や、そんな事言わないでください…』

『とにかく…』

『…私たちは、あなたが。もしくはあなた方が助けに来てくれるのを待つてます。』

『…では。』

『「このモードメント。何なんでしょうな?』

『明らかに今の時代の物ではないですし……』

『まあ、考古学は専門外なのでわかりません。』

『……次は、洞窟に下ります。』

『あなた方と会えると信じじて。』

『あ、うつ……』

『溶けちやしきじや、ありますん?』

『私も熱暴走しそうです……』

『モンスターの死骸に沿つて進んでください。』

『私たちはずの先にいます。』

『また、あのモードメント……』

『「この辺、ちょっとだけ暑や和らぎましたかね?』

『まあ、地元のおつて暑いこともしませんでしたが……』

『ただグツグツ溶断に慣れてしまっただけかと。』

『はあ。温度変化が激しいので体温こなれをつかへだせこね?』

『おっ、この辺もつ涼しこですわ。』

『溶断のせいに元気には清流があるとは……』

『…飲んでみます。』

『ふふつ、「冗談です。お腹壊したり元も子もないです。』

『…ついでに自分で汚れちゃうんな……』

『…はあ、綺麗な景色なのよ。』

『これからここを、いかだに乗つて進もうと思ひます。』
『…ああ、なんとか頑張つて追つてしまへだせ。』
『…だつて他に手段なねつであります。』

『…待つまえ。』

『「うへ、はああ……』

『大丈夫でしたか?……つて、これを聞けてたら大丈夫ですね。』

『見たところには文明の手が入ってるみたいですね。』

『んー、研究所みたいだけ?……』

『専門外なんでわかんないです。』

『同じ景色同じ質感の部屋ばかりなんで迷わないよつて板をつけ
てください。』

『ではでは。』

『見てください、またあのモニコメント。』

『全文解説できたみたいなので一応伝えておきますね?』

『光ありて　影を成し　対ありて　対無く　不在の在　かかる姿の
転生の　宴
無限なる　律　ijiに　印　結びなさん　ムウト　デイツツ　ポ
ウム……』

『……私たちの見解では、ムウト、デイツツ、ポウムのそれぞれがこ
れまでの

「…あのこのモードメントを象徴してゐるんじゃないかなあ、って…」

『あ、もう行く?ほいほい、今こくなー』

『…もう行くみたいなんですいませんこれで。』

『あ、ゼル…は…』

『け、警備のマシナリーが発生してたらめんなさい。』

『私たちの仕業です。』

『…ともあれ、ここまで追つてきてくださいな実力的には楽でした?』

『それともあの量は辛かったですかね…』

『てへ、すいませんでした。』

『…間隔が空いてしまってすみません。でも、事情があつて。』

『今私たちは、あなた方のよく知るだらう人と合流することができます。』

『ロコさんです。レッドリング・ロコ。』

『私たちほしの人に会つたためにここまで降りてきたのですが…』

『どうやら、少し斥ばれてしまわなければならぬような事があります』

まして。』

『危険だ、と感じたらここから上に戻つてください。』

『好き勝手言つてしません…けど、これから先は安全が保障できません』

なくて。』

『…それでも、私たちの力となってくれるなら。』

『私たちは一番奥、この暗い力の最も濃い場所に行きます。』

『…わがままに振り回されてください、ありがとうございました。』

『…でも…』

『…いえ。 わよひなら。』

——ハンターズギルド：sideH//リア・リバー

えつと、何からシッコンで良いやら。

「マリーは顔真っ赤にして俯こちゃつてゐる…

え、でも、この声。^{ヌム}

H//コア 「ええっと… マリー？」

マリー 「… 私がやりましたっ！」

そんな犯行の皿供みたいたに画眉しなくて…

とまあずはそのままと拳げた手を下ろしながら…

H//コア 「ちよ、そんな思い詰めたような声出でなごでよー。マリー」「だつてだつて！恥ずかしきじゃん！」

レンジヤー 「おお、これ残していったのはマリーだったのか」
フォース 「え～？あたし初めてマリーの声聞いたときに解ったけどなあ？」

ハンター 「あ、気付いてたし！…とどと、当然っしょー。」

H//コア 「追い打ちはやめたげで…」

…あのキャストがこの場にいなことがせめてもの幸運だらうか。
そんなこんな話してこむりながらマリーは。

その場に龜のようづくまつてしまつていた。

詳しく述べながら正座で体を伏せて膝を両手で囲つて顔をその上に伏せた状態。

マリー 「穴があつたら入りたい… むしろ穴に埋めて欲しい…」

H//コア 「ちよ、落ち込みすぎだつて…」

マリー「だつて…まさか本当に来てくれるなんて…しかもこんなに

親しくなるなんて完全に想定外だもん…」

レンジャー「はつはつは。いやでも、俺らはこのカプセルの道案内に結構

助けられたけどな？」

フォース「そーそー！あんまり迷わないですんだし、結果的に皆助けられて大満足！」

「これ以上のハッピーエンドはそうそう挙めないよ…」

ハンター「そうだつて！それに俺、結構あなたの声好きだぜ！？」

レンジャー「アホかどこ薦めてんだ！」

ハンター「いってえ！拳骨は痛えつて拳骨は…」めん2発目は止めてください！

…痛え！」

マリー「…穴がなかつたら掘ればいいじゃ…森に行きたい…もふもふのラッピー

に包まれて癒されたい…」

H//コア「…伏せたまま言つてもねえ？」

その時、がばあつ、と効果音がつきそつた勢いでマリーが顔だけを上げた。

うおつ…首、痛くないのかな？あれ…

マリー「さつだ森つて言つたらーH//コア、亜空間航行船どうじょう…？」

H//コア「…ああああ…すつかり忘れてたあ…

そういえばあれの故障であたしたじめにいたんだった……

レンジャー「ん?何だ、その座空間なんやけりらって?」

H//コア「そういえば話してなかつたつけ…そもそもあたしたち、パイオニアの人間

「じゃなくつて…」

かいつまんべ、事実だけを話す。

私たちのいる理由と、来た理由を。

…面白こととに、話終えて難しい顔になつてこるのはレンジャーさん一人だけだった。

レンジャー「にわかには信じがたいが…嘘をついたつてメリットはねえしなあ…」

フォース「え、でもマリーとか今の私達の技術じゅ無理じやん? 納得できるよー」

ハンター「俺はもうマリーのことが何でも信じるぜ…」

H//コア「話したのあたしだつてのー」

マリー「でも、嘘じやないんです…本當で、お、何なら航行船見に行きませ?[?]」

レンジャー「いや、信じよづ。今更仲間を疑う俺じやなこさ

「かなかきやだし…」

H//コア「それに、ラグオルに降りるつていつたらナギサも連れて
ナギサ」呼んだか?
「…」

と、聞き慣れた声が頭上から聞こえる。

…やうやう、ここにも連れていかなきや、つて…？

マリー「あ、ナギサ。ちょうど今…ええええ…？ナギサ…？」

エミコア「え、ちょ、ナギサ…？あなたもう出歩いて大丈夫なの…？」

そこには入院着ではなく、いつもの服に身を包んだ隻眼の剣士が立っていた。

ナギサ「ふつ。あまり私をなめないで欲しい。もう万全だ」

マリー「いやそんな髪の毛ファサつて決めポーズ取らなくて…！」

エミコア「つてか検査の結果は…？どうだったのか…？」

ナギサ「そんなんに大声を出すと田立つてしまつぞ？…結果だがな、不自然なほど

良好だそうだ。心配をかけたな

フォース「すつじょい…生きるか死ぬから一気に全快だつて…」

レンジャー「まあ、ヒトの生命力侮るべからず、つてどこか？」

ハンター「いや、それだけじゃ説明つかねえくらいの治癒力だろ？
よ…」

ナギサ「何を言つてこる。いつものことだ。体調不良は寝れば直る

…こやいやいや…」ナギサ、あんた本当に…

マリー「何て言うか、タフだねえ…」

エミコア「マリー、台詞奪わないでよ…」

一気に気の抜けたあたし達を差し置いて、ハンターズの皆がナギサ

に一斉に
話しかける。

…それを見て、しみじみとマリーと語る。

マリー「それ以外の選択肢ないでしょ」つってこれ…」

マリー「だよね…」

台詞はどちらでも、言いたいことを言ってくれたと思えば。
…それでも、本当にいつも通りのナギサで驚く。

マリー「…一体何食べたらそれだけ丈夫になるのかねえ？」
マリー「あつとプリンだよ。ほら、コードも大好物じゃん」

なるほど、納得。

…あたしもプリンは好きだよつー

マリー「一皿一食プリン入れればああなれるかなあ…」
マリー「…うん、マリリア。目線がいやらしいよ？」

マリー「べ、別に胸なんか見てないですよーーー！」
マリー「あはは…年相応で、私はいと細つよーーー！」

マリー「慰めるなーー！ルリアに比べたら全然あるでしょ」つがーーー！
マリー「責めてないよーー！めんじめんつてーー！」

ぽかぽかと、大げさに拳を振り回して発散する。

…あるよ、あるある！あたしの周りが異常なのーーー！

…かく言つマリーもそこまでではないんだけど。

あんまりこじるヒイダが怖いから泣かないでおく。

…ヒイダ、かあ。

ヒコア「ね、マコー？」
マコー「はー？」

マリーが顔をかばいながらひびきを覚える。
…そこまで襲わないってー！

ヒコア「せっせつ、その…ヒイダに早く会いたい、よね？」
マコー「わかったー！」

答えは即答。

…さて、そろそろ潮時かな。

ヒコア「じゃあさ、田密間航行船を見に行こう。もしかしたら
時間が経って起動できるかもしれないし」

マコー「本当ー？うん、今行こうすぐ行けー！」

ナギサ「ああ、そうだな。ハンターズの話、そろそろ時間のようだ
ヒコア「ナギサー？そろそろ帰れるよくなつてないか確認して
行くつ？」

ハンター「え、つてことはマコー帰っちゃつたー？」
マコー「ふえつ？あ、ええと、はー…」

レンジヤー「ばっかおめえ、何寂しそうこいつなんだアホかー俺らこ
は俺らの、

「マリーはマリーの生きる世界があるだらつよ！」

フォース「そーだそーだー！未練がましい男はモテないんだぞーー！」

ハンター「ぐふつ…わ、わかつたよけやんと見送るよ…」

そう、マリーは人当たりが良いからモテちゃうんだよなあ…仕方ないか。ハンター君には泣いてもらおう。うふ。

エミコア「てわけでラグオルに降りるんだけど。リコにも挨拶していかなきゃ…」

ナギサ「いや、リコは今總督に呼び出されていのさすだから会えまい。皆、リコ

に會して話しておこてもういえないだらうか？」

レンジヤー「ああ、言つておく。じゃあ…短い間だったけど楽しかったぜ？」

マリー「ううううう、できればまたお会いしたいですが…それと、もう会うことは

なことと思こます。でも、さよならは寂しこですから…まだどこかで」

フォース「エミコアーまたねー！」

エミコア「ためらいなく再会を誓つねー？…うふ、またー！」

ハンター「ぐああ…間に立ちふさがる壁は時空間の壁かあ…厚いぜえ…」

ナギサ「何を悶えているんだ、傍田見て変だぞ？」

ハンター「やかましー！」

ナギサ「ふふつ、それだけ元氣なら問題はあるまー。またな

ハンター「ああまたな。今度くるときもマリー連れて来いよー。」

ナギサ「いっそ清々しいモビリティに頬張て忠実だな…」

名残は唄きないけれど、夜の森は危険だから。

田の上がつてこる今のうちに行かなければ。

あたしたちは、別れを惜しみながらも転送装置へと歩いていった。

マリー「あの、…ありがとひーれこました！まだどこかで…」

ナギサ「楽しかったよあんたら！それにあたしたちを助けてくれて
ありがとう！またね！」

ナギサ「私からもう一言いいだしつか。…ありがと。また、いつか
会おつ」

座標軸を亜空間航行船の近くに設定する。

…このボタンを押したら、あたしたちは転送される。

ハンター「ま…、また、なー！楽しかったー！」

レンジャー「おうよー！そつちの世界に屈辱くなつたらいっつからこ來い
！大歓迎だ！」

フォース「まつたねー！ばいばーい！」

最後は笑つて別れられるといいよね。

：何だか柄にもなくセンチメンタルな気分に押し負けないうち、
あたしは転送を開始した。

Pioneer2・Day Down(後書き)

お疲れさまです、60000文字超(。・。・)

総督が報われて良かつた良かつた(：；＼—＼)

読み切つてください、ありがとうございます
…さてさてそろそろ机に向かいますか…

「」意見、「」感想などお待ちしております！

ではでは

Can still see the light - ENDING THEME

連日の投稿、Angelicaです^_^(ーー)^\n

やつらと今回で『時空を越えて』、終了しましたーvvv.
長かったですねえ..

とはいえ、作品自体はまだまだ続きますねえ、未永くおつきあいください

それでは、どうぞー

——森エリ亞、始まりの場所：sideマリー、M、ミスラ

マリー「ううっ……やっぱりうちの転送装置は慣れないね……」

Hミコア「忘れてた……頭がぐるぐるする……」

ナギサ「なんだ、二人とも軟弱だな。私はもう慣れたぞ？」

マリー「す、う……」

Hミコア「いや、これが『ユーマンの適応力』」

ナギサ「？まあ、それほど誉めるな」

マリー「……誉めてるのかなあ……うう……」

まさか一回に2度も酔うとは思いもしなかった。

…同盟軍のフローダーより酔うよこれ…

しばらくその場で休憩し、酔いが醒めるのを待つ。

とりあえず遠くを見ようと、森の木々を見渡すと不思議と現在地が確認できた。

どうやら私達は、亜空間航行船の近くまでは歩いても10分とかからなそうな場所に降りたみたい。

Hミコア「…ふう。まだよつと気持ち悪いけど歩けるかな。

マリー「はうううう…」

マリー「私ももう大丈夫かな。」めんねナギサ、待たせちゃって

ナギサ「いや、気にするな。ここの大気は好きだから楽しんでいた

よ」

Hミコア「…ん? 楽しんでいたって、何を?」

ナギサ「この空気を吸つて、景色を見渡すことをだ。いい空間だろ
う?」

マリー「…そうだね、人工的じゃない森つて、良いね」

Hミコア「あたしには解らないわ…大人だねえ二人とも…」

ナギサ「何、Hミコアにもすぐに解るか。それではそろそろ行こう
か」

Hミコア「そういうもんかねえ…ん、了解!」

マリー「うん、行こう!」

誰が先頭になることもなく、横に並んで歩き出す。
その間、私達は取り留めのないことを話していた。

マリー「キャストさん、最後の挨拶できなかつたね…」

Hミコア「んー、なんかそういうの苦手そうだしねえ」

ナギサ「キャスト、といつとあの紫の彼か…何だか本当にキャスト然
としたキャストだつたな」

マリー「? 何だかこんがらがつてくる…」

Hミコア「あー、要するにあなたとは似ても似付かないってことよ
マリー「…もしかして私、バカにされてる?」

ナギサ「いやいやそんなことはないぞ?」

Hミコア「そーそー。あんたはあんたでいいのよ

マリー「むう……」

何だか納得行かないな、とむくれる私をよそに盛り上がる一人。
…まあ、いつか。

マリー「あ、そういうえばフロウウンさんにも何も言つてないや…」
ナギサ「ああ、彼か。彼は明日までは絶対安静だと医者が言つていたから

どちらにしても挨拶できないう

Hミコア「え、っていうか山は越えたの？」

ナギサ「ああ。もう大丈夫だそうだ。信じられない生命力だと医者も

言つていたぞ」

マリー「ナギサといいフロウウンさんといい今日は忙しかったろうね…」

Hミコア「しかも一人は退院までしちゃってるからね…恐ろしい…」

ナギサ「…一人とも、なぜ同情するような目でバイオニアを見上げて

いるんだ？」

しかも本人は重体で運ばれたという自覚無し、と。

…お医者さん、お疲れさまでした…！

Hミコア「あははー、何でもないよー？」

マリー「やうだヨー？」

ナギサ「…マリー、口調がチヨルシーのようになつてこるだ？」「マリー「えつ、真似したつもりはなかつたんだけどな…」

あはは、と笑い合つ。

…わい、そろそろ目的地に着くはずだけ…？」

H//コア「お、あつたあつた！…あれ？」

マリー「おー、あつたね…んん？」

ナギサ「ん？何だ、リコじゃないか。ここで向をしてくるんだ？」

私達の船の近くに、見覚えのある赤いヒト。

別れを告げられなかつた仲間の一人が、そこへいた。

リコ「遅いじゃないか。何つて…修理だよ修理。ラボの面々に腕を振るつて貰つてたのさ」

H//コア「え、本当…？ありがと…」つて、修理できたの…？」

リコ「仮にもあたしらだつて宇宙を旅してここまで来たんだ。ワープ航法の応用で何とかなつたさ」

ナギサ「…よくわからないのだが、船は直つているのか？」

リコ「ああ。起動確認はしたけど動かしてない段階だけね。あんたら

を置いて船だけどつか行つてます、じや話にならないだろ

う…」「マリー「さすが…よく考えてらつしゃる…」

リコ「なあに、あたしも研究者の端くれだからね。それくらいは解る。

…ラボの面々は、仕事が終わったからもう帰つてもらつた

よ

…あれ?といつと、何でリコさんそこへ?

マリー「あの、リコさんは何で残つてるんですか?」パイオニア2に帰つて

くれば、向こうでお別れもできたらばずですか?」

リコ「あー、それは、その…ハンターズの奴らの前じゃ恥ずかしくつてしま。

あんたらに、言いたいことがあるんだ

HICOA「改まつちやつて、いつたいどうしたの?」

ナギサ「まあまあ、聞いてみようじゃないか。リコ、言いたいこととは?」

リコさんはそのままポリポリと頬を搔き、…腕を組み、空を見上げて。

その後顔をこっちに向け、私達に視線を合わせて言った。

リコ「皆がいてくれたからこそ、あたしは大切な人を失わずにすんだよ。

本当に、本当に、ありがとう

ナギサ「…私達が手伝つたのは半分だけだ。それに、心がおれそうになつた

貴女を立ち上がらせたのは他でもないハンターズの皆ださつ。

礼は彼らに言つてしましい

HICOA「そうだねー。何だかんだ言つてあたしら案外何もしてな

いし?」「

マリー「私達は、私達のしたいよつじただけですしお礼を言わ
れるな」

彼らですね

そりこいつとコソセトは、くつくつと笑つて言つた。

リコ「ふふ、そういう風に思つてたよ……せつあんたら、つづいて
凄いね」

予想してなかつた答えに、キョトンとしてしまつ私達。

ナギサ「何がだ?」

HIIコア「あ?」

マリー「……凄い、って、何がですか?」

リコ「マリー、あんた確かにじがない傭兵です、って言つたね
?それ、

周りからの評価と違つだらう?」

いきなり名指しで指摘され、ドキッとする。
平静を装つて答えるとするが、……いけない、視線が泳ぐ。

マリー「い、いえ、そんなことは……」
リコ「いいや違うね。あんた、あたしと同じにおいがする。……どこ
でも、

英雄つて奴は大変だねえ……ふふ」

ナギサ「見抜いた!」

HIIコア「……その洞察力、ちょっと欲しいわ……」

リコ「ふふ、ハンターズの奴らが言つてた『英雄は一人じゃない』つての、

言い得て妙だよね。あの状況だと、間違いなく英雄はありますからだ。

でもあいつらは自覚してないだろうね…英雄つてのは、きっと皆

そんな奴らばかりだと思うんだ。あたしも、もう一人じゃない。

あんたらが教えてくれたんだ。だから…」

そう言って、リコさんが差し出したのは3枚のカード。それを、私達一人一人に渡していく。

リコ「それはあたしのギルドカードだ。お守り代わりにでも、持つてて」

エミリア「へえ…作りが違うけどこっちでいうパートナーカードみたいな

ものかな？ありがとう…」

ナギサ「ああ、ありがとうリコ。と、いうことはこれで連絡が取れたりは

…するのだろうか？」

マリー「こ、こっち見られても…試して見なきや、そろばっかりは解んな

かな…リコさん、ありがとハイゼーします…」

そういうて、私達もパートナーカードを渡す。
いつかまた、この繋がりが意味を持つよつこ。

リコ「ああ、皆ありがとう…ふふ、師匠の以外で初めてもらつたよ
マリー「…ええ！？」

リコ「今まで寄せ付けてなかつたからね…手始めに、パイオニア2
に戻つたら

あいつらにもらえないか聞いてみるよ。…少し、怖いけど

エミコア「リコなら大丈夫だつて！自信もつて！」

ナギサ「そうだ。私達のお墨付きだからな。リコなら大丈夫だ」

マリー「うん、リコさん、仲間を信じて！」

リコ「…仲間、か…うん。あたし、頑張つてみるよー…ありがとう
人とも！」

エミコア「その意氣や良し…さて、あたしたちはあたしたちの場
所に帰る

としますかあ…」

エミコアの一言で、止まつっていた足を船へと運んでいく。

軽快な音が響き、ハツチが開く。ナギサ、私、エミコアの順で中に
入る。

ナギサ「名残惜しいな。だが、リコ。…また会えると信じてる」
マリー「リコさん、縁があればまた会えます……また会いましょう
！」

エミコア「今度はプリンでも奢つて挙げるよーじゅあまたねリコー」
リコ「ああ、また会おうー！」

中に入ると、リコさんの声はもう聞こえなくなつた。
けれど、モニターに映る赤いヒトは、一息も向かつて小さく手を

振り続けていた。

エミリア「席についたね？ベルト締めたね？オッケー……すごい、本当に直ってる……！」

亜空間軸計測器、オールグリーン！」

そこで、エミリアが外部マイクを起動して叫ぶ。

エミリア「じゃあねリコー頑張つて！あたしたち、応援してるから！」

モニターに映る人影が小さく、でもはっきりと頷いた。
…うん、十分。

エミリアが、外部マイクを切る。

エミリア「行くよーシステム、ドライブ！」

もう何日も前にみたかのような、視界が白く染まる光景の直後のブラックアウト。

少しの浮遊感のあと、私達は落ちていく感覚を感じることはなかつた。

浮遊感が消え、重力に引っ張られる少しの倦怠感。
…それは懐かしいほどに感じ慣れていたものだつた。

エミリア「ふつ……！戻ってきた、戻ってきた！」

マリー「お疲れさまー！……うはあ、何だか一気に疲れが…」

ナギサ「私は寝たから大丈夫だが……一つだけ、気がかりなことがあるんだ」

エミリア「ほお？」の状況でさらに気がかりなこととはいかに？

ナギサ「いや、ラグオルのことなんだが……フロウウェンは、ダークファルス

その物だったわけではなかつたから。大丈夫かな、とい

マリー「きっと大丈夫だよ。リーフさんもいる、フロウウェンさんもハンターズの皆もいる。ヒトが思いを一つにすれば、奇跡でも何でも

起こせるつていうのは私の経験からいつて確かだよ

エミリア「そういう。ヒトの思には無限だよ？」

ナギサ「ヒトの思には無限、か……そうだな。それだけで……無限の可能性がある

のだから。彼女たちはきっと大丈夫だな」

そうそう、と呴いてハッチを開ける。

帰つてシャワー浴びて……ゆっくりご飯が食べたいな。

エイダ、帰りが遅くなつて心配してないかな？
などと考えながら、私は試験機を降りた。

「何だろ? なんかとつても騒がしい。

事故を起こした私たちが帰ってきたから、といつわけでもなさそうだけれど……?」

——惑星ラグオル、森エリア・試験機跡地・sideリコ=タイ
レル

リコ「頑張つて、か。うん、頑張るよ。ありがと、ヒミコア……そ
れに、皆」

まるでその場に最初から何もなかつたかのよつた雰囲気を出していく
ところに、

あたしは呆然と立ち尽くしていた。

きつとその頑張つて、はあたしだけに向けたものじゃない。それは
多分、

あたしたち全員に向けて言つたことだと思つ。

リコ「……このラグオルに異変が起きている、それは確かだ。ダーク
ファルス、

か。軍でも手に負えなかつたというなら、ハンターズと……

彼らとラボは

あんまり仲良くはないんだけど……ラボの連中に頭を下げるか。思いを

一つに、ね……簡単なようで一番大変なお題だ。ああ、軍にもお願いしに

いかなきや……ふふ、これから忙しいなあ！」

うまく父さんのツテを使うかな、何て考えていると。後ろから、声をかけられた。

レンジャー「……おいおい探したぜ？ ラボの連中と一緒に降りたって聞いて、

もしかしたらうつて思つたら……」

リコ「ん？ ああいや、彼女らの船を直してもらつていってね。ハンターズとして

方針の違いからラボにはあまり良い印象を持つてはいない、
だろ？」「

渋い顔をしていたレンジャーの顔が、さらに渋くなつた。
それが逆に子供っぽく見えて、少しだけおかしくなる。

レンジャー「……身も蓋もなく言つねえ……まあ、そういうこつた」
リコ「ふふ、だが奴らも話してみれば悪い奴らじゃなによ。むしろ協力関係を

結べれば百人力だ。……なあ、レンジャー？」

レンジャー「名前で呼べって……ああ、名乗つて無かつたっけか。何だ？」

リコ「あたし、これからバイオニアの人々の思いを一つにする。軍には師匠、

ラボにはあたし…ハンターズをまとめの手伝ってくれないか？」

レンジャー「…俺で良いのかよ？」

リコ「おまえが適任だと思ったからこいつなんだ。冷静な状況判断、俯瞰の視点…リーダーにはもつてここにどうづ？」

レンジャー「まあ、そつ…なのか？」

リコ「そなんだよ。あたしは、遺跡の一一番奥にいる化け物を倒したい。いや

倒さなきゃこのラグオルに平和はないんだ。手伝ってくれ…頼む」

あたしの顔から笑みが消える。…頭を下げて、頼み込む。…あたしには、いつするしかできない、と思つ、から。

レンジャー「おいおい、誰も断るなんて言つてねえぞ?」
リコ「…それじゃあ!」

顔を上げた自分の目が輝くのが解る。

…あたしは、やっぱり仲間が欲しかったんだな、と再実感。

レンジャー「ああ、やらせてもらひつわ。ナビ一条件付きだ」

リコ「何だ? 何でも聞く!」

返ってきた答えは、直ぐにでも出来るような簡単なことだった。

レンジャー「俺のことは名前で呼んでくれ。レンジャー、だとハンターズの

全体の3分の1が振り返るからな

リ「……あ、ああ！わかった！」

「ぐぐくと首を縦に振る。以前のあたしからは考えられないな。
レンジヤーが懐から一枚のカードを取り出して、あたしに渡してこ
う言った。

レンジヤー「ほら、これが俺のギルドカードだ。宜しく頼むぜ？」
リ「」

リ「……」、これがあたしのだ…ああ、ようしぐ……」

Hミコア、マリー、ナギサ。仲間の暖かさを、教えてくれてありが
とび。あたし、頑張るよ…ううと、ここから一緒にだから、頑張れるよ…

最後の「やんの句の――」自分で言え……ゲフンゲフン、想像した名前を入れてあげてください。

あえてこちからは名前の特定はしないでおきます。そっちの方が、自由かと思つて（・・・）

まあこれからどうなるのか…

…もう頭の中では出来てるんですけどさすがに机に向かいます（汗

）」意見、じ感想などよろしくおねがいします！

ではでは

ハイタ「マリーの帰りが遅い」（前書き）

明けましておめでとうございます！

ビックリお久しぶりです A n n e l i c a です ^ _ _) ^

新年早々なんだか重めになつてしまつた再新話ですが、

事故のあとも何事もなくハッピー エンド、つてこののは出来すぎだ
らつと友達と話しておりまして。

… いやこう分岐もありかな、って感じで読んでいただけると嬉しい
です (。ー。)

それでは、ビックリ-

エイダ「マリーの帰りが遅い」

——??:.: Sideエイダ

ふと目を覚ますが、気持ちのいい目覚めではなかつた。鈍く響くよつな頭痛、痛む体中の関節。

「」は、一体どこだろう。まるで擦りガラス越しに見ているかのような視界に目を凝らす。

ん、あれ？あのシリウットは…

? ? ? - : . . .

ああ、やっぱりそうだ。
私の一番好きな声。

お帰りなさい、って言わなきゃ。
心配かけて、つて怒つむかせね。

そうして声を発しなうとして初めて気がつく。
…どうしてだろう、口が動かない。指一本すら動かせない。

不思議に思い、自分の体を辛うじて見る。

あれ? 私は、何でこんなことになつてるんだっけ…

ああ、どうしよう。また、意識が、遠く……
マニー……

――2時間前、亜空間研究施設・Side主任「実験責任者」

どうしてこうなってしまったのだらう。

慌ただしく駆け回り、亜空間航行船の消失の原因究明に努める
有能な部下たちを見て、思つ。

何を間違えた？

何処で間違えた？

自問するも、答えは出ないまま。

亜空間軸に接続するだけで航行船が消える？

…そこまで不安定なものだつたのか、亜空間というものは。
いや、実験本番の前に私と部下2名で同じ条件下で試行はした。

その時は何の問題もなかつたのだ。

ただ話題性を持たせるためにはあの小さな博士の力が要つた。

実験で提唱した彼女自らが安全性を実証、そういう手筈だった。

ならばなぜ？どうして今に限って亜空間が彼らを飲み込んだ？

答えは解らない。

…彼女たちが無事に帰つてくることができるかどうかさえも。

現在時刻は午後8時。事故発生から半日近くが経とうとしている。メディアを押さえつけておくのもそろそろ限界だ。

真相を話すか？…それはするべきでは、いや、したくない。
なぜか？答えは単純。

私の責任になるからだ。

この実験は私名義で行われ、中途の事故等の責任は全て私のもの。それは同時に、この事故が発生した時点で私の科学者人生の終わりを告げるものでもあった。…そして、それは告げられた。

亜空間航行船という貴重な研究結果の消失、というだけではない。あの天才少女はこの太陽系を救つた立役者もある。

それに、彼女が連れ込んだ二人のうち一人はかの『英雄』様だ。もう一人は…話題になつていなかつたが恐らく同類だろう。

この3人の消失。それは、私を糾弾し辞職させるには多すぎる程の要因だ。最悪、ガーディアンズに連行もされてしまつだらう。

『英雄たちを消した最悪な科学者』のレッテルを貼られて。

…何とか、私がこの地位に留まり続けるためには…何か…無いか。

思考を試行してみよう。

例えば航行船が戻ってきたら。

そうしたらまず私はあの3人を迎えよう。

そして謝罪の弁を述べ、どうか気を悪くしないで欲しい」と言おう。

その後、あわよくば私の犯した失態をフォローしてくれるように頼み込んでみよう。…承諾されるかはさておき。

うん、まあこんなものか。

ただ押しの一手が弱い気がするが…そこは出たとこ勝負だ。

考えていても上策は浮かばなそうだ…次。

例えば航行船が戻つてこなかつたら。

…期限は長く見積もつて今夜12時。日付が変わる頃。

3人の犠牲を述べ、一刻も早い解決を目指していると丸め込む。

そしてなによりやつかいなのが、その上でまだ亞空間研究続行の旨を万人に納得してもらわなければならないということだ。

メディアは敵に回るだろう。それを回避する術を…私は持たない。だとしたらどうしたらいい?私は次に何をすれば良い?

考える、考える。

私がこの地位に留まる方法を。

：まずは前者、航行船が帰ってきた場合の策を考えるとしよう。
彼女たちが私をガーディアンズへ訴えずに済ませる方法は何だ。

逆に考える。私だったらどのよつな場合に訴えない？

：ありえない。これだけの損害を被つておいて訴えないなど。
だが訴えられない何らかの理由があつたら…あるいは。
その理由とは？

簡単だ。圧倒的な弱みを握られる」と。

私の場合ならば…ある団体から研究資金を調達していくことを
盾にされてしまつては何があつても訴えることはできない。

だが彼女たちにそんなやましい事情があるだろつか？

いや、噂すら聞いたことがない。あつたとしても、それは弱い。
なぜなら内輪のみでしか通じない弱みの場合は公表されても
負うダメージは少ないからだ。

：いや、待てよ？内輪？

家族、あるいはそれに近しい何かを利用できれば…

そうだ、人質。

人質を取ることができればうかつな行動はできまい。

としたらあの天才少女は無理だな。両親が共に傭兵だ。私では
太刀打ちできるはずがない。

あの眼帯の少女は…家族はいないと聞いた。

それは適正検査の時に調べもついているから確かだ。

…あのキャストは?
キャストに家族がいる、とは聞いたことがない。

だが彼女はキャストのようには到底見えない変わり種だ。
それに、パートナー・マシナリーを大層大事にしていると聞く。

そのマシナリーを人質にできれば、あるいは…。

どうやって人質に取るかはさておき、これはこの方向で…。

としたら残るは後者。航行船が帰つてこなかつた場合…
と、そこまで考えたところで。

インカムが鳴り、私宛ての通信を告げた。

思考をじゅまされた腹いせに軽く舌打ちをし、応答する。

主任「私だ、何だ?今忙しいのだが」

受付嬢「申し訳ありません。ですが、面会なさりたいという方が
いらっしゃっております」

主任「はあ?帰つてもら…いや、待てよ。誰だ?」

何というタイミングだ。
これはもしかすると…?

受付嬢「はい。何でも研究に参加なされているマリー様の身内の
方だとのことなのですが…」

主任「歯切れが悪いな。誰だ?」

なるべく感情を知らせないよう平静を装つてしゃべる。

受付嬢「…その、マシナリーでして。パートナータイプの。どうすればよろしいでしょうか?」

主任「…通せ。応接室でなくて良い。直接ここに通してくれ

内心でガツツポーズを取る。ビンゴだー

受付嬢「了解しました。では特別棟モニタールームへ案内します」

主任「ああ、頼む」

そこで通信が切れる。

何という偶然、何という奇跡。

私はまだ星靈に見放されとはいなかつた!

主任「…あー、そこの中。今時間良いか?」

部下「はい。何でしようか

主任「来客用の簡素な椅子と、毛布を一枚持つててくれるか。

両方仮眠室近くの倉庫にあつたはずだ」

部下「了解です。では行つてきまーす」

主任「ああ、頼む」

…口を開く度に笑いそうになるのを何とか押さえれる。

準備は万端にせねば。

もしも暴れた時に締めあげるもののがいるな。

…暴徒鎮圧用のフォトンロープを使おうかと思つたが、却下。

乱暴すぎるのはかえつてよくない。

ここのは田式の繩を使つた。

あとはどうやって大人しくさせらるかだが…

護身用、といつ名前で持ち歩つてゐるスタンガンの電圧を上げれば。

突き詰めたところマシナリーだ。倒くらうとするだらう。

航行船が帰つてこなかつたときのための案は後で考へるとしよう。

まずは倉庫から繩を持つてこなければな。

私は一人、誰にも気づかれないように部屋を出た。

――2時間前、亜空間研究施設前・sideエイダ

マスターがまだ帰つてこない。

亜空間航行の試験にここまで時間がかかるとは聞いていない。

いやもしかしたらマスターがつづかり私に言い忘れていただけ
なのかも知れないのだけれど。

それでもこの時間まで連絡一つないというのはおかしい。

掃討任務とかではないのに。

心配性だな、と笑われてしまうかも知れない。

でも仕方ない。心配なのだから。

逆に「心配かけたくせに」って言おう。うん。
とにかく居てもたつてもいられなくなってしまった私は、マスター
のこるはずの亜空間研究施設へと足を向けていた。

…足を向けるだけにか、正門まで来てしまった。

もう戻り返せない、とりあえずはマスターのところに…

と思つたが、その前に受付通れるかな…

中身はこんなでも外見はマシナリーだし。

ううん、もう迷わないって決めたんだから。

ぶんぶん、と頭を振つて意識を揺るがせないよつこす。

よし。深呼吸して…まずは道を聞い。

ちゅうじ正面入り口の前に守衛が立つていたので尋ねてみる。

エイダ「すみません、お尋ねしたいことがあるのですが」

守衛「……ん？お嬢ちゃん、パートナーマシナリー…だよな？」

エイダ「ええ、はい。いえ、それは置いておいてですね。

この施設の受付の場所をお教えいただけますでしょうか？」

か？」

守衛「あ、ああ…この道を真っ直ぐ進むと表示ができるからわかる
と思つば。ほら、あのオレンジ色のだ」

やつ言い、わざわざ私の田線までしゃがんでくれる守衛。
彼が指さす先には確かにオレンジ色の表示が見える。

エイダ「ありがとうございます。それでは失礼します
守衛「ああ。どういたしまして」

律儀にそう返してくれた守衛の装備をよくよく見ると、ガーディアンズの警護用に支給される装備一式だった。

亜空間研究はガーディアンズも携わって進められる、ところはこういうことか、と一人合点して受付へと進む。

研究所にふさわしいとは思えない噴水のある前庭を進み、中に入る。所内は外見に似合わず、研究所然としていた。

白い無機質な壁、目の痛くなるような明るさの照明。それを反射するタイルの床に、申し訳程度の観葉植物。

吐き気を催すほど既視感を覚えながら、私は受付へと進んだ。

エイダ「…カウンター高いなあ…すいません…」

背伸びをしてビックリ顔だけでもカウンターの上に出すことができた。うつらうつらとしている受付嬢に聞こえるように、少しだけ大きく声を出す。

受付嬢「ひあっ…ん?あれ?いけない、寝ちゃってたか…」

…気づかれていみたい。

もう一度、今度は起きているようなので普通の声量で。

エイダ「すいません、お尋ねしたいことがあるのですが…」

受付嬢「…あ、あ！はい、いらっしゃいました。本田ほどのような

「」用件でしょうか？」

エイダ「無空間軸への接続試験の件でお訪ねしたのですが。実験の終了予定期刻などはわかりますでしょうか？」

受付嬢「特別試験ですね、少々お待ちください」

少々、とほどのくらいだろうと毎度言われる度に思う。

今は切実に、私はあとどのくらい背伸びをしていればいいのだろう。

それから三つほど時間待たず、答えは返ってきた。

受付嬢「申し訳ありません、終了時刻は未定とのことで…他に「」用件はありますでしょうか？」

…ふざけている、未定なんてあり得ない。

受付嬢の顔に僅かな陰りを感じた私は、追求することにした。

エイダ「…居眠りの件を報告されなくなつたら本当のことを書つてください。試験で、何らかのトラブルもしくは異変などは

ありましたか？」

受付嬢「…それは、脅迫ですか？」

…何をはき違えているんだこのとんちんかん。
まあ、尻尾を出してくれたからよしとする。

エイダ「いえ、ただこのまま虚偽を貫き通すのであれば私の知る権利

が侵害されたとして同法の場に立つこともできますが、

今私は

そつまくのことを申し上げたのではありません。ただ、

包み

隠さず事実を述べていただきたいとそう申しているのです

受付嬢「うつ…はい、解りました。今現在、特別試験でトラブルが発生しており、収束の日処が立っていないためあのよう

うな

回答をさせていただきました。トラブルの内容につきまして

は、私は知らされていないためお教えすることができます

ません」

最悪な予感が的中してしまった、と思ひ。

亜空間へ接続中のトラブルなら恐るべく機体はこの空間軸にない。

笑う膝を懸命に伸ばしながら、あくまでも気丈に振る舞ひ。

エイダ「解りました。では私はその試験の責任者に面会を求めます。

見ての通り私はパートナーマシンナーですが、その試

験に

私の主が参加しているためにここまで来ました。このままで

何の収穫も得られずに主の居ない部屋へは帰れません

受付嬢の表情が瞬時に凍る。

そしてその凍つた笑顔のまま、彼女は言ひ。

受付嬢「はい。では責任者に連絡を取らせていただきますが、その

前に

そちらの『主人様』についてお聞きしてもよろしいでしょうか?』

エイダ「私の主の名はマリー、M、ミスラと申します」

受付嬢の凍つた笑顔から、血の氣すらも引いていく。

青を通り越して土氣色になつたその顔のまま、彼女は続けた。

受付嬢「了解しました。しばらくお待ちください」

エイダ「宜しくお願ひします」

そう言いきり、彼女はインカムに手を当て手元を見下ろし通信始めた。

彼女の集中が私からはずれたからか、膝が急に崩れ落ちる。

笑っていた膝を無理に伸ばしていたのだ、限界がきたのだろう。支えを失った体は引力に従い、ストンと座り込む。

そのまま前に上体が倒れるといろをどうにか両手をついて食い止める。

うなだれて下を向いた私の目に映る小さな手に、暖かくようやく冷たい滴が落ちる。

雨?いや、屋内で雨が降るはずなどない。

瞬きをする度にこぼれるそれが涙だと気づいたのは、視界が霞みきつてからだった。

エイダ「…マリー…やだよ…行かないで…」

私の胸を占める不安が、溢れだして止まらない。

そして口からいじぽれでた言葉を、私は認識していなかつた。

H・イタ「マリーの帰りが遅い」（後書き）

：：エイダ逃げて超逃げて…！

はい、約5000文字…何だか初期の3000文字台が懐かしいですね…

お疲れさまです、JPGまで読んでくださいありがとうございました。

さて、少し疑問があるので…

私の文、読点がやけに多いのと…が多いのと約2行ごとにある行間がうつとうしくないかなあ、と最近思いました。

あ、あと会話文の最後に句点がないのも…

やはり句点は付け、読点や…や行間などは減らした方が読みやすいのでしょうか？

未熟な私に一言くだされると光栄です。

それではまた次回 ^ (— —) ^

H//ニア「…向かおかじこ」（前書き）

「こんばんは、A n g e l - i c a です♪（――）
昨日上げたつもりが上がってなかつた…寝ぼけながらの作業つて厳
しいですね…：

さてさて、前書きでありますのでこのあらなんばりがお楽しみく
れでござりますー。

HIIリア「…何かおかしい」

――亜空間研究施設・sideエイダ

一体どれくらいの間そうしていただろう。

気付けば涙は枯れていて、滴の落ちたはずの床も乾いている。それでも私が立ち上がらないのは…いや、立ち上がれないのは。きっとこの胸の奥にある不安に押しつぶされそうな心のせいだ。こんなにも辛いのに、それでも心のどこかで私が叫ぶ。

お前は自分の目で確かめもしていないのに彼女を失った氣でいるのか。

甘えるな、私なら私もじく背筋を伸ばして行動を開始しろ、とい。

…Hの声が私の中の天使か悪魔かは解らないけれど。前を向く勇気をくれたことは、少しだけ感謝してやらないこともない。

エイダ「…マリー、きっと…大丈夫だよね？」

そう自分に言い聞かせて立ち上がり、頬に出来た涙の跡を指でぬぐい去る。

彼女に合わせる顔が泣き顔では示しがつかない。

そう、私はマリーのパートナーなんだから信じよ。きっと大丈夫。そこまで自分を勇気づけたところで、受付嬢が控えめに声をかけてきた。

受付嬢「えーと…ティッシュ、使います?」

エイダ「いえ、結構です。ありがとうございます。」

そつ言ひて、ゴシゴシと袖を使つて時間短縮。

…全く、みつともないとこ見られてしまつた。

受付嬢「そ、そうですか…では、特別棟モニタールームへどこの案内します。」

私の後について、他の部屋に立ち入らないようにお願いいいたします。」

エイダ「ええ、宜しくお願ひします。」

はい、と答えた彼女の後ろを数歩分離れて歩く。
意図してではない。彼女の歩幅が大きいのだ。

私に比べて、だから他の人すべてにいえることなのだけれど。

辺りを観察しながら歩いていると、先ほども感じた強烈な既視感を
覚える。

：何故？この施設にきたのは初めてのはず。
更に観察を重ね、角を曲がったところでその答えはでた。
ここは私とマリーが生み出された施設に酷似しているのだ。
必要最低限の機能しかない物で溢れた空間。
窓ガラスなどない廊下に、むき出しの照明。
機能美と言えば聞こえは良いが、座るためだけでクッション性のないベンチ。

…青ざめてうつむいた顔を映し出すほどに磨かれた無機質なタイル
の床。

全てがそつくり、とこよりそのままのような空間。

軍事施設が払い下げられて研究施設になるなんて珍しい話じゃない。

むしろ研究所を新設するより多いほどだ……資源不足のこの時代では。

だが同盟軍の施設は皆いつのものだらう。

自分を無理矢理納得させ、余計なことを考えなによつ前だけを見て歩く。

マスターでない人の後ろを歩くのなんでもうしたくない。

私のマスターはマリーだけなんだから、どうか無事でいて……！

祈れば奇跡は起こるとマリーは言つていた。だから祈る。彼女たち

の無事を。

……と、不意に前を歩く受付嬢の足が止まつた。

受付嬢「お待たせいたしました。こゝが特別棟、亜空間軸接続特別試験の

メインモニタールームになります。」

エイダ「ありがとうございます。それでは失礼します。」

会釈をして下がる受付嬢を作り笑いで見送る。

表情を作つていないと、多分とても無愛想な顔になつてしまつから。余裕がないのだ。表情を自然に作るほどの心の余裕が。

すう、はあ。と深呼吸をし、足を1歩前に踏み出す。

……担当者はどこにいるのか、受付嬢に聞くのを忘れてしまつた。

エイダ「しまつた……焦りすぎちゃつたかな……」

と、入り口近くで暇そうな人を捜して目を配つていると。

一人の男性がこちらに向かつて歩いてきた。

これはいい、ここのは責任者が誰か教えて貰おうと声をかける。

エイダ「お忙しいところ申し訳ありません。この部署を任せられてい

る方が

どちらにおられるかお伺いしたいのですが…」

？？？「ああ、君が面会にきたつていうパートナーマシナリーだね。

主任なら、やはり…」

そういうて男性がかがみ、私に目線をあわせる。

…首筋にひやりとした物を感じ、それとなく立ち位置を変えようとしたら。

バチン！…という音と共に突然体中を駆け巡る衝撃。

何が起こったのかを理解する間もなく、私の意識は切断された。

――特別棟モニタールーム：side主任「実験責任者」

主任「クク…主任とは私のことだが？」と言つてももう聞こえないな
…」

床に転がったマシナリーに向かつてそう呟く。

護身用のものを合法の範囲内で改造した私特製のスタンガン。

流される電流は市販のそれのおよそ3倍。

死にはしないが、一発でビーストの大男でも昏倒させる威力。

こんな小娘の、しかもマシナリーの意識など一瞬で奪い去る。

主任「あとはこいつを椅子に座らせ、毛布を被せれば待ちくたびれて寝ている

よつに見えるだらう。おつと、瞼を開じさせなければな…

ククク…」

自分でも悪役のようなことをしてこるのは解つてゐる。解つてゐるからこそ次に何をすべきかが容易に想像がつく。

主任「…もう一枚薄い毛布が要るな。まあいい、どうせバレても私の権力に

あらがえる奴などこの部屋には居ないのでだから口止めしておけばいい。

毛布の上から縛つて…と。クク、動けば動くほど締め付けられる縛り方にしてやるわ。」

旧式アウトドアキャンプの方法がこんなところで役だつとは。なかなか古い物もバカに出来ないな、と思いつつ縛り終える。

主任「さて、これで彼女たちが帰つてきた時の策は打ち終わった。あとは

彼女たちが帰つてこなかつた場合だが…」

と、そこまで考えた瞬間。

いきなり部下たちの間から歓声が上がつた。

主任「騒がしいな…おい、そこの中。彼らは一体何を騒いでいるんだ？」

部下「ああ、主任！やつました！航行船が亜空間軸を渡るとさう出す波長

が検出されました！それもたつた今発信されたものです！」

恐らくあと

5分もしない内に航行船は帰還すると思われますー。」

主任「何！？」

部下「やつた…やりました！あ、私はまだやることがありますのでこれで！」

…これは偶然か？いや、そんなに都合よくなことが進むはずもあるまい。

だとしたら恐らく、私がぎりぎり準備を間に合わせたといふことだ。
奇跡、としかいよいのないタイミング。

さすがは奇跡の英雄様たちか、と呟いたその瞬間。

モニターされている画面から田映いほど青い光がほとばしった。
これは間違いない、亜空間を開く際の光…！

部下「航行船、帰還しました！モニター繋ぎます！」

「…」とこう低い音と共に新たなウインドウが出現する。

天井付近に開かれたそれは、金髪をサイドで束ねた少女の顔を映し
だしていた。

エミリア『はー、疲れたあ…試験員3名、無事に帰還しました！
心配かけちゃつてごめんなさいー。』

ペニッフ、と下げられた頭の向こうに一人の少女が疲れはてた様子で
同じく頭を下げているのがわかる。

黒髪と茶髪。英雄は…茶の方だったか。

上がりそうになる口角を必死に抑えながら、マシナリーの方を見る。
閉じられた瞼の奥の瞳には、何も見えてはいない。

とうとう打った手を使うときがきたかと思ったが…まずはこの研究
員たちを部屋の外に出さねば。

主任「あー、少し良いか！」

パンパン、と手を鳴らし注目を集める。互いに抱き合って喜んでいるもの、安堵のあまり崩れ落ちているもの、彼女たちへと伝達をしているもの。

その全ての研究員がこちらを向いたのを確かめ、話し出す。

主任「まずは諸君の尽力に感謝する。君たちのおかげで最終的に被害を出すことなく実験を終えることが出来た。本当にありがとうございました」と。

だがしかし諸君もまさかこのよつたアクシデントが起るなどとは

考えていなかつただろうと思つ。家族に連絡を入れることさえ

出来ていない者もいるだらう。そこで一つ提案がある。事件の原因究明も

大事ではあるが、一度帰宅して明朝から調査を再開したい。何か意見のある者はいるか？」

手は上がらなかつた。彼らの中には準備の段階から携わり不眠不休で今まで働いてきた者もいる。

これは当然の結果と思えた。仲間を考えれば、ここに無理に残るとは言えまい。

あくまで平静を保ちながら、続ける。

主任「何もないようなので作業は即時中断。彼女たちへの謝罪と弁明、そして君たちの

尽力は私が残つて伝えておく。各自気をつけ帰宅していく

れ。尚明日の作業は1時間

遅らせて09：00開始としたい。以上だ。既に苦労だつた。

がやがや喋りながら部屋を出していく研究員達。

中には作業続行を訴える目をしていた者もいたが、私は何も見ていない。

ふと振り返り、天井のモニターを見る。

中には誰もおらず、こちらに向かつて来ていることは自明だった。

主任「…さて、ここからが本番だ…」

緊張の余り分泌されるアドレナリンの興奮に身を任せ、表情を崩す。ガラスに反射して一瞬見えた自分の顔は、凶々しい笑みに歪んでいた。

——特別棟モニタールーム・sideエミコア・ミュラー

亜空間航行船を降りたときから何か違和感は感じていた。

それが何なのか、気のせいかとも思つたけれど。

モニタールームに入つた瞬間、その違和感の正体を知つた。

エミリア「…なんで主任以外誰も研究者がいないの？」

ナギサ「さあ？」

マリー「？…！」

部屋の真ん中に一人立っている主任の背後にある簡素な椅子。毛布が掛けられた上に…縄で縛られているその椅子に座っているのは、あたしたちのよく知るヒトだった。とても小さな、あたし達の大好きな仲間。

マリー「…ハイダ！？」

呆然として動けないあたし達をよそに、マリーが駆け出す…もちろんぐつたりしたまま動く様子のないエイダに向かって。しかしその進路上に、主任が手を広げて立ちはだかる。

主任「3人とも、よく帰ってきた。畳空間に取り込まれながら無事でいたのは

見事としか言ひようが…」

マリー「そんなことはどうでもいいからそこを退いてください…」

顔色一つ変えないどころか薄い笑みさえ浮かべている主任に、何か怪しいモノを感じたあたしはナギサに聞いかけた。

エミリア「…ナギサ、どう思う？」

ナギサ「エミリア、私に推理を求めるな。一つだけはつきりしているのは、

私は今とても虫の居所が悪いといつことだな。」「

ナギサの後ろでこいつそりと、主任から見えない角度で端末のメールソフトを立ち上げる。

宛先はルウ。…本文は、まだ空白のままにしておくけれど。

主任「どうでもいいとはお言葉じゃないか、英雄様？私は…」
マリー「そんなくだらない定型文、どうでもいいです！何でエイダ
が…」「

主任「それは知らんよ。彼女が私に面会を求めてきたんだ。その点
では

私は一切後ろ暗いところはないな。」

それでも尚主任を問いつめ、隙があればエイダのところに向かおう
とするマリーに向かって、主任は言った。

主任「知らん、と言ったんだ。少しば私の話を聞いたりどうかね？」
その言葉で頭が冷えたのか、マリーが一步退く。

「マリー」…解りました。取り乱してすいません。けれど一つ答えて
ください。

何故エイダは縛られているんですか？」

主任「…鈍いものだな、英雄様も。あのマシナリーは君たちへの交
渉材料だ。」

材料、と言う物言いにあたしたち全員の雰囲気が変わる。
…鈍いあたしで解るのだから、相当な怒り。
それを一身に受ける主任はあたしより更に鈍かつたようで、構わず
続ける。

主任「私から君たちへの提案はこうだ。今回のトラブルに関し、私
の非を

追求せず、私の責を一切問わないこと。それと、今この状

況は脅迫ではなく、交渉だ。

…「それを守ると誓つてくれれば、このマシナリーは返却しよ。」

マリー「…責任なんて元から追求する気もありませんでした。だから今すぐ彼女を解放してください。」

主任「どうしてそれを信じてもらいたいと思ったのかね？誓約書でも書いて貰わなければ、信じられるはずがあるまい！…おっと、変な気を起すのはやめておきたまえ？」

マリー、と言つたかな？君が一步でも動けば…

言いながら主任がエイダの横まで下がる。

…そしてエイダに突きつけたその手には、護身用として人気の高いスタンガンが握られていた。

主任「君の大事にしてこむところのマシナリーには壊れてもいい。…」このスタンガンは私の改造がしてあってね。続けて放電すれば

「このような機械ごとき簡単に破壊してやれるのだよ。」

エミリア「ちよつと…? あんたねえ…」

思わず暴言を吐きそうになつたわたしをナギサが片手で制する。だが溜飲は下がらない。「み上げる黒い感情を抑えきれなくなりかけたその時。

ナギサがあたしにだけ聞こえるように小さく囁いた。

ナギサ「…」この状況でここまで静かなマリーが我慢していいはずがない。

ただ静かすぎるのが気にかかるが…エミリア、出来れ

ば今すぐに

主任を恐喝でガーディアンズに通報できないか？」

そう言いきつたナギサの顔も赤く染まっていて、怒りを抑えているのが見て取れる。

他人が怒っているのを見ると怒りが引くといつのは本当のようで、スッと頭から血が引く。

エミリア「わかった。ナギサ…ありがとう。」

冷静さを取り戻している内に、ナギサの陰でルウへのメールを打つ。

『トルウ

今日実施された亜空間軸接続テストの主任から脅迫を受けてる。隠れながら打つてるからいつ見つかるか解らない。出来るだけ早く、ガーディアンズを派遣してほしい。エイダが人質に取られる。脅迫の内容は後で説明する。

エミリア』

主任の様子を見ながら…よし、バレてる様子はない。バレたらエイダがどうなるか解らない。慎重に、端末を操作する。送信のアイコンを押し、顔を上げる。

いつのまにか、マリーの手には一振りの刀が握られていた。見たことがある、あれは確か…真アギト。マリーに言わせると

「これは速く動けすぎて制御しづらいけど、制御しなかつたら対人戦では私の持ち武器の中でも一番強い武器なんだ。」

つて業物。

フォトン属性を持つていなない筈のそれは、縁ではなく妖しく紫に光つてゐるよう見えた。

大気中のフォトンは感情に反応する。つてことは…

主任「…何だねその刀は。早く納めや。」

マリー「…撤回してください。」

主任「は？」

マリー「エイダを物扱いしたこと、撤回してください。」

主任「はあ？マシナリーは機械だらう。機械なのに我々ヒトと同等に扱えど？」

…ハハツ、まさかこれを人質と呼ぶつもりかね？バカバカしい。

さつきも言つただらう、これは交渉材料だと…。」

ぶわつ、とマリーの周囲の空気が膨れ上がつたような錯覚。

…これはヤバい。真剣にヤバい。

エミリア「…ナギサ、提案があるんだけど。」

ナギサ「恐らく、私もそれを言おうと思つていたところだ。」

タイミングを合わせ、私たちは同時に言つた。

「…今すぐここから離れよ。」

マリーのことだ、どんなに周りが見えなくなつてもエイダのことは傷つけないだらう。

けれど…なまじ動けてしまうあたし達はその対象に入らないかもしない。

息を合わせ、あたしとナギサは踵を返して来た道…航行船へと続くドアを潜り抜けた。

ナギサ「…」
エミリア「え？、あやあ！」

ナギサに引きずり倒され地面に滑り込む。その直後。
キン、と言う音が鳴ったかと思うと、あたし達の頭上を轟音とともに風が駆け抜けた。

伏せたまま田線だけを上げて壁を見ると、横一直線に黒い跡が残つ
ている。

…これは言わずもがな、武器のリーチを大幅に越えている。
恐らく爆発した感情がフォトンを巻き込んで…これは、主任の命が危ないかも。と思った次の瞬間。

主任「うわ…うわあああああ！」

モニタールームから主任の叫び声が聞こえてきた。良かつた、生き
てる。

…息をついている余裕はない。あたしは、伏せたままの姿勢でルウ
に直接通信を入れた。

ワンコールでルウが出る。

ルウ『エミリア、今ちょうどあなたのメールを読んでガーディ
アンズを派遣したところです。

総合調査部で手が空いていたのでルミアの教え子が三名を
ちらへ向かいました。』

エミリア「いやいやいや無理無理！その人達引き返させてー！」

ルウ『Hミコア、急いでいるのでは？意図が理解できません。』

Hミコア「状況が変わったの！とりあえず用意できる最高の戦力用意して！」

ルウ『…詳しくお願ひします。』

Hミコア「マリーが本気で怒っちゃって周り見えなくなっちゃってるの…

あたし達じゃ手がつけられない！被害を増やすだけだからその人達はやめてあげて！』

ルウ『了解しました。今そちらに対マリーさん用の最高戦力を向かわせます。

特別航路で向かわせますので待機時間は五分程度です。それでは。』

Hミコア「無茶言つて、ゴメン！ありがとー。」

通信を切ると、神妙な顔をしてナギサが「ひらきのぞき込んだ。

ナギサ「Hミリア、私たちも向かおう。」

Hミコア「…せめてガーディアンズが来てからにしよう。」

あたし、今のあのマリーと対峙して勝てる想像ができるない。』

きない。』

ナギサ「…歯がゆいな。」

Hミコア「…ナギサ、あたしに時間の余裕ができたら特訓お願ひしている？」

ナギサ「ああ。私からも頼む。」

強くなつたつもりだった。でも、あたしはやつぱりマリーの力には

遠く及ばない。

それが悔しくて、情けなくて。

…あたしは、這いつぶばつたまま床を殴りつけた。

H//リア「…何かおかしい」（後書き）

今回も読んでくださいありがと「ひざむこまゆ」（—）

空白、改行込みで「00000v e」…長い…ですか？

何だか最近どれくらいが長くてどれくらいが短いのか解らなく…

@—@:-)

少し書き方変えてみたので今回の方がいい、前回までの方がいい、どっちでも変わらない、など何かご観想いただけすると嬉しいです（汗
それではまた！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2686v/>

PSPo2i－英雄、その後

2012年1月8日22時56分発行